

本邦地理詳説



23-257

女子高等師範學校教授

野口保興校閱
中村士德校閱
大久保千濤合著

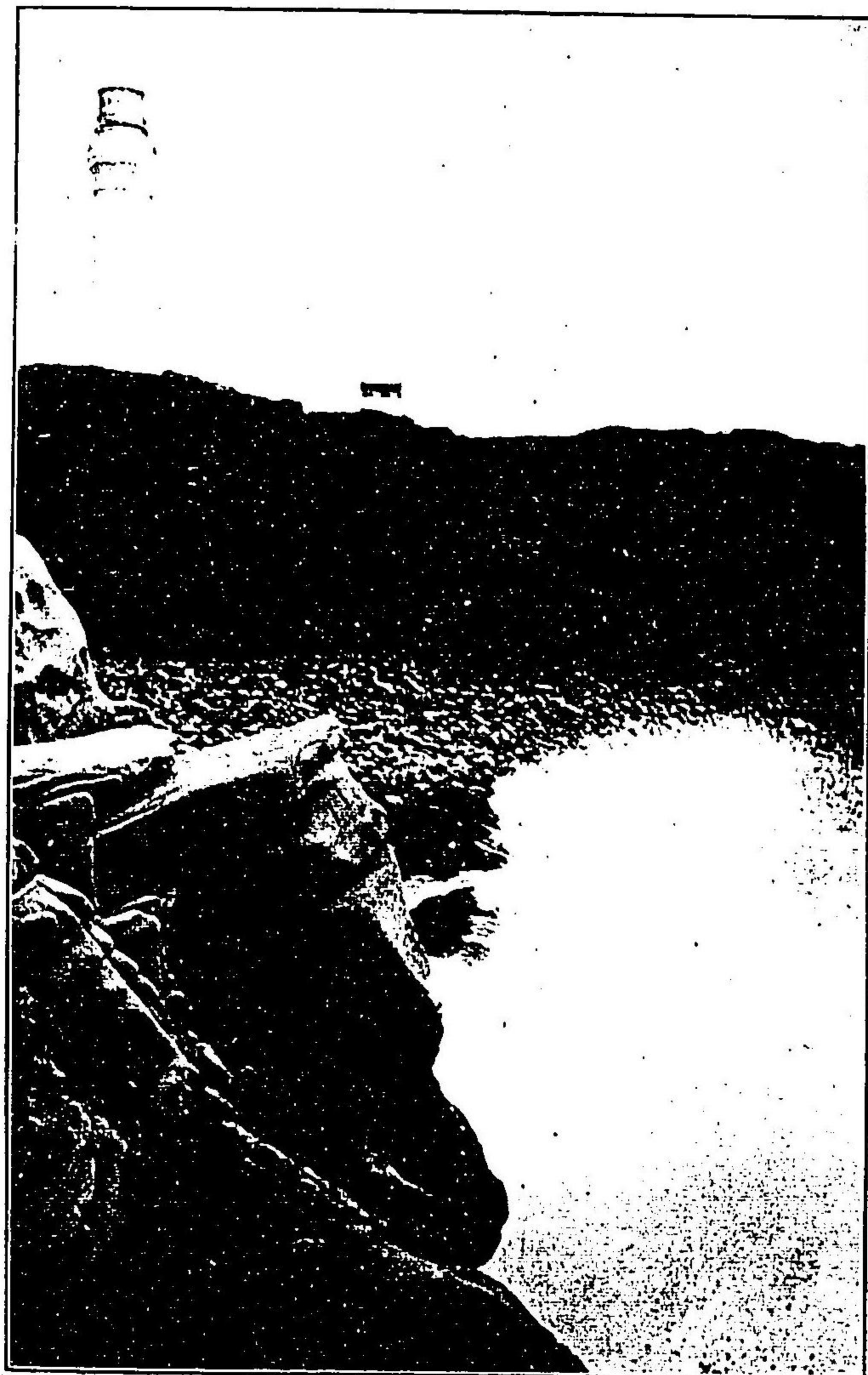
第一版

明治
39 6 23
內交

本邦地理詳說

東京博文館藏版

千葉縣犬吠岬燈臺の景

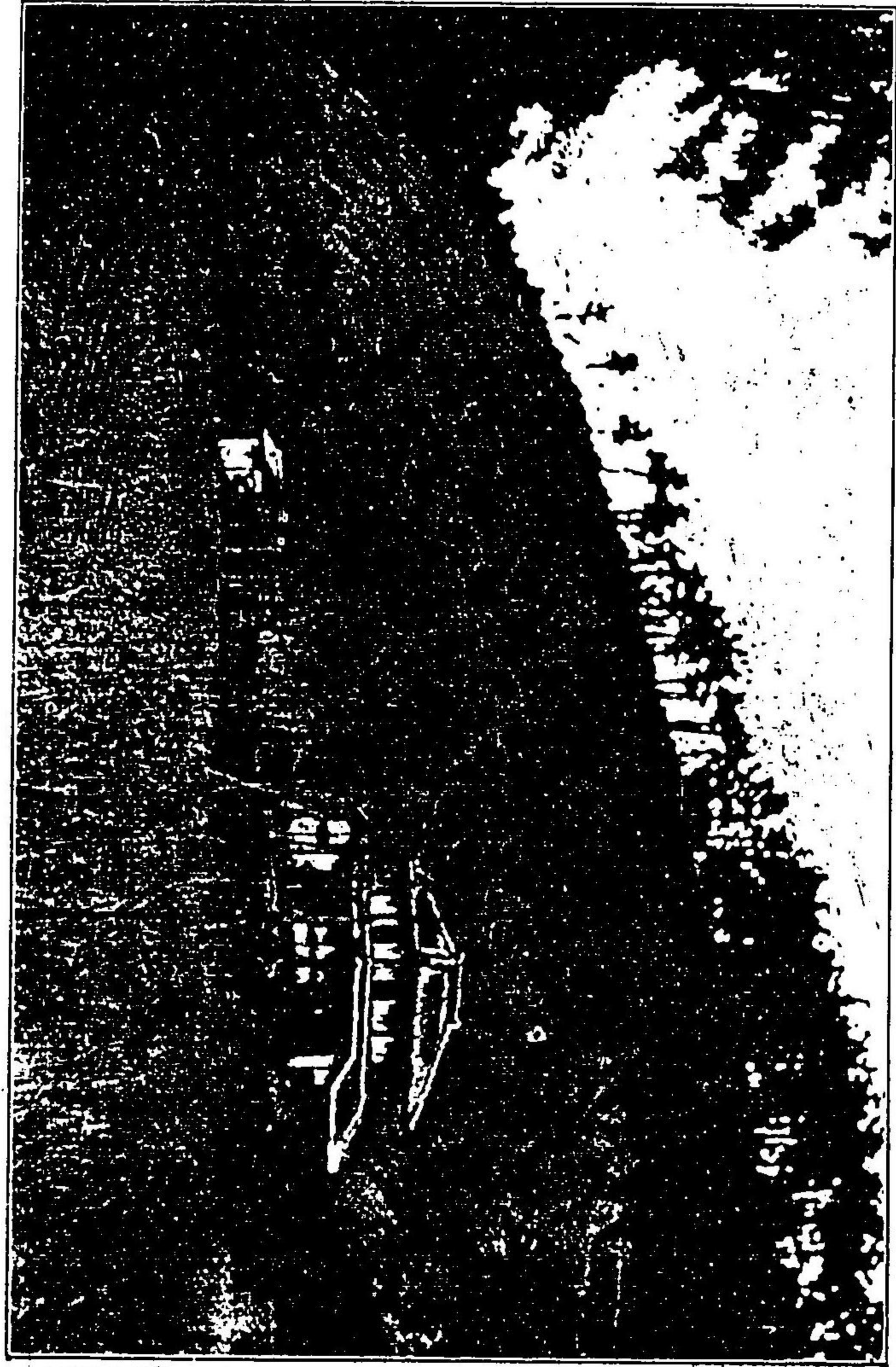


(旅友寺田憲君撮影)

景の湖寺禪中縣木柁



穴百の見吉縣玉埧

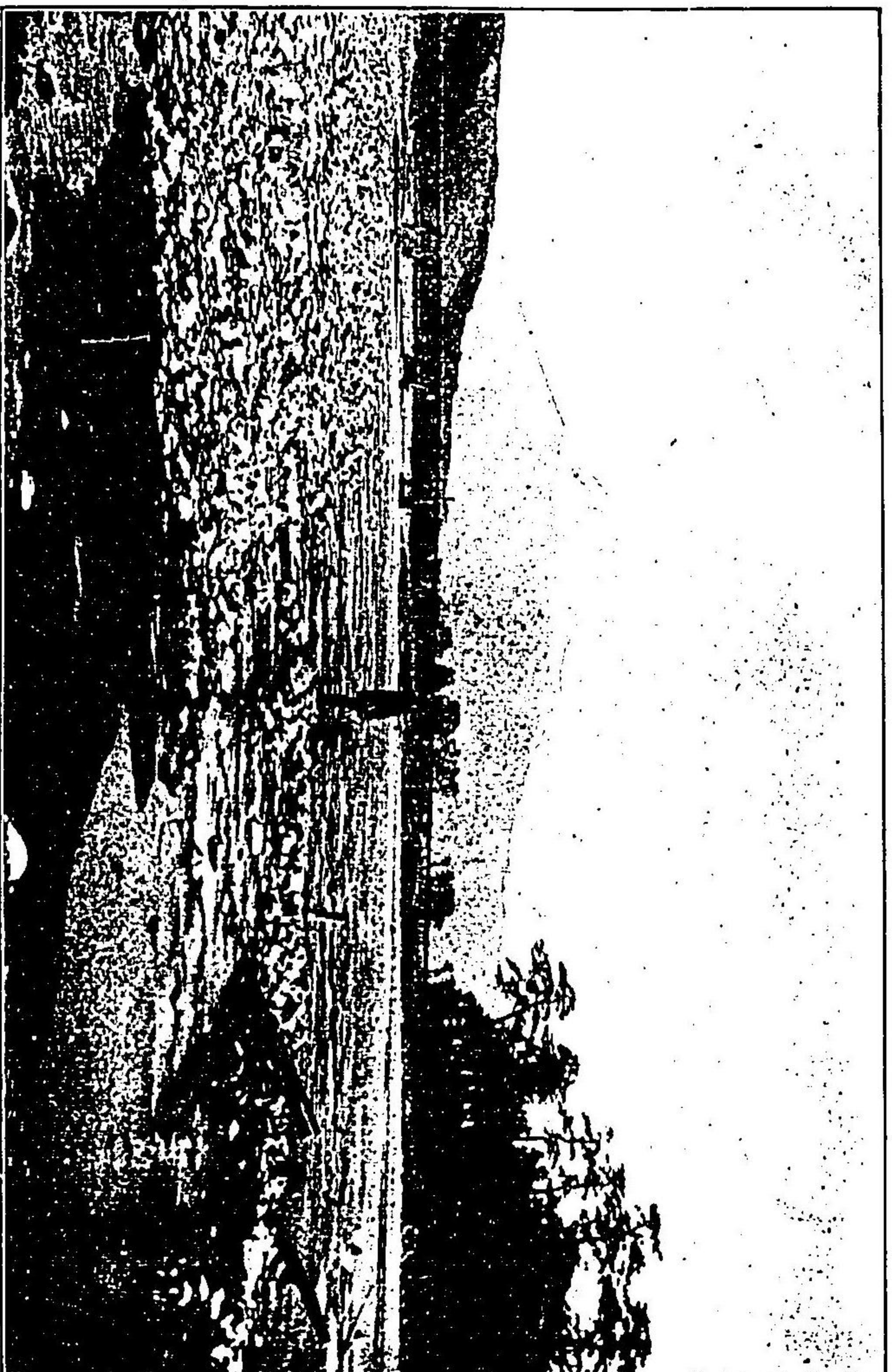


跡遺の園主天城原田小縣川奈神



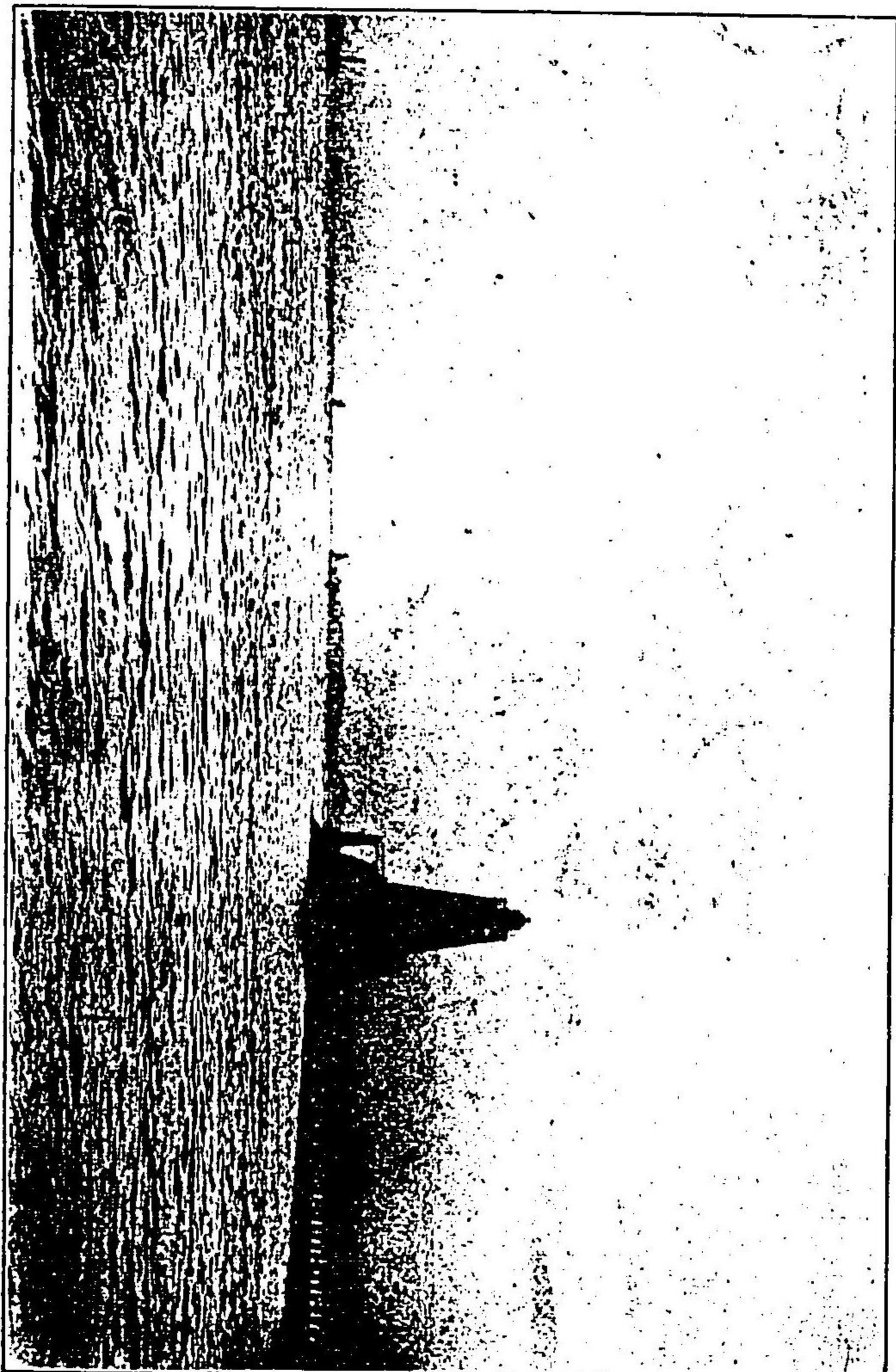
(彩權氏郎五命森大士學文)

景の川土富縣岡靜

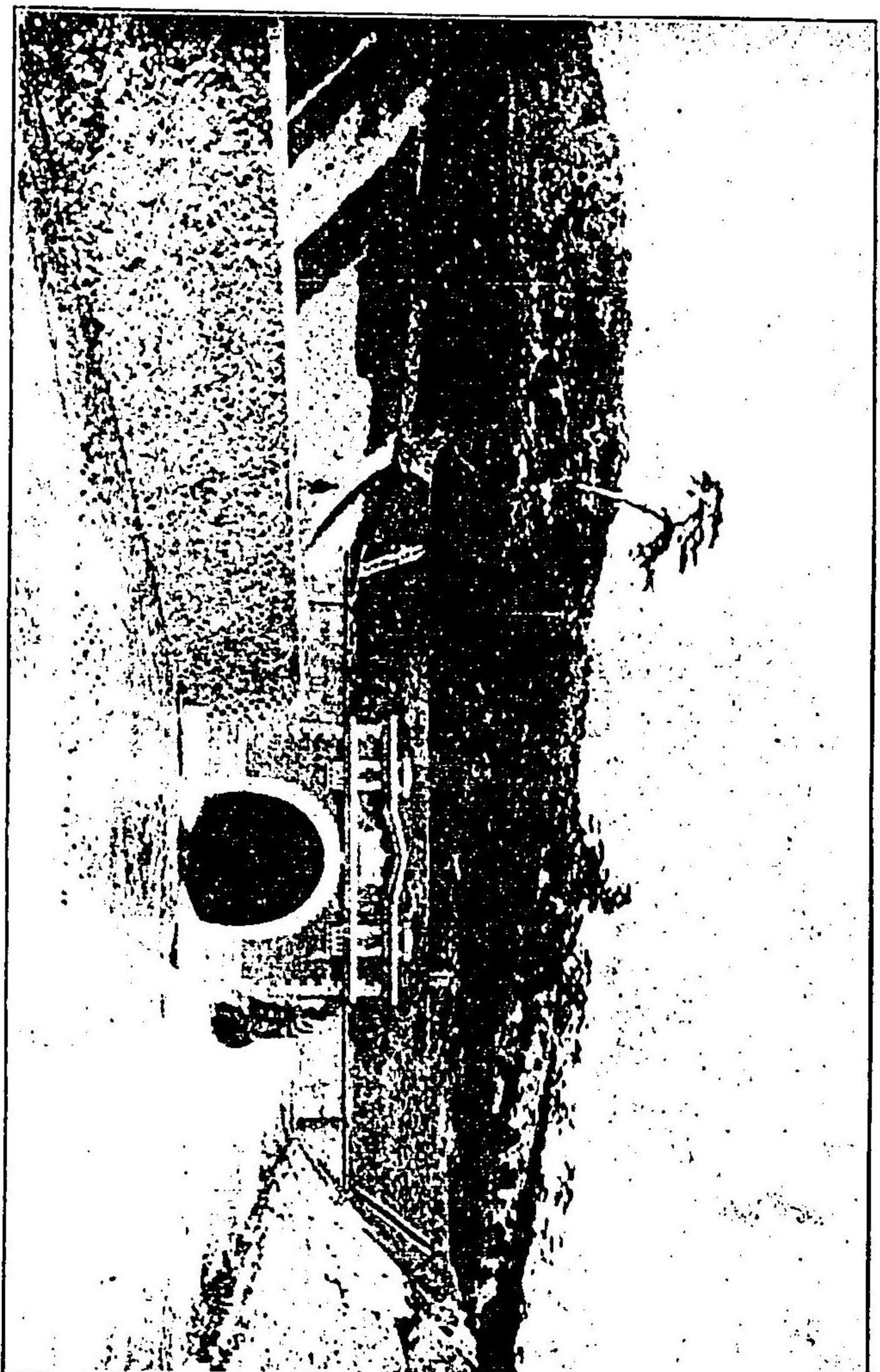


(贈寄氏耶次津原編)

大坂府堺の全景



兵庫縣新湊川會山下墜道口





序

中村士徳大久保千濤兩君は、夙に志を地理學に立て、其の專攻に從ふ事茲に年あり。頃日一書を携へて余が柴門を叩き、弁言を余に求む。予之を一讀するに、本邦地理詳説にして、材料の豊富、配列の秩序、眞に其の名に背かず。方今社會の進歩に伴ひ、學界從つて發達し、著書の數目を逐うて其の多きを加へ、就中地理書の如き決して少なしとせず、されど或は繁に偏して冗漫に流れ、然らずんば簡に失して明晰を缺くの嫌あるを免れず。今此の書を閱するに繁簡其の宜しきを得、且つ加ふるに斬新の材料に基き、吾人生活上必須の點を摘載し、以て日進月歩の大勢に後れざらん事を期したるは、余の最も歡迎して止まざる所、思ふに地

高知縣浦戸の全景



序

中村士徳大久保千濤兩君は、夙に志を地理學に立て、其の專攻に従ふ事茲に年あり。頃日一書を携へて余が柴門を叩き、弁言を余に求む。予之を一讀するに、本邦地理詳説にして、材料の豊富、配列の秩序、眞に其の名に背かず。方今社會の進歩に伴ひ、學界従つて發達し、著書の數日を逐うて其の多きを加へ、就中地理書の如き決して少なしとせず、されど或は繁に偏して冗漫に流れ、然らずんば簡に失して明晰を缺くの嫌あるを免れず。今此の書を閲するに繁簡其の宜しきを得、且つ加ふるに斬新の材料に基き、吾人生活上必須の點を摘載し、以て日進月歩の大勢に後れざらん事を期したるは、余の最も歡迎して止まざる所思ふに地

理學の研究日々に盛んなる今日にあたり、此の書の出づるは、斯界の爲め大に賀せざるべからず。予兩氏の勞を謝し、且つ一言を草して、本書の價値を大方の人士に紹介すと云爾。

明治三十九年五月

野口保興識

自序

地理學は日新の學科にして昨日珍奇とせられしも今日に到りては既に陳腐となり。今日事實とする者も明日は誤謬と發見せらるゝ事あり。故に方今の如き日進月歩の社會に於て逐一斬新の材料に基き完全なる地理書を編纂せんとするは到底不可能に屬し且つ其の完備を望むは恰も是れ空中蜃氣樓に對するが如し。然るに著者此の意を解せず徒らに自己一定の目的を以て、既往の經驗に則り此の著に従ひしは既に誤れるの企業と云ふべし。されど決意筆を駛せしに果して其の要部に到れば複雑と難關とに遭遇しぬ於是斯業のさまで容易ならざる事を知り氣大に萎縮したりしと雖も。幸ひ先輩諸氏は懇篤に指

導せられて此の業を進められ。學友は自己一身の要務を捨てて以て親しく此の稿を助けられ。茲に初めて此の書成る。然れども稿成つて今日に到れば最初の素志と目的とを比せんに猶夫れ龍頭蛇尾に終るの嫌なきにあらざるなり。讀者諸彦希くば本書の爲め否洽く學界の爲め予輩が許に忠言を垂れ給はんことを。

明治三十九年五月

著者識

凡例

- 一 本書は中等日本地理教科書に準據し専ら師範學校中學校高等女學校其の他同等の智識を有する者の參考に供し併せて中等教育の地理科教材資料になさんが爲め編纂したる者なり
- 一 本書記述の順序は地理學概論を先にし次に日本帝國の概觀に及び終つて地方誌に到る是れ著者が多年の研究と經驗に基ける結果なりとす
- 一 人口産物等總て統計に關する者は最近の調査に準せり其の年次に到りては簡を取りて繁を避けし者なり
- 一 本書編纂中は日露干戈の當時にして軍事に關すること往々其の精細を知る能はざりしは甚だ遺憾とする所なれども他日訂正の曉を待つて充分調査することとせり
- 一 本書の卷尾に附録として樺太島地誌を掲げたり蓋しポーツマウス條約によれば北緯五十度以南を以て我が領國とすと雖も吾人が知るべきことは單に其南

半のみに留まらざれば茲には特更に全島に就き其の概畧を縷述したり
明治三十九年六月

著者誌

謹んで謝意を表す

本書編述に當り直接間接先輩知友の助力を受けしこと尠からず依つて今茲に本書を
公にするに際し先輩知友の芳名を列記し謹んで謝意を表すと云爾

- | | |
|--------|---------|
| 林 千之助氏 | 土居千代三氏 |
| 大森金五郎氏 | 内山正 如氏 |
| 野口保 興氏 | 山上萬次郎氏 |
| 牧口常三郎氏 | 福原潛次郎氏 |
| 寺 田 憲氏 | 佐藤 傳 藏氏 |
| 三宮元 勝氏 | 木村美 生氏 |
- (順ハロイ)

本邦地理詳説目次

第一編 總論

第一章 地理學

地理學の定義——地理學の類別

第二章 数理地理學

太陽系——太陽と地球との距離——地球の形狀——地球の大きさ及び區別——地球の自轉——地球の公轉——晝夜の長短——四季——方位——緯度と經度——地球儀と地圖

第三章 自然地理學

地殼の發育——地殼——陸と海——大陸——島嶼——半島地角及び地峽——海洋——海洋の形狀——海流——潮汐——海岸線——山嶽——谿谷——火山——噴氣孔及硫氣洞——溫泉——地震——河川——平地及び高地——氣溫——風——雨雪——氣候——天産物

第四章 人事地理學

人類の區別——文化——言語——宗教——政治——兵備——産業

目次

目次

第二編 大日本帝國總說……………三

第一章 大日本帝國自然地理學……………三

位置—帝國の極點—四隣—廣袤—面積—島嶼—半島—地角—地畷—領海—海流—洋流—海峽—海岸綫—我が國土地發育—我が國地質構造—火山脈—火山—溫泉—地震—河川—湖沼—地勢—氣候—溫度—雨雪—日本風—天産物

第二章 大日本帝國人事地理學……………一〇二

種族—氣質—衣服—食物—家屋—族制—人口—教育—宗教—政治—立法—司法—行政—行政區劃—財政—兵備—外交—農業—牧畜業—養蠶業—鑛業—山林業—水産業—工業—商業—交通業

第三編 大日本帝國地方誌……………三〇七

第一章 關東地方概說……………三〇七

境域—海岸—地勢—河川—風土氣候—交通—産業

第二章 關東地方諸誌……………三二〇

東京府—神奈川縣—埼玉縣—千葉縣—茨城縣—群馬縣—栃木縣

第三章 奧羽地方概說……………三九九

境域—海岸—地勢—河川—風土氣候—交通—産業

第四章 奧羽地方諸誌……………四二三

福島縣—宮城縣—鹿角縣—青森縣—秋田縣—山形縣

第五章 東海地方概說……………四四七

境域—海岸—地勢—河川—風土氣候—交通—産業

第六章 東海地方諸誌……………四六三

長野縣—山梨縣—靜岡縣—愛知縣—岐阜縣—三重縣

第七章 北陸地方概說……………五〇八

境域—海岸—地勢—河川—風土氣候—交通—産業

第八章 北陸地方諸誌……………五二〇

新潟縣—富山縣—石川縣—福井縣

第九章 近畿地方概說……………五六一

境域—海岸—地勢—河川—風土氣候—交通—産業

目次

第十章 近畿地方諸誌……………五五

滋賀縣—京都府—奈良縣—大阪府—兵庫縣—和歌山縣

第十一章 中國地方概說……………六四

境域—海岸—地勢—河湖—風土氣候—交通—產業

第十二章 中國地方諸誌……………六五

岡山縣—廣島縣—山口縣—島根縣—鳥取縣

第十三章 四國地方概說……………六五

境域—海岸—地勢—河湖—風土氣候—交通—產業

第十四章 四國地方諸誌……………六六

德島縣—香川縣—愛媛縣—高知縣

第十五章 九州地方概說……………六八

境域—海岸—地勢—河湖—風土氣候—交通—產業

第十六章 九州地方諸誌……………六九

福岡縣—佐賀縣—長崎縣—熊本縣—大分縣—宮崎縣—鹿兒島縣—沖繩縣

附錄 樺太島略誌……………七九五

第一章 發端……………七九五

第二章 樺太島歷史……………八〇一

第十七章 北州島地方概說……………七五

境域—沿革—海岸—地勢—河湖—氣候—人口—土人種族—行政—交通—產業

第十八章 北州島地方諸誌……………七五

四部區域—南部區域—北東區域—千島列島

第十九章 臺灣島地方概說……………七六

境域—沿革—海岸—地勢—河湖—氣候—人口—土人種族—產業—行政—財政—交通—產業

第二十章 臺灣島地方諸誌……………七六

北部區域—中部區域—南部區域—東部區域—四部區域

目次

第三章 樺太島地理……………六二

島名—位置、境域—面積、區劃—海岸—地勢—河湖—政治—氣候—住民—交通—
都會—産業

本邦地理詳説目次終

本邦地理詳説

女子高等師範學校教授

野口保興校閱
中村士徳
大久保千濤 合著



總論

第一章 地理學

一 地理學の定義

地理學は吾人人類の住所として地球全體に關する種々の事項を論じ、吾人生活上地球表面萬般の状態を説明する學科なり。換言せば、地理學は只に自然なる海陸山川氣候生物等の異同分布を觀察するに止まらず、尙ほ一步進んでは、一般人類種土俗生業等の如き、吾人の生活に關係する事項を研究し、論ずる所の

第一章 地理學

學科なり。故に吾人苟も生を此の世に享く、須らく地理學を研鑽して、地球の表面状態を觀察し、以て其の國其の風土を是認し。之を小にしては自己一身の所に鑑み、大にしては國家の富源強勢を計らざるべからず。蓋し其の徑路計策に到りては、地理の學科舉つて力ありと云ふ可し。

二 地理學の類別

夫れ地理學は、只に地球表面上の状態を觀察し研究するのみならず、尙ほ人類の行爲に影響を及ぼし、吾人生活上に多大の關係を有するを以て、複雑極まりなく異種異類の事物を分括し、從つて他の學科諸般と關聯し交渉して之を講究せざるべからず。故に、其の關聯と交渉する學科の如何により、勢ひ數種類に分別せざるべからず。即ち普通之れを分かつて、**數理地理學**、**自然地理學**及び**人事地理學**の三種となすべし。

數理地理學は、地球を以て天體の一となし、其の形狀大小位置及び運動等相互の關係を論ずる者にして、又た之を**天文地理學**とも稱す。自然地理學は、専ら地球自然の状態、區別其の關係等を説明する者にして、彼の海陸の關係、大氣の區別

數理地理學

自然地理學

人事地理學

恒星

遊星

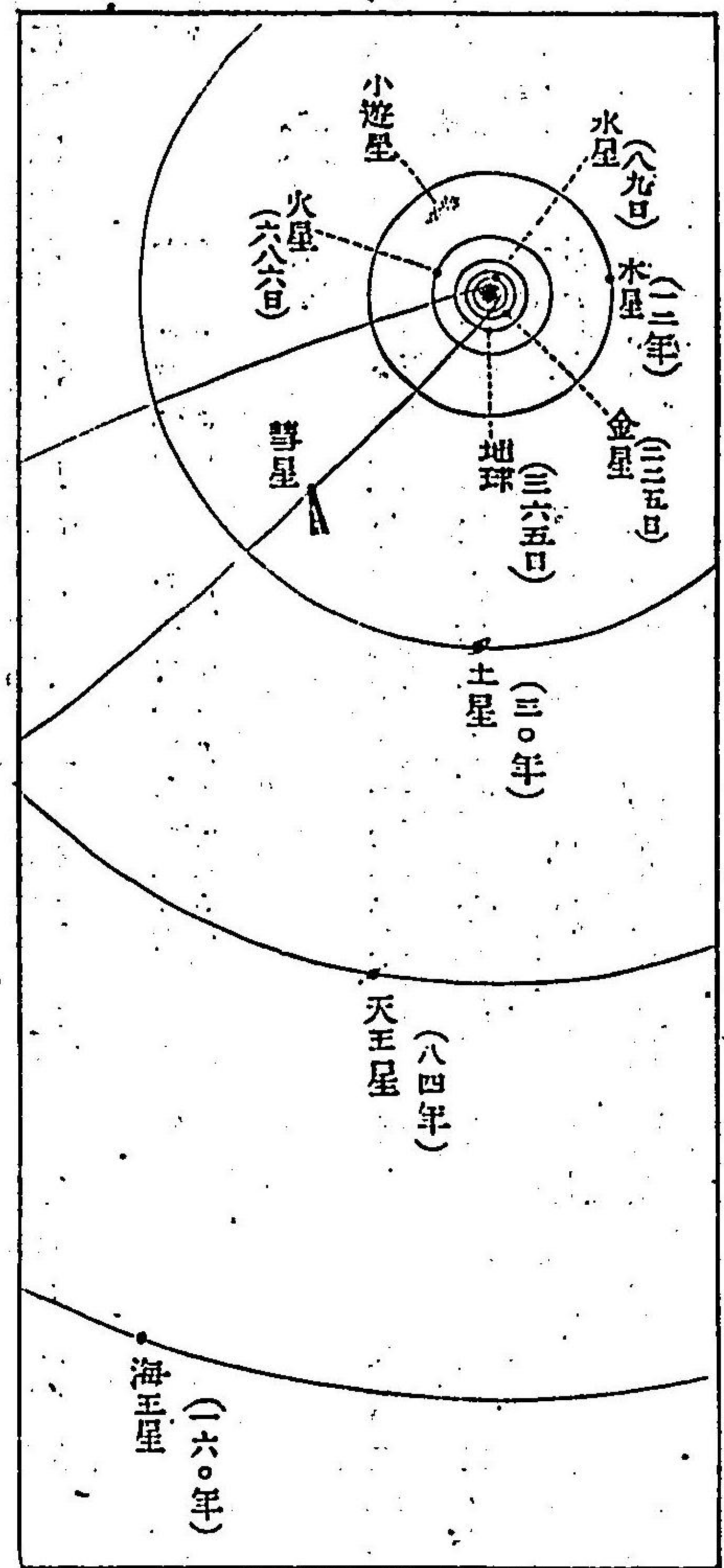
を論ずるが如き是なり、故に之を**天文地理學**又は單に**天文學**と稱す。人事地理學は、地球を以て吾人人類の生活場とし、其の國狀其の區別を説き、併て其の人類の移動、階級、風俗、習慣及び生業等、専ら生存競争に關聯する事項を攻究する者なり、故に或は之を**政治地理學**、**經濟地理學**の二種に分類するも敢て不可なきなり。

第二章 數理地理學

三 太陽系

天氣晴朗の夜、仰ひて天を望視すれば、幾千萬の星は光彩を放ちて羅列群集し、恰然銀砂を宇宙に拋棄したるが如く、其の大數は毫も相互の連絡なく、一定不變の位置を以て大空に執着せる感あり。是れ**恒星**と稱し、太陽も亦其の一にして、恒に位置を變せず、不動の體を以て自から光を放ちて照耀す、如此き者其の數幾百萬なるや知る能はずと雖も、現在凡そ七千餘と注せらる。尙ほ更らに眼を轉じ、之を熟視すれば、一定の位置なく自から群をなして**恒星**の間を徐行し運動するものあり。之を**遊星**と稱し、我が地球も亦其の一にして、自から光を發せず

太陽の光を受け、初めて耀く者、是れ等は皆太陽を中心として其の周囲を運行し、所謂太陽系を構成す、其の分子は遊星の外、慧星、隕星あり。



太陽系

遊星の數

大遊星

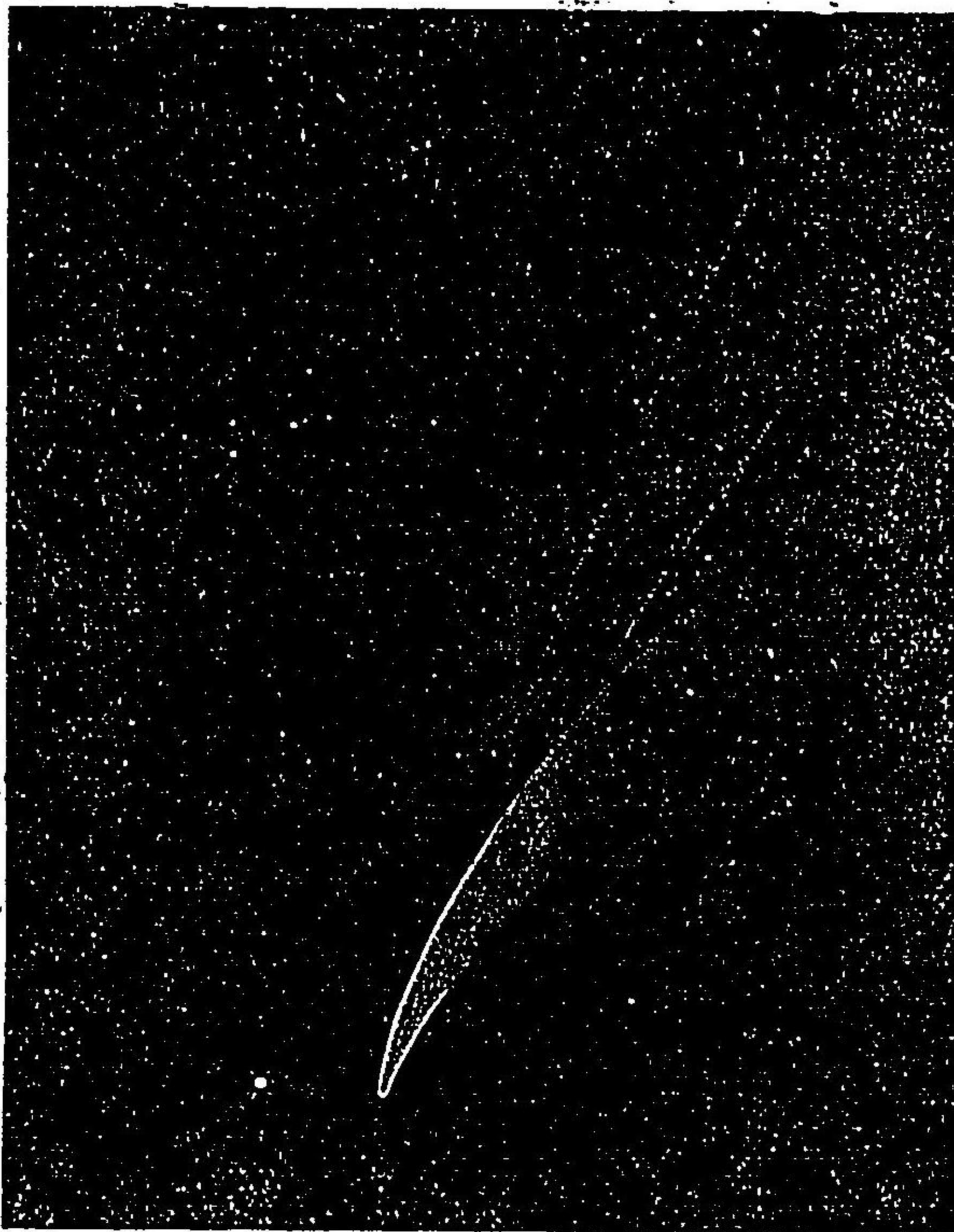
小遊星

星は、形ち大にして更らに内遊、外遊の二者に區別せらる、總數八個ありて、水星金星地球、火星を内遊と云ひ、木星、土星、天王星、海王星を外遊といふ。通常大遊星は單に遊星と稱せり。小遊星は形ち小にして其の數現在發見にかゝる者、凡そ四

遊星

は、其の形の大、小により、大遊星と小遊星とに分かれ、大遊

彗星



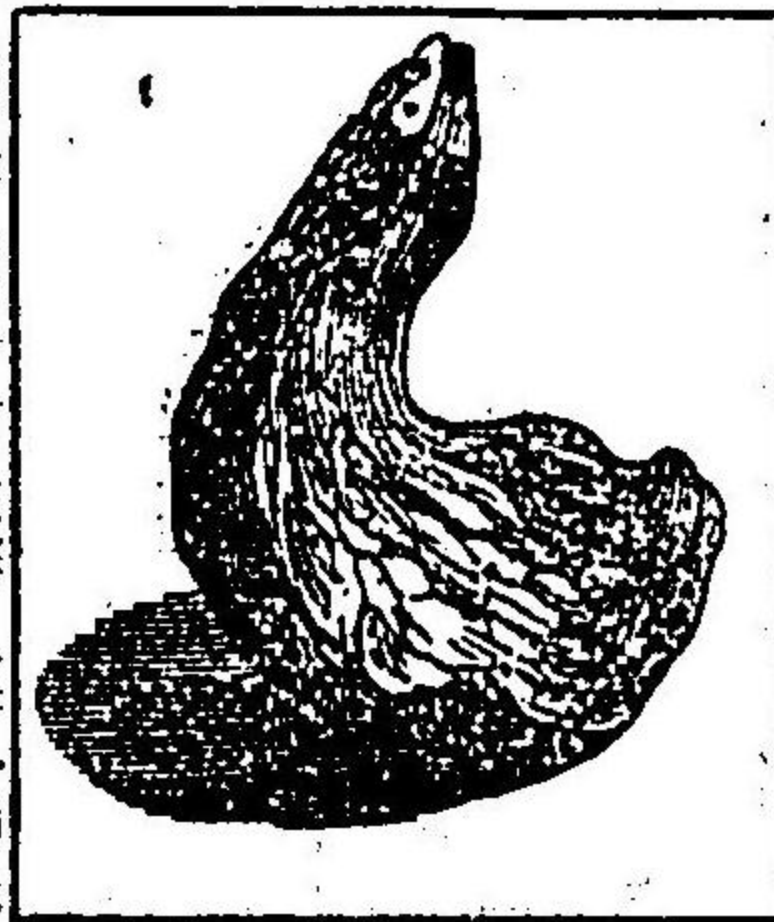
百六十有餘あり共に火星と木星との間を運行せり。而して尙ほ重なる遊星には、之を中心として更らに其の周囲を運行する衛星あり、是れ所謂月と稱する者にして、其の總數二十二個あり、地球、海王星には各々一個。火星に二個。天王星に四個。木星に五個。土星に九個あり。

彗星は、俗に彗星と稱し、普通頭尾二部よりなれる天體にして、頭部は霞の如き狀を呈し、其の中心に核あり、尾は長く、箒の如く、其の形ち一種異様を呈せり。隕星又流星は、小さき天

本邦地理詳説

體にして我が氣圈に入り地球の引力を受けて落下する者我が大氣中に飛行し來たれば速力大なるより之れと摩擦し、光熱を放ち終に瓦斯體と變じて尾を引

隕石



くに到り、隕星の地表に落ちたる者を隕石と稱す。隕石には、其の種類二つあり、一を隕石と稱して鐵の成分少なく、他を隕鐵と稱し鐵の成分多量なるものなり。如斯く我が太陽系の各遊星彗星隕星は皆太陽を中心とし、東より北、北より西に楕圓形の軌道を取りて回轉す、故に其の各軌道は互に相併行せる一

楕圓環と見るべきなり。

太陽系は、太陽を中心とし遊星之れに伴ふ者とせば、宇宙の恒星は、皆我が太陽に均しき者なるを以て、宇宙大空には無數の太陽系ありと云ふべし。而して、太陽系の構成に關し、古來學者間に數説行はれて一定する所なかりしが、十八世紀の中葉、カント及びラプラスの大家の唱導せし、所謂霞雲星説は、以て其の正説を得たるものとし、今日は之を確論となせるが如し。即ち宇宙大空には、初め霞雲

星の如き瓦斯體の大塊ありて、非常の光氣と熱度を有し、以て西より東して旋轉したりしが、其の運行する際、遠心力強大なる爲め、漸次分離して其の周圍に帶狀の環を生じ、各環は更らに又た分離して小塊となり、共に中央の瓦斯體を中心とし、其の周圍を運行旋轉する者にして、其の殘餘たる瓦斯體の大塊は、乃ち今日の太陽なり。而して、其の分離せる小瓦斯體の塊は、次第に冷却して液體となり、後ち更らに其の表面に固體の皮膚を生じ、以て中心の瓦斯塊の周圍を運行する者、即ち是れなり、今日の遊星にして、實に我が地球も其の小團塊なりとす。

四 太陽と地球との距離

太陽は、吾人に取りて最も貴重なる天體にして、諸般の現象の本源なり。蓋し其の然る所以は、我が地球に引力と光熱を供給する所以なり。而して、其の光熱の強大なる事は、實に愕くべく、彼のゾロ子の計算によれば、滿月光の凡そ六十一萬九千倍。木星光の凡そ五億倍なりと、蓋し其の光熱の強大なるは、我が地球に近き意味を含むなり。今太陽と八遊星との距離を細視すれば、水星百四十七萬里餘にして、金星は二千七百五十萬里餘、地球は三千八百萬里餘にして、火星は

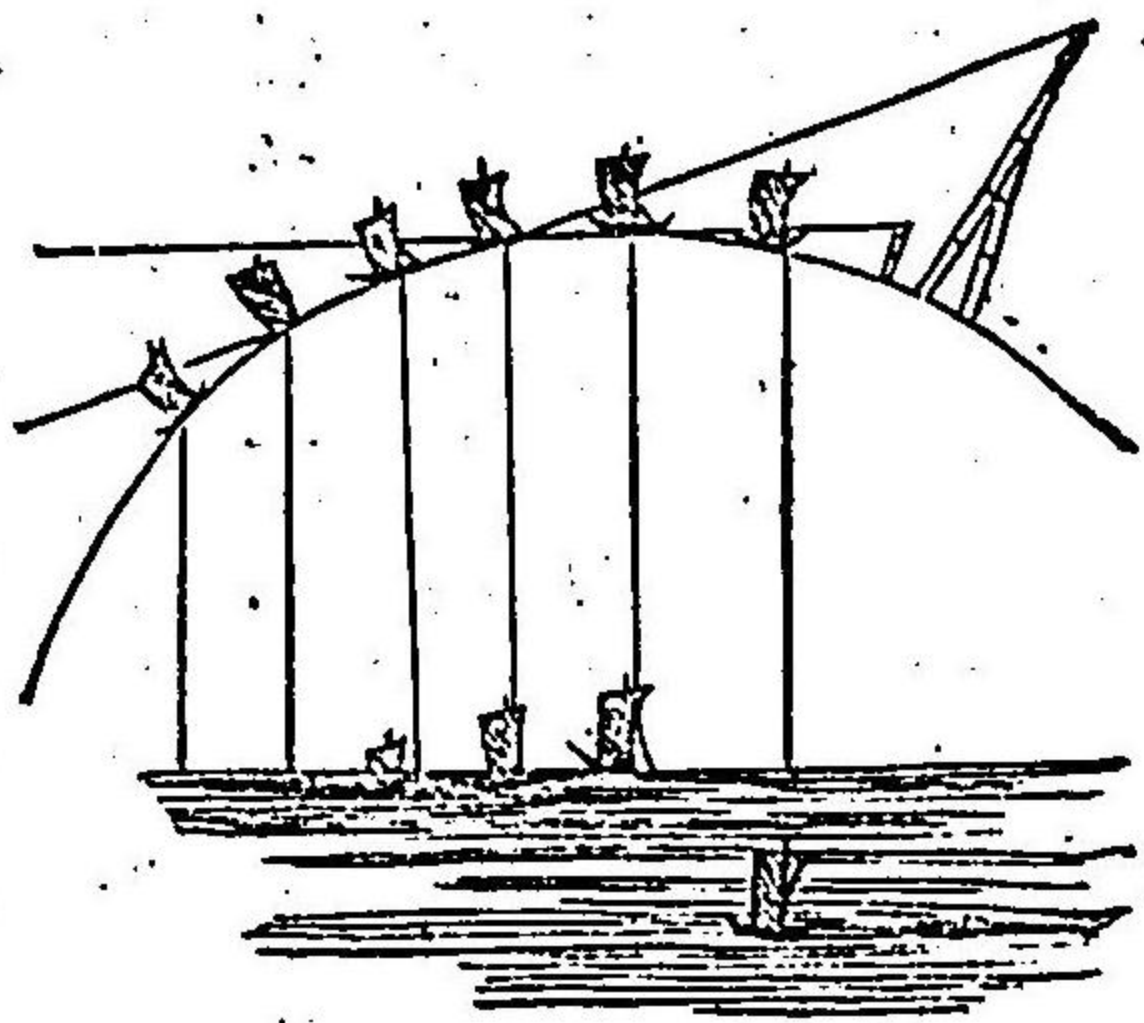
五千七百八十萬里餘、木星は一億九千八百萬里餘にして、土星は三億六千二百九十萬里餘、天王星は七億二千九百萬里餘にして、海王星は十一億四千一百万里餘なりとす。是れによりて之を見れば、我が地球は其の距離の第三位にあるを以て、他の遊星に比すれば寧ろ近き方なり。然れども其の間の光は、凡そ八分時後にあらざれば、我が地球に達せず、今こゝに一時間十四里晝夜兼行三百四十里走る汽車ありとせば、凡そ三百餘年を以て太陽に着するを得るべく、かくて吾人は太陽と地球との距離遠なることを知りて、太陽光熱の強大なることを推測して餘りありといふ可し。

五 地球の形状

吾人が棲息する地球は、其の名の示すが如く球状なり。然れども、今試みに平野に立ち四方を望観すれば、眼に入るもの惣て平垣偏平にして、毫も彎曲なきが如し。されば古代野蠻未開の時代は、地球を以て平垣不動體となし、日月星辰は皆共に朝東天に出て、夕西山に没する者とせり。然れ共争ふ可らざる幾多の證據あれば、二千餘年の昔既に地球に關し、研究する者ありて、其の球圓なることを論

地球球状の立證

地球球状の立證



述したりしと雖も、先入主となりたる當時の人民は、之を信せず却て座上空論邪説として、冷笑に伏したりしが、十五世紀頃に到り、文藝の復興科學の進歩磁針器の完備は、地球に關する智識の發達を促がし、彼の有名なるコロンパスは專心地球の圓形説を主張し、海を航して東方インドに往かんと欲し、スペイン國王の後援を得、西航數日終に新大陸を發見しぬ。されど、尙ほ地球圓形説は依然として世上の嘲笑談話の間に没せられしが、西紀一千五百二十三年ポルトガル人マゼラン氏が世界を一週するに及び、茲に社會は積年の迷信を解悟し、數歳の誤謬を氷解し、初めて地球圓形説は確論となり、今日に於ては何人か又た之を疑惑する者なきに到れり。

地球圓形の證説として、數多是れあり、就中其の主なる者は、一、海濱に立ち船舶の出入を見れば、其の遠近に従ひ觀望の部分を異にし、來る時は煙霧に初まり、次ぎに船檣船體と

本邦地理詳説

なる、之れに反し、去る時は船體より煙霧となり、終に消滅す。

二、南北地を異にすれば、北極星の高度を變じ、南行する時は、其の高度減少し、北行する時は、次第に増加し、終に頭上に之を見るを得べし。

三、地球の一點より、同じ方向を取り、一心に進行すれば、數十日後再び其の一點に復するを得べし。

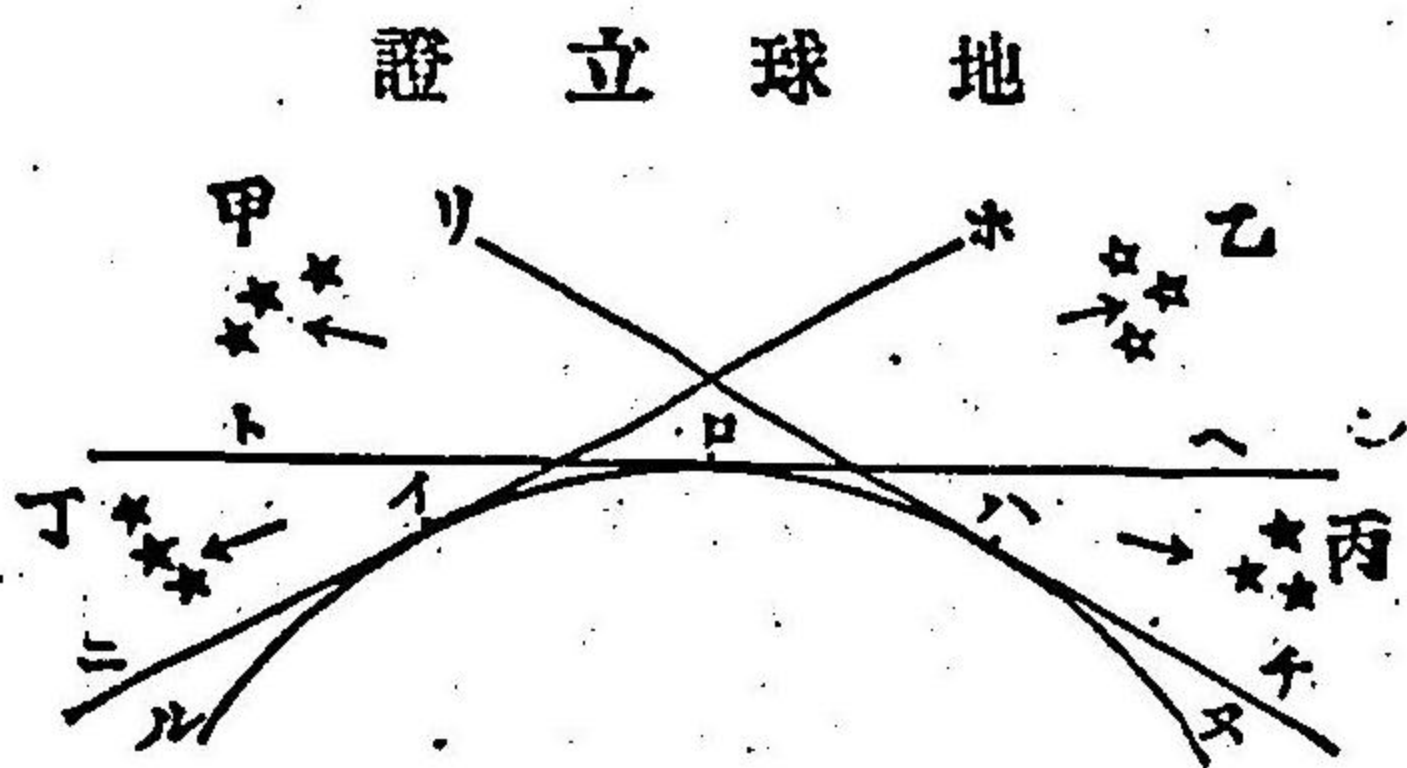
四、地球表面に於て、圓形の物を映する物體は、球體の外にあらざるなり、されば彼の月蝕の際、月面に映する地球の陰影の、常に圓形なるは、蓋し地球圓形の結果なり。

五、平野に立ち四方を觀望すれば、天空漸次低くなり、終に天地相接して一線圖をなす、是れ地平線と稱する者にして、觀望者の位置高低により其の廣狹を異にす。

六、地平線は地球上何れの點何れの場所に於ても、常に圓線にして圓形なり。

以上諸種の事實は、正に地球立證と看做すべきなり。

然れども、近來學術の進歩科學の發達に伴ひ、地球は純然たる球圓にあらざりて、少しく南北に平坦なる楕圓形なる事を知れり。蓋し昔日之を唱へたる者な



きにあらざりしが、其の立論の不成、立證の不十分は、以て當時之を信據する者なかりき。然るに、西紀一千六百七十二年、佛國リジエルの遠征隊が、南米カイエンに於て、振子運動の方向を實驗するに及び、大に世上の注目を惹き、次いでニュートン引力説を論述し、之を證明するに當り、益々其の實際なる事を觀破せり。

即ち、若し地球にして球形ならん乎、緯度一度の長さは、各地各部に於て相均しかるべきに、實は赤道地方に短かくして、極地に於て長く、又た地球の引力は、赤道地方に小にして、極地に大なるは、是れ振子の正しく示す所なり。故に、今此等の立論證說によりて計算する時は、地球は其の半徑南北兩極に短かき、東西赤道に長き、扁平楕圓體なる事を明かにせり。されど、實際其の半徑の差は、甚だ微細にして、僅かに三分の一に過ぎざる殆んど球形に近き者なりとす。

六 地球の大きさ及び區劃

地球の形狀は、球體なりと雖も、實際に於ては南北に平き楕圓形なり。されば地球の直徑は、其の部分により、多少長短あるべき者にして、地球を南北に貫く最長の直徑は、是れ地球自轉の軸心にして、之を地軸と稱し、其の長さ凡そ三千二百

兩極
赤道
北半球
南半球
四半球
東半球
北回歸線
南回歸線
北極線

本邦地理詳説

三十七里餘あり。尙ほ地球直径の最長なる者は凡そ三千二百四十八里餘あり。故に其の差は僅かに三分の一即ち十一里餘なりとす。而して、地軸の兩端を兩極と稱へ、兩極より同距離の點を連結する最大圏を赤道と稱し、長さ凡そ一萬二百十里餘あり。地球の面積は、凡そ三千三百萬方里餘なりとす。

赤道は、兩極より同一の點を連結したる者にして、地球は北半球と南半球とに等分せらる。又た兩極を通ずる大圏を子午線と稱し、其の地に於て午の刻或は子の刻を同一にするを以て此の名あり。此の線は、又た地球を東半球と西半球とに區分するを得べきなり。

赤道より南北各々二十三度半の處に、赤道線に平行して小圏線を畫き、之を北回歸線即ち夏至線及び南回歸線即ち冬至線と稱す。而して、南北兩極より各々二十三度半の處に、平行線を畫き、之を南極線北極線といふ。

七 地球の自轉

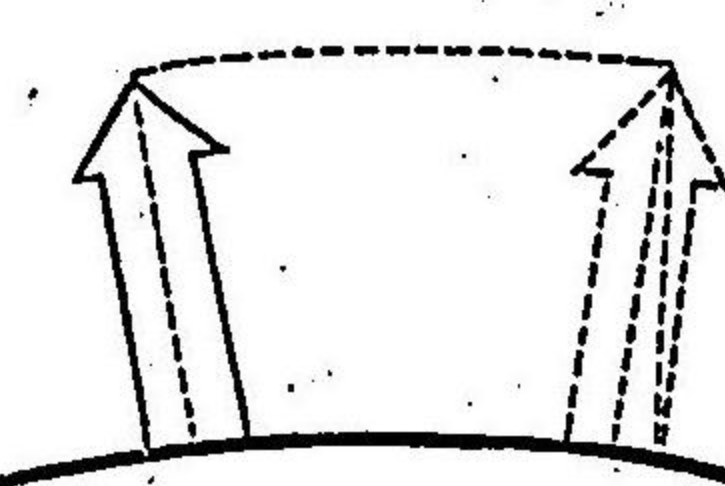
往昔意味の時に當りては、天は動き地は靜止する者となし、日月星辰は規則正しく一日二十四時間に地球を一回轉する者とせり。然るに、科學の進歩發達に

地動
地球自轉の
立證

伴ひ、此の迷信と誤認は、コペルニカスケブレリニュートン等の大家輩出すると共に、地球は地軸を軸心として自から回轉し、同時に太陽を中心とし、其の周圍を運行する者なる事を唱導するに及び、最早動かすべからざる論說となり、昔日の天動説は、全く破壊せられて、地動説となれり。蓋し地動とは、地球自から運動するの意にして、其の種類の主なる者二つあり、自轉公轉即ち是れなり。

地球自轉に關しては、幾多の立證あり、就中其の主なる者は、一、元來振子は一度與へられたる方向を以て、永久變更する者にあらざるも、之を極地方に於て試むれば、漸次變動し終に一回轉するに到る。二、上部より或る物體を落下せば、鉛直の路を取らずして、地球自轉に基く隨性の結果多少東方に偏倚す。三、地球は球圓にあらずして、兩極は偏平となり、赤道の膨脹する事等は、地球自轉の結果に外ならざるなり。

地球自轉の證一



かくて、地球は、自轉により一日二十四時間に一回轉するを以て、地球の最大圏即ち赤道は、其の長さ一萬二百里餘あれば、一秒時間凡そ一千五百三十一尺餘の

本邦地理詳説

速力なり、然れども南北兩極に行くに従ひ、漸次減少し終に兩極部に到りて零となり不動となる者なり。

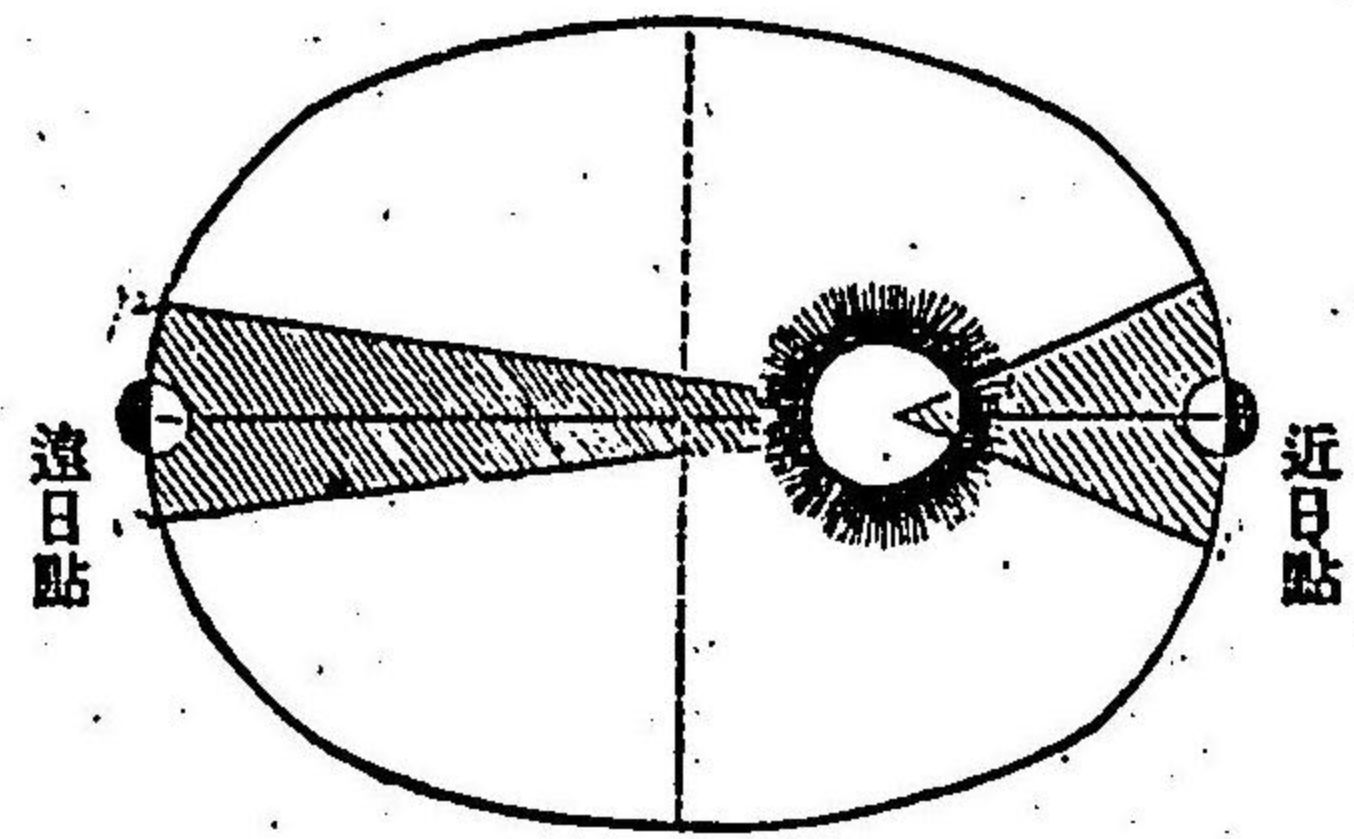
地球は、一日二十四時間にして自轉する結果、地球面上太陽に相對して、半面太陽の光を受くる部分と、反之他の半面は相背きて其の光を受く能はざる部分あり。是れ晝夜分かるゝ所以にして、其の明るき時を晝と云ひ、暗き時を夜と云ふ。斯くして、地球は西より東に回轉しつゝ、夜晝をつぎ、晝夜をつぎ漸次變化して其の光を受くる部分を異にする者なり。

八 地球の公轉

吾人は、既に地球が地軸を軸心として一日二十四時間内に自轉する事を知りしが、尙ほ地球は自轉すると共に、太陽の周圍を軌道に沿ふて運行し、三百六十五日と五時四十八分四十八秒を經過せば、再び舊位置に復す、之を地球公轉と稱し、其の一周を一年と稱す。

地球の軌道は、圓形にあらずして楕圓形なり。蓋しケプレルの法則によれば、遊星の軌道は、楕圓形にして其の楕圓は、皆な燒點を共有し、此の燒點には太陽ありて之れにより我が地球も亦一遊星なれば正しく軌道は楕圓形ならざるべからず。されば地球は一年中一回必ず太陽に近き點と、遠き點とを通過すべし、前者を近日點、後者を遠日點と稱し、軌道の二要點なり。而して地球の運動は近日點に於て最も大に、遠日點に於て最も小なる者とす。是れ楕圓形の短軸兩端は、太陽の距離と相等し、故にケプレルの法則に従はば、遊星運行の際、動徑は同時内に同面を畫くべきなり。今地球太陽間の距離は、凡そ三千八百萬里餘なれば、軌道の周長は殆んど二千四百萬里餘なるべし、夫れ故に地球は此の軌道を一秒七里半

地球の軌道



りて之れにより我が地球も亦一遊星なれば正しく軌道は楕圓形ならざるべからず。されば地球は一年中一回必ず太陽に近き點と、遠き點とを通過すべし、前者を近日點、後者を遠日點と稱し、軌道の二要點なり。而して地球の運動は近日點に於て最も大に、遠日點に於て最も小なる者とす。是れ楕圓形の短軸兩端は、太陽の距離と相等し、故にケプレルの法則に従はば、遊星運行の際、動徑は同時内に同面を畫くべきなり。今地球太陽間の距離は、凡そ三千八百萬里餘なれば、軌道の周長は殆んど二千四百萬里餘なるべし、夫れ故に地球は此の軌道を一秒七里半餘の割合を以て進行し、一分間四百三十三里十二町餘の速力を以て運行する割合となれり。

九 晝夜の長短

地球の地軸にして、若し軌道面と直角ならしめば、太陽は常に赤道を直射し、其

の状態一定不變なりと雖も、現今地軸は軌道面に凡そ六十六度三十分の角度をなして傾斜し、赤道面と軌道面と凡そ二十二度三十度の角度を以て横切れり、されば地球の地軸は、凡そ二十三度三十分の傾斜にて自轉し、且つ公轉する者なれば、地球は時と場所により太陽の光線を受くる角度を異にし、従つて晝夜の長短を生ずべし。夫れ晝弧の大なる時は、晝間長く、夜弧の大なる時は、夜間長く、兩弧相等しく同大なれば、晝間夜間相同じ、赤道にては晝夜兩弧太陽の位置如何に關せず、常に同大にして、年中晝夜平分なり。されど他の場所に於ては、太陽の光線を受くる半面と、受けざる半面との限界線は、只兩極を通過する晝夜平分の時にして、他は場所と太陽の位置如何により、必ず相異ありて、晝夜の長短を生ずる者なり。

然れども、其の晝夜の長短たるや、事實上に於ては多少相違する所ある可し。是れ、地球の表面を圍繞するに、空氣ありて太陽の光線を屈折し、以て他の現象を起すに基因す。

元來空氣の下層は、濃厚にして上層は稀薄なるものなり、故に光線は稀薄より

濃厚に入る時は、物理學上の法則として、一直線にあらずして曲線をなし、垂直線に近づくを以て、吾人の眼に映する物體は即ち上部に見え、光線屈折率は太陽地平線に近き時、最も大にして上層に行くに従ひ屈折少なし。故に縦令太陽の地平線にあるも、尙ほ吾人の眼に映する所になり。又た空氣は、光線を反射する作用あれば、太陽既に地平線下にあるも、尙ほ太陽光線を反射して、吾人に明を來たす事あり。是れ薄明と稱し、日出前日没後吾人が日常目撃する現象なりとす。

一〇 四季

地球地軸の傾斜并に公轉の結果、四季の變化を生ず。即ち太陽は、地球公轉及び地軸の傾斜ある爲め、時に其の位置を異にし、或る時は赤道の平面上にあるあり、又た夫より北方に位するあり、又た更らに南方に移る事ありとす。故に太陽が、赤道を直射する時は、是れ晝夜平分の時にして、之を春分點(三月二十日)と稱す。是より太陽は、徐ろに北に向つて進み、終に北回歸線即ち夏至線上に來りて、其の線上を直射し、地半球にては晝間の最も長く、夜間の最も短かき時なり、之を夏至(六月二十一日)と稱す。夫より更らに太陽は、北回歸線より南方に戻り再び赤道

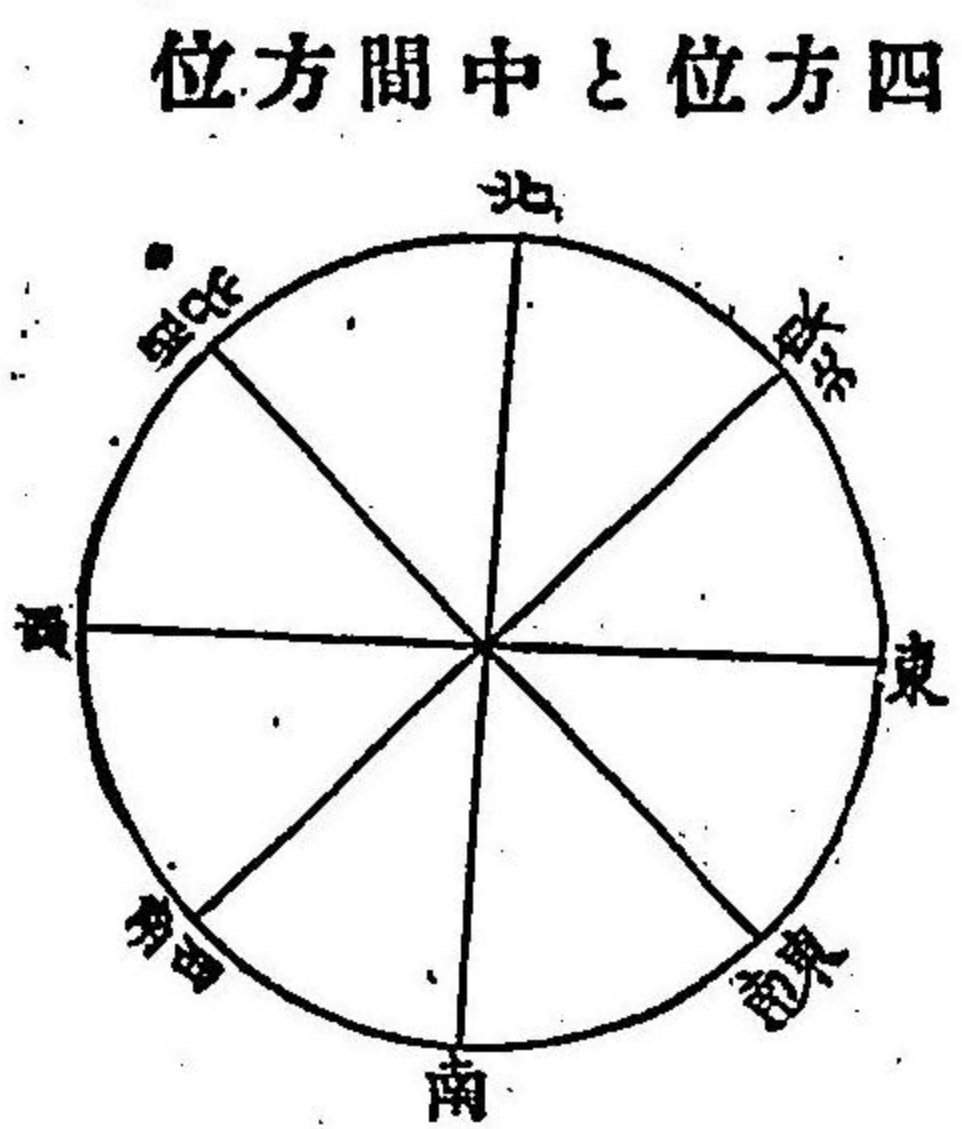
秋分點
冬至

平面上を直射するに到り、晝夜平分となる之を秋分點(九月二十二日頃)と稱し。是より又た太陽は、赤道の南に進み終に南回歸線即ち冬至線上を直射するに到り、北半球にては晝間の最も短かく夜間の最も長き時なり、之を冬至(十二月二十一日)と稱す。斯くて太陽は、漸次北方に移り、再び赤道平面上を直射するに到るもの之を四季と稱す。

一 方位

地球の表面は、各部に於て相互の方位、例へば或る場所は或る場所の何れの方向方位たる事を一定すべきは、必要なる條件なりとす。之を基本方位と稱す。

基本方位



天氣晴朗の日、地に一竿を立て、其の陰影を見る時は、朝間は其の影長く、晝となるに及び次第に短くなり、晝をすぐれば再び長くなるべし。斯くして其の陰影の最短なる時は、其の地方の正午にして、影の映する方向は北なりとす。反之する方向は即ち南とす。

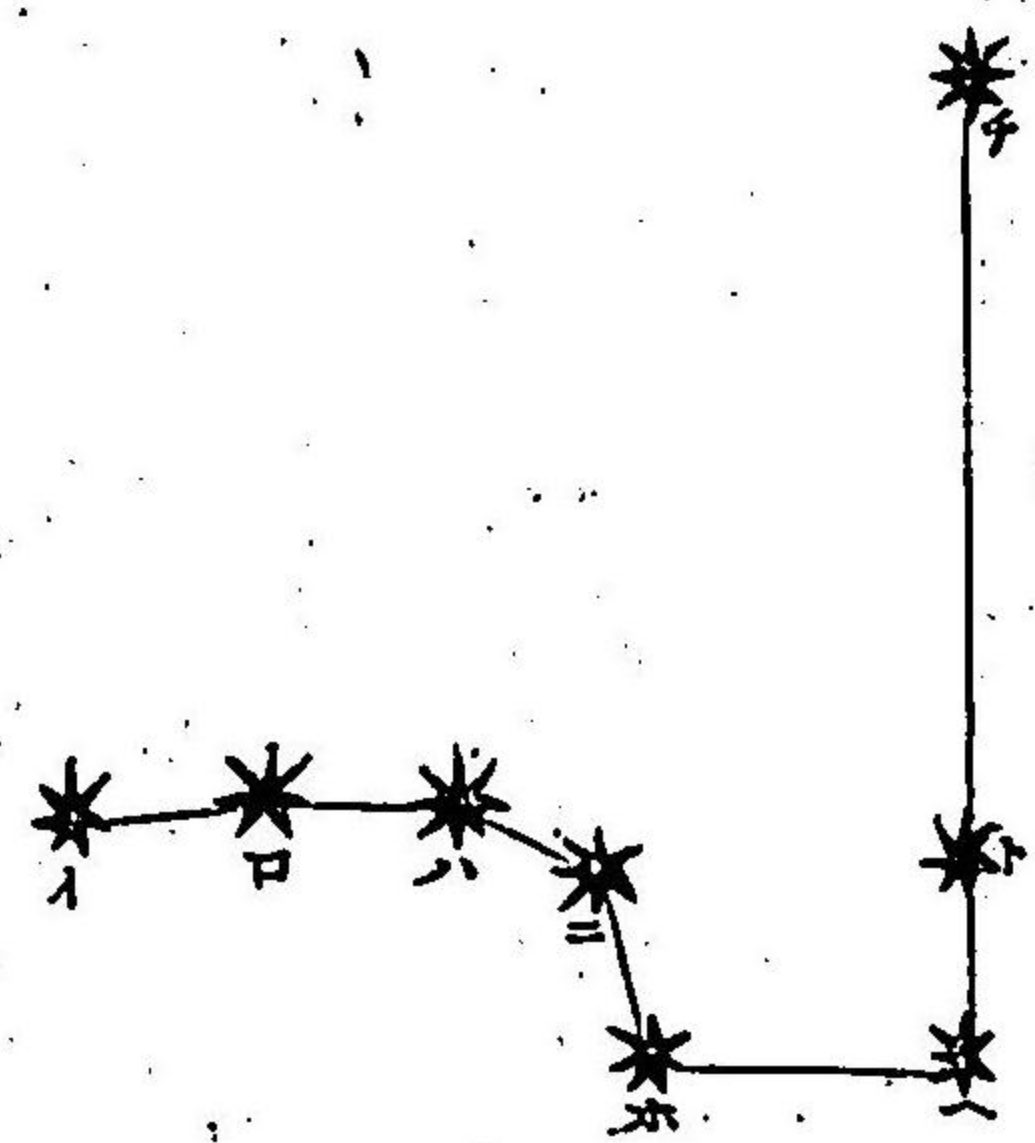
四方位

稱す。次いで南向午を左右に擴げば、其の左方は東にして、右方は西なり、之を東西南北の四方位と稱す。

磁石
磁極

然るに、今日理學界の説く所によれば、地球は一大磁石にして、兩極近き所に磁石ありとし、之を磁極と稱し、磁針は之れが爲めに吸引せられて、南北を指して靜止すといふ。而して其の磁極は、一定不變の者にあらず、時に其の位置を異にするを以て、磁針は常に精密に地球の北を指するにあらず、多く偏角を生ず。而して東西南北なる基本方位以外に、更らに中間方位なる者を設く、即ち北と東との

北
斗
七
星



中間正向を東北と云ひ、北と西との中間正向を西北と云ひ、西と南との中間正向を西南と云ひ、南と東との中間正向を東南と云ふが如き是れなり。

普通方向方位を定むるには、磁針器時計竿條等を用ゆると雖も、尙ほ北極星は、一手段として古來航海者、旅行家の最も信頼する所なり、是れ

本邦地理詳説

蓋し北極星は、多少其の位置を變更すと雖も、常に北方に位し一目標となり得べき所以なりとす。而して、今此の極星を見出さんには、夜間天を仰ぎ見て、先づ北斗七星と稱し、柄杓の如きイロハニホヘト(七個)の星を發見すべし、然る時は其の中柄杓の頭端トへの二星を連ねて、一直線となし其の距離の殆んど五倍を延長する時は、即ち一明星(子)に達すべし、是れ北極星と稱し、常に北方に正座せるものなりとす。

一二 緯度と經度

地表上某場所の位置を確定せんが爲めには、通常想像したる縦横の虛線を作らん事を要す。即ち經線緯線是れなり。

赤道に平行して、地球を東西の方向に一周する横線諸圈を並行圈即ち緯線と稱し、其の距離を緯度といふ。又た地球を切斷して赤道に直角をなし、南北の方向に一周する縦線諸圈を經圈即ち經線、又た子午線と稱し、其の距離を經度といふ。

緯度は赤道を零度となし、是れより南北各々九十度に分ち、北にあるを北緯、南

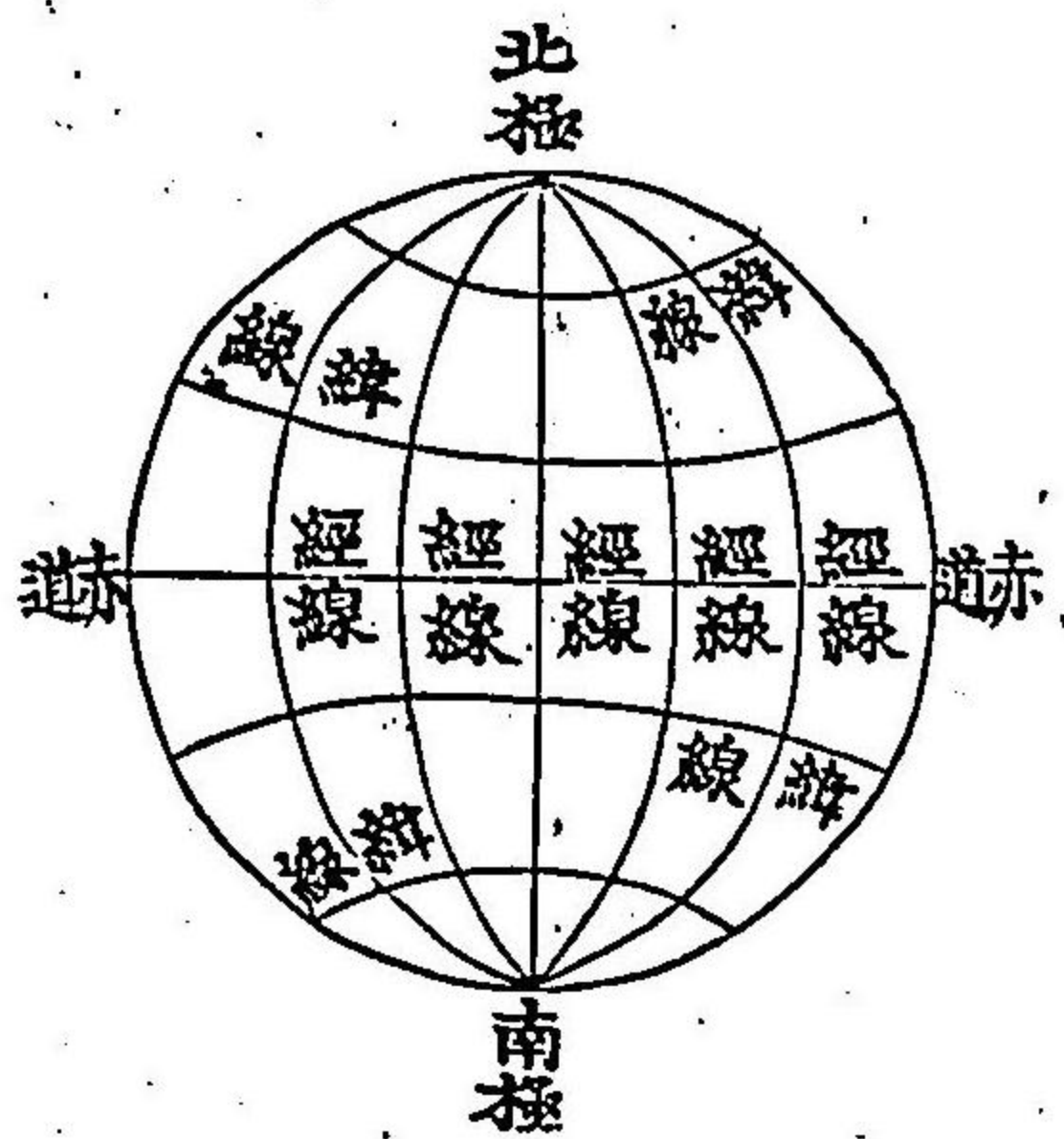
經線
緯線
緯度
經度

高緯度
低緯度

緯度の平均
距離

經度の距離

にあるを南緯と稱し、兩極に近き地の緯度を高緯度、赤道に近き地の緯度を低緯度と稱す。緯線一度の距離は、地球が楕圓形なるが爲め位置場所に於て一様ならず。赤道に於て最も短かく、極に近づくに従ひて漸次増長す。其の平均距離は凡そ二十八里八町餘なり。



經度は、全周を三百六十度に分かつ、經度一度間の距離は、隨所一定せず、赤道に於て其の幅最も長く、極に近づくに従ひ次第に狭小となりて、相密接するに到る。即ち赤道に於ける經度一度間の距離は、凡そ二十八里十五町餘にして、北緯四十五度にては凡そ二十二里二十三町餘、北緯八十度に於て、凡そ五里三町餘となり、極に到りて終に零となる。而して緯度、經度は、共に一度を六十分に分ち、一分は更らに六十秒とし、尙ほ精細に一秒を百分するものとす。

緯度は、赤道を基礎とし、南北に測定し得べしと雖も、經線は從來一定の基線な

本初子午線

く、各國任意之を規定し以て東西の經度を測りたりしが、是れ經度計算上實際に於て不便を感ずること少なからず、依りて明治十八年萬國子午線會議を北米合衆國ワシントンに開き、萬國の使臣會合協議したる上、英國の主都ロンドンに近きグリニツチ天文臺を通過する經線即ち子午線を以て、零度即ち基線となせり、之を第一子午線、又た本初子午線と稱し、是より東にあるを東經度、西にあるを西經度と稱し、以て東西の位置を測定する者とす。

地方時
標準時

地球は、自轉するの結果、各地時刻の相違を見るべきなり。蓋し地球は、一日二十四時間を以て一回轉する者なれば、經度三百六十度に於ける一度は、四分時に進行する割合なり。故に、甲地の正午は、乙地の午後六時となり、丙地の眞夜は丁地の午前六時となるべき結果なり。されば、地球表面の各地は、太陽の方向に準據し計りたる眞正の時刻を作る、之を地方時と稱せり。されども、今日の如き交通頻繁なる時代は、各地相異なる地方時を用ゆるは、便利に似て實際上甚だ不便利を感ずる事あり。故に、現今開明國に於ては、一國內又は一區域内にて、一定時刻を要す、之を標準時と稱す。

本邦の標準時

我が國にては、二種の標準時を用ゆ、一つを中央標準時と稱し、丹後國久美湊丹波國福知山播磨國明石紀伊國和歌山の南を通ずる東經百三十五度の子午線を以てし、沖繩島以東内地は一般之を適用せり。他は西部標準時と稱し、臺灣澎湖島海峽を通過する東經百二十度の子午線を以てし、宮古島八重島以西は總て之れに則るものにして、中央標準時とは經度十五度の差、即ち一時間の時差を生ぜり。故に此の時差の如何は、直ちに各地の位置距離を計算すること甚だ容易なる者なりとす。

一三 地球儀と地圖

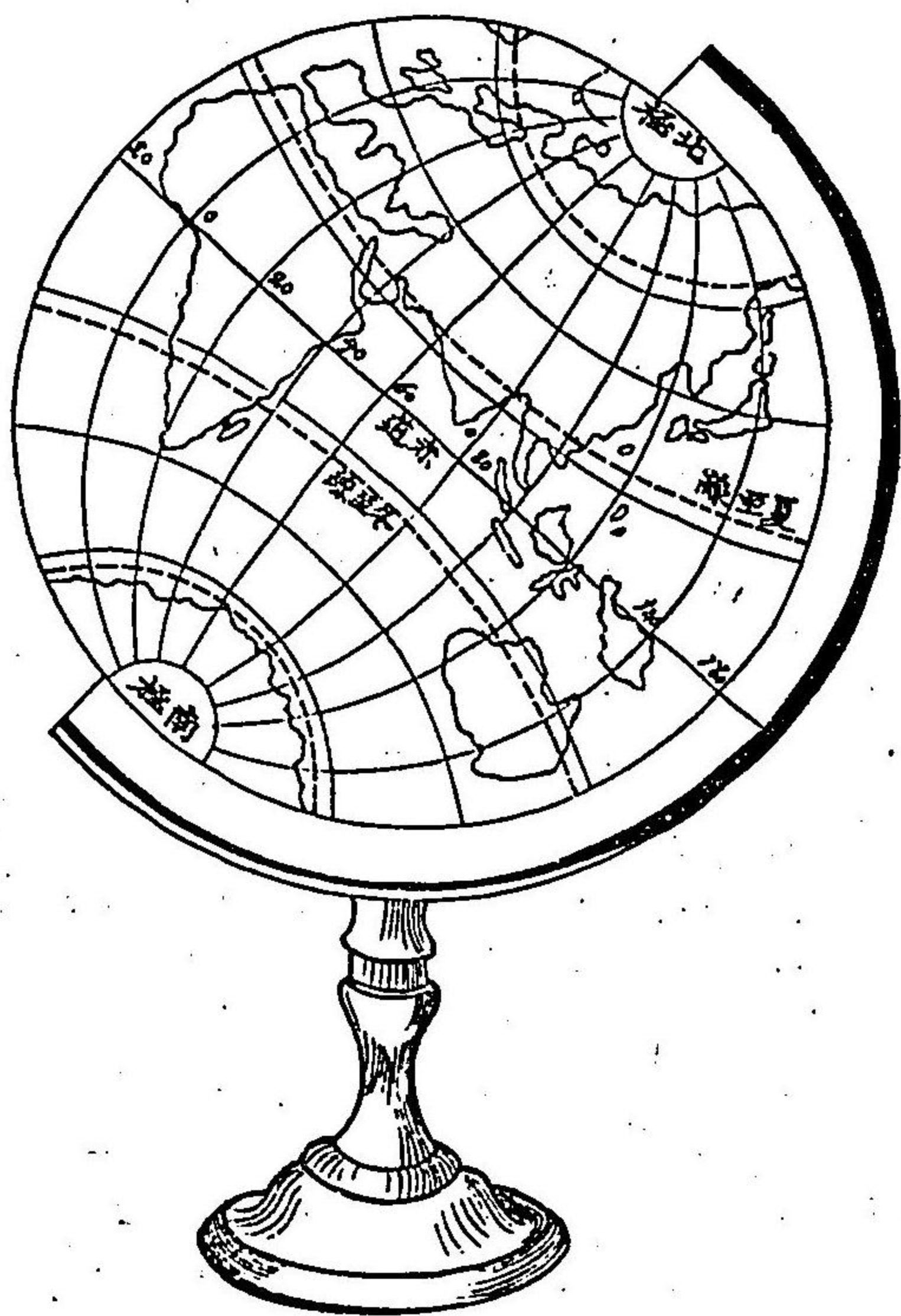
地球儀
地圖

地球の表面全體を表はすに二つの方法あり。一つは地球全體の形像に倣ひ、球體を作りて其の表面に水陸山川等及び經緯線を畫きたる者之を地球儀と云ひ。他は、地球表面の或る一部分若くは全部を平面圖に表はし、之れによりて其の位置地形地勢を知るべき者之を地圖と云ふ。即ち此の二者は、地理學を研究せんとする者必ず携帯すべき者にして、是れ地球儀地圖の價值ある所以なり。地球儀は、地球の形像を縮小して其の儘に作成し、水陸の分布山川の形勢を現

本邦地理詳説

はしたる者なれば、地球全體に關する智識地球の運動晝夜四季の關係等の状態を明かにするの利ありと雖も、之を日常使用し運搬するに於て甚だ不便利を感

地球儀と地圖



ずることあり。反之、地圖は實用上地球儀より利便少なからずと雖も、元と球體なる地球表面をば、平面圖に表はすを以て、多少の相異を免かれず、此の點に於て

は地圖は地球儀に劣る者といふ可し。

地圖の種類は、數多之れありと雖も、普通は地球の一部分を畫きたる者と、及び地球の全部を畫きたる者ありて之を地形圖と稱し、他は航海者の爲め特に畫きたる地形圖と同種類にて、専ら海面海底の形狀事實を現はせる者之を地圖と云はず、特に海圖と稱す。而して地球儀地圖は之を作成するに當り、實大に描寫する能はざるを以て、之を縮小すべく、通例分數にて其上に表はせり。即ち縮尺を用ゐ、其の比例を測定し縮尺百分の一とあれば、百尺の者を一尺とし、縮尺千分の一とあれば、百尺を一寸に縮小したるの意味なり。

尙ほ地圖には別段其の方位を示さざるも、常に上を以て北とし、下を南とせり、而して左右の線は、緯線にして上下の線は、經線を表はせり。更らに地圖の高低、山川、都邑、交通線等は、何れも皆な地理的の符號を以て表はすものとす。

本章重要事項

第一 吾人人類は、地球を以て生息の立場とし、陸地に住み、海洋は航行し、空氣を呼吸し、動植物に接して衣食住の材料を作り、氣候の變化に應じて經過する者な

第二章 數理地理學

地形圖

縮尺

符號

本邦地理詳説

れば、吾人日常生活上の愉快は、天然力の爲め、直接間接に支配せられ拘束する者なるを知る。故に吾人は、此等の事實を目前に悟り、地理學を研究するは、一日も缺くべからざる所以にして、地理學の必要乃ち此所に存する者なり。

第二 太陽は吾人人生に最愛最親の者なり。只に光熱の發源體のみならず、又た以て人心修養上、威大の關係あるもの彼の、光陰矢の如く流水の如しの數言は、千載不滅の明言たると共に、隱然吾人の生活を刺撃しつゝある事を知るべきなり。

第三 地球の球體なるは、吾人生活に影響を及ぼす事多く、地球自動に伴ひ、晝夜の關係、受温の相違等、是れ正しく地球球體の賜物なりといふ可し。

第四 吾人試に地球をして自轉なく、他の日月星辰自から一周する者と假定せば、一日二十四時間内に恒星の如き、遠距離は非常なる速力を以て回轉すべきなり。されど他の天體に比し、微小なる地球が果して此の作用を引き起すべき力ありや否や、是れ立所に來るべき疑問たるべし。然れども之れを地球自から回轉するとせば、此の難題は忽ち氷解せられ、此等の現象は容易に説明せらる可し。是れ亦地球自轉の一證と見て可なり。

第五 吾人は、或る年に於て氣温の差の少なく又た時に大なるを感ずることあり。是れ即ち地球赤道面と軌道との傾斜如何によるものにして、其の角度は常に二十三度半をなし互に横切ると雖も、今日數理學者の説明によれば、此の角度

は年を追ふて漸次縮小し、終に二十一度に及び、其の後は次第に増大して二十八度に達するものなりと。故に其の角度は、二十一度と二十八度との間に、絶えず増減する者と見るべし。さるが故に、其の小なる時は温度の差少なく、大なる時は乃ち多くなる所以なりとす。

第六 北斗七星は、地位方向の標準となり、航海者旅行家の目標となれる事、古今を通じて相同じ、又た以て造化の恩惠とも云ふべきなり。

第七 經緯線は、地球上の位置距離を測定するに必要なる者にして、緯度の測定は、専ら極星の高度によりて其の位置距離を定む。例へば觀者の水平線と極星との間に四十五度三十分の角度ありとせば、即ち其の觀者は北緯四十五度三十分の所に居る事を知るべきなり。經度は普通時辰儀による者なれど、尙ほ時の差は東西の位置距離を計算するに於て、多大の用ある者と云ふべきなり。

第八 太陽は須時各地點を照らし、地球は回轉するを以て時差を生ずべし。されば地球上何れの點にか日附境界線を一定せざるべからず。今二船あり、一港を出で西航し、或は東航し數日後にして歸港せば、西航せし者は日附一日を省き、東航せし者は日附を重ね以て其の得失を一致せしむ。故に今日此の一致をなさしめんが爲め、百八十度の經線を以て日附變更界線と定められぬ。

第二章 數理地理學

第三章 自然地理學

一四 地殼の發育

地殼を構成せる岩石は、一朝一夕一時的に生成せし者にあらずして、皆時代を異にし、長時間を要せし者なり。而して之れが發育變遷を知らんと欲し地質學者は、前世界に存在せし動植物の化石遺骸により、之れを標準根據として、其の新舊を定む。是れ蓋し舊き地層中にある生物の遺骸は、其の構造組織甚だ下等なれども、新しき地層となるに及び、存在せる化石は、高等となり、漸次複雑なる構造組織を發見するに到りたるに依る、且つ現時の實驗によれば、同地層中には、世界に到る所同じ化石の存在を見るなり。故に此れ等の化石を標準とし、地殼生成の年代を定むること左の如し。

太古代

老連志亞紀
比字魯亞紀

多くは、片麻岩、石灰石、蛇紋石等、且つ石黒を有する者を特徴とし、化石は未だ發見せられず。
前者の外、雲母片岩、千枚岩、石英岩を有すれども未だ化石なし。

寒武利亞紀

主として、粘板岩、硬砂岩、輝岩、雲岩等より成り、化石は不完全なる三葉蟲の如きを見る。

去留利亞紀

主として、粘板岩、硬砂岩より成立すること、前系と同じく、化石は、鱗木、印木、蘆木の如き、管束隱花植物及び、珊瑚類、海綿有孔虫、海百合の如き、生物を藏せり。

古生代 泥盆盆紀

前紀、岩石の外、無煙炭、黒炭、砂岩等ありて、前紀の隱花植物に加へて、年齒類、出で、石燕、海百合、上靴珊瑚等を出だす。

石炭紀

硬砂岩、砂岩、石灰石は前紀より益々繁殖し、石骨岩、鹽石、炭等ありて、管束隱花植物の化石最も多く、星葉、楔葉木及燕介帆立貝等あり。

二疊紀

砂岩、粘板岩、石雲岩、岩鹽、石膏等ありて、古生代の最後、將に中生紀に入らんとし、化石等は、隱花植物より、顯花植物に變じ、葉鰓類、瓜爬蟲類を出だす。

中生代	三疊紀	砂岩、泥灰岩、石雲岩、粘板岩、石膏岩、鹽貢岩等より成立し、年齒科、松柏科、蘇鐵等、賊爬蟲類、有袋類等の化石を藏せり。
	侏羅紀	石砂岩、泥灰岩、石雲岩、粘板岩、石膏岩、鹽貢岩等ありて、爬蟲類、菊石貝、年齒科、蘇鐵科等の化石多し。
	白堊紀	白堊砂岩、粘板岩、泥炭、馬尾貝、菊石、筋貝等あり、化石には、爬蟲類、魚類、無花果、柳楮の如き中生代最後の地層なりとす。
新生代	第三紀	砂岩、砂利、粘土、貢岩、泥灰岩、褐炭、凝灰岩、石膏岩、鹽貢岩等にして、化石は、爬蟲類、魚類、無花果、柳の外に哺乳類中の、凶猛獸、強角獸及び現世祖先の犀等あり。
	第四紀	最近の地層にして、更らに之を洪積紀と沖積紀の二種に分ち、前者は一名氷河時代と稱し、氣候互寒にして、歐米の大部は氷河を以て掩はれ、地層中には主として砂

岩石
火成岩
水成岩

一五 地殼

地球の實體にして、吾人の觀察し得べき外皮部分を地殼と稱し、之れを構成し組織せる者を岩石と稱す。而して、岩石は礦物の一種又は數種の者相集りて大塊をなしたる者なれば、此所に云ふ岩石は、學術上廣き意味に用ひ、其の實質の強硬緻密なると柔軟疎鬆なるとに拘はらず、地殼を構成せる物質を云ふ者なり。

岩石の生成により、之れを火成岩及び水成岩の二種類に分つを得べし。第一火成岩は、一つに迸發岩と稱し、火山力の結果により成りし者にして、地球内部にある地熱が、或る變激に逢ひ熔體となりて、地上に噴出し、又は其の近傍に凝結冷

第四紀

利粘土、泥炭、堆母等よりなり、化石にはマンモス、巨角鹿、大獾獸の如きものありと、人類初めて此の時代に現はれ、次第に繁殖することとなり、後者は現時尙ほ繼續し、地球の表面動植物の如きは、全く今世と同様にし、人類は、石器時代、青銅器時代より鐵器時代となり、現今成る一部を除くの外、大抵之れに依れり。

深成岩

化石
地層

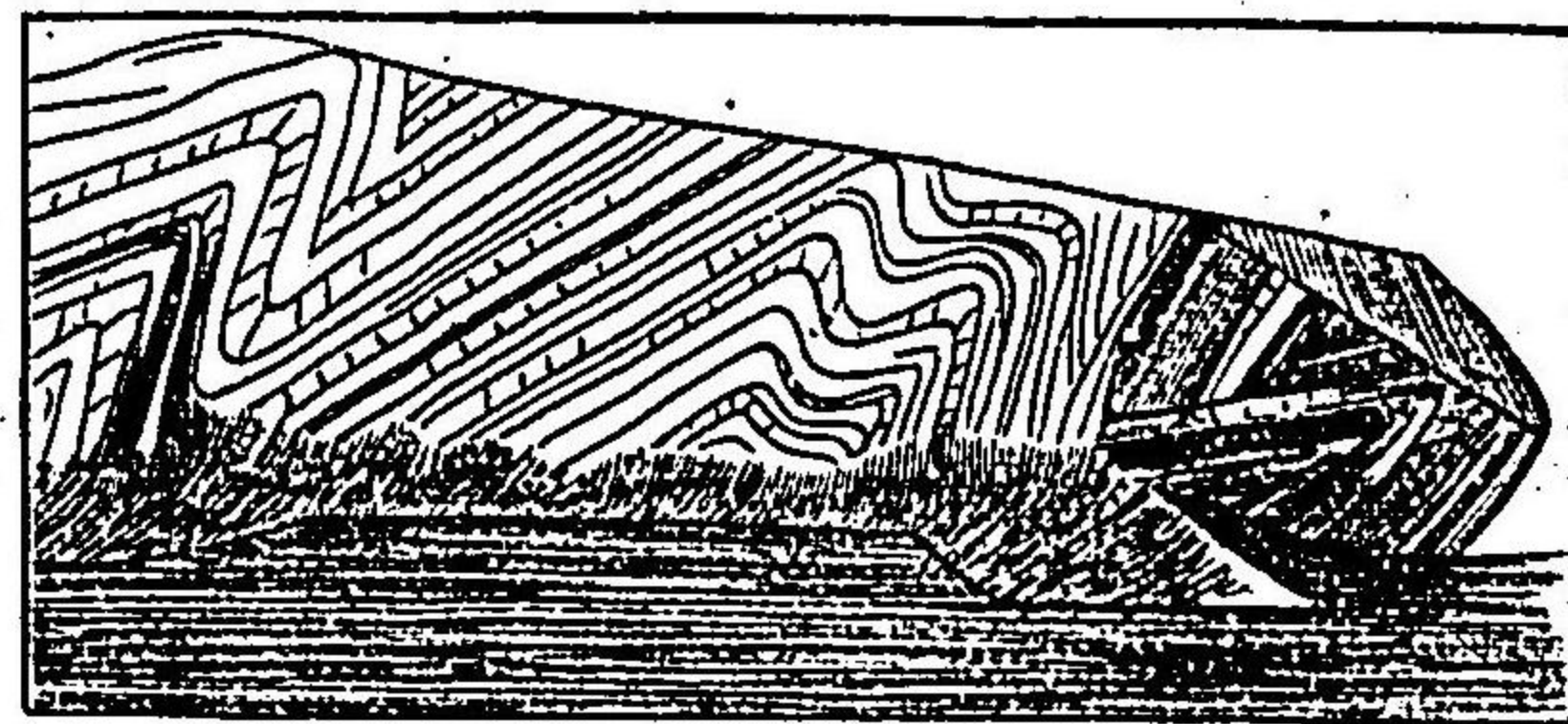
本邦地理詳説

却したる者乃ち火山岩と稱し彼の富士岩玄武岩の如きは之れが適例なり。然るに其の熔液體にして地球表面に出ず途中にて冷結したる者あり之を深成岩と稱し花崗岩の如きは是れなり。故に火山岩と云ひ深成岩と云ふ。是れも同一の火成岩なるが其の表面に出で冷却すると出でずして冷却したる結果大いに其の趣きを換へ全く異質の状態を呈するに到れる者なり。而して此等の排列は層狀をなさず必ず塊狀をなし以て他の岩石に挟まるか又地表に噴出堆積して山岳をなす事ありとす。尙ほ火成岩には節理と稱し一種の裂隙をなす事あり其の形狀により多面狀拉狀板狀球狀等に區別せらる。第二水成岩は已に存存せる岩石の破片水流の爲めに湖海に運搬堆積せられて再び生成せし結果なれば其の岩石の破片粗大なる者は常に機械的に粉碎して凝集沈澱し其の者は化學の小なる的溶解したる者より沈積する事あり。故に水成岩中には往々其の當時生存したる動植物の遺骸を含有し其の形體の儘に岩石に摺附くる事あり之れを化石と稱し。以て其の當時に於ける生物の状態を覺知するに便なるものとす。而して此等の排列は層狀を長く連結す之れを地層と稱し。

地層

變成岩

水成岩の屈曲したる所



同時代になりし者は互に相併行し相重疊すと雖も時代を異にするに隨ひ古き者は地變の結果傾斜又は屈曲することあるものとす。斯くの如く火成岩水成岩は其の生因排列二つながら相違すると共に尙ほ一種の岩石あり乃ち其の排列に於ては層狀をなして水成岩に屬すると雖も更に其の結晶岩なる點に於ては火成岩に似たるあり之れを變成岩と稱し。其の生因未だ明瞭ならずと雖も要するにもと水成岩なる者が地熱と非常なる壓力を受けたる結果其の水成岩再び凝結冷却して火成岩狀を呈したる者と云ふべく。彼の片麻岩の如きは當に其の好適例なりとす。されば地殻を構成する岩石は固より判然し新舊年を追ふて漸次生成したる者なるも尙ほ變成岩の如きものあれば今日に於ては實際複雑混交窮りなし。

海陸の比

水半球
陸半球

本邦地理詳説

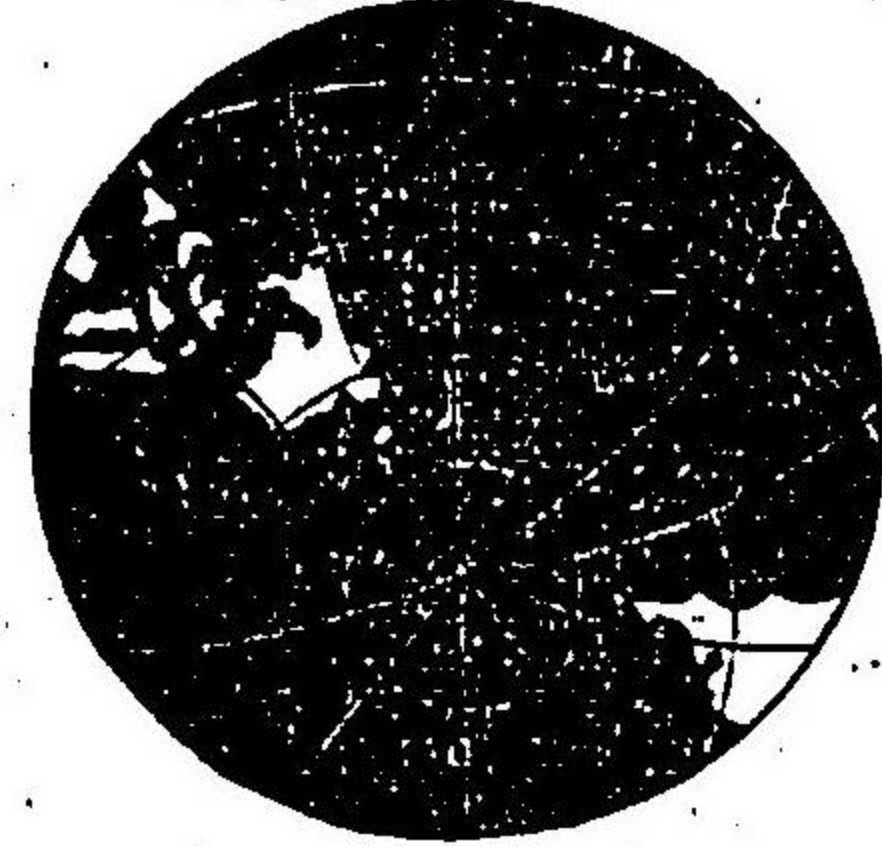
一六 陸と海

地球の總面積は、凡そ三三〇〇萬方里にして其の表面の形狀は千差萬別種々の狀體をなせりと雖も、最も異なる所は、茫々として水平面的の液體をなせる海と、一つは表面凸凹不整の固體を以て組織せらる陸、是れなり。其の兩者の面積は、不同にして海は陸より遙かに大なり、其の比例は海は總面積の四分の三、乃ち二四二八萬餘陸は總面積の四分の一、乃ち八八三萬方里にして、海は陸より凡そ二倍七五の面積を占む。又た各半球にありて、北半球は、南半球に比し、陸地多く、四〇と一三の割合となり、東半球は、西半球に比し、陸地多くして海面少なし、されば今假りに英國のロンドンと、太平洋の南ニユージランドを兩極とし、地球を兩分せば、一つは全面殆んど水を以て蔽はれ、一つは陸地を以て蔽ふ半球を見る可し。故に之れを水半球陸半球と名附け、前者は九割

陸半球



水半球



地を以て蔽ふ半球を見る可し。故に之れを水半球陸半球と名附け、前者は九割

一分五厘の水と、八分五厘の陸よりなり、後者は四割七分の陸と、五割三分の水よりなる割合なり。

一七 大陸

地塊にして面積の大なる者は之を大陸と稱し、地球上に散在し、其の數六つあり、アジアヨーロッパアフリカ北アメリカ南アメリカ及びオースタラリア乃ち是れなり。今是等大陸の面積を擧ぐれば、アジア洲は二八五三〇〇〇餘方里にして總面積の三割二分となり。ヨーロッパ洲は六四九〇〇〇餘方里にして、其の八分となり。アフリカ洲は一九四五〇〇〇餘方里にして、其の二割二分。北アメリカ洲は、一四〇〇〇〇〇方里にして、其の割八分。南アメリカ洲は、一二〇〇〇〇〇方里にして、其の割三分。オースタラリア洲は、五八四〇〇〇〇餘方里にして、其七分を占め。其他兩極地方、凡そ六一〇〇〇〇餘方里、其九厘となれり。されば大陸の中最も大なるは、アジア洲にして、小なるはオースタラリアなり、而して今日文明の中心と稱せられ、世界の商國たるヨーロッパの面積は、第五位にてアジアの殆んど三分の一弱なれば、地勢上乃ち一大半島たるが如し。

孤島 群島 列島

大陸島 海洋島

大洋島 遺跡島 堆積島

本邦地理詳説

一八 島 嶼

島は、大陸と同じく四周海水に依り、圍繞せられ、只だ其の形の小さなもの、嶼は更に小なる者なり、其の状態により、孤島、群島、列島に分かれ、孤島は、大洋中に周囲の關係なく、獨立孤立せる者にして、群島は、大洋中不規則に群集し、列島は列をなして、一直線に相排列せる者なり。

島嶼の成因に關して、二種に區分せらる、一つは大陸島、又海岸島と稱し、一つを大洋島と稱す。大陸島は、總て其の近傍の大陸に關連せる者にして、海底には、一條の連絡線あり、是れ蓋し水蝕又は陷落作用の結果にして、イギリス、日本の如き之れが適例なり、乃ち内地の動植物、或は山岳地勢の頒布、趨向を見るに、多く大陸の夫れと相類似せるを見るなり。

大洋島は、總て近傍の大陸と何等の關係なく、獨成獨因の者にして、動植物山脈等は内島特殊の状態をなせる者とす。大洋島は、又た分かれて、遺跡島、堆積島の二つとなり。一つは、嘗て大陸なりしが、其の一部分陷落し、又は海水の浸蝕を受け、今は島嶼となりし者にして、彼のボルネオ島の如き是れなり。堆積島は更ら

火山島 珊瑚島

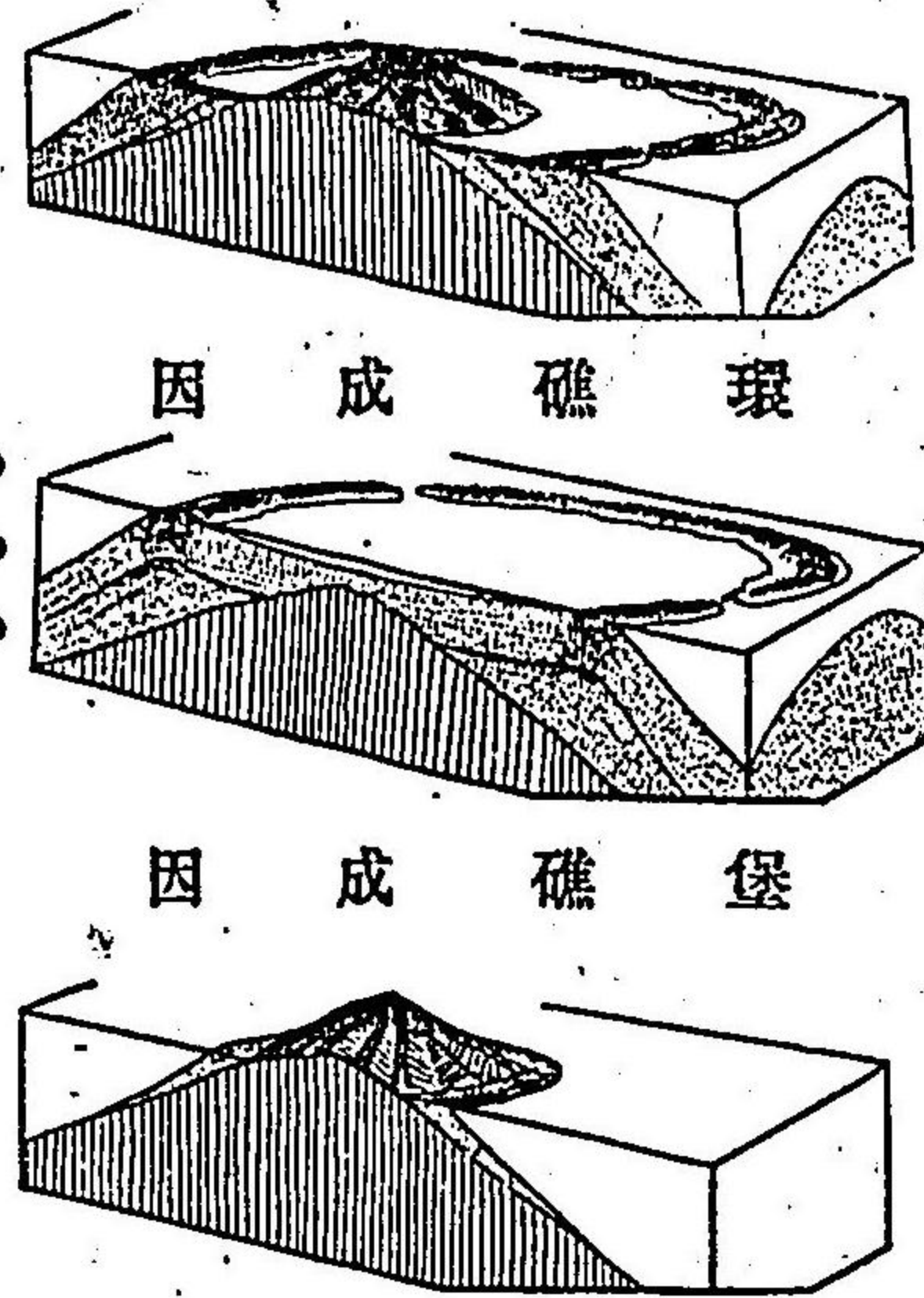
環礁

堡礁

珊瑚島 湖礁

珊瑚島成因

珊瑚島成因



に分かれて、火山島、珊瑚島となり、火山島は、火山噴出の結果、海中に噴起したる者にして、火山の中腹以上を海面に表はし、多少圓形をなす。故に遠く之れを望めば、陸地に於ける層成火山の如し、其の例我が國に多し。

珊瑚島は、珊瑚蟲の築成せし者にして、大洋中に孤立せり、其の形状により、環礁、堡礁及び裾礁となり、環礁は、多少輪環状をなして海中に孤立し、只其の一部海水と相通じ、恰然湖沼をなせり。故に一名之れを湖礁と稱す。堡礁は、陸地と稍々相離れて、一帯の水を挟みて、恰も堡牆の如き状をなす、多く火山島の縁邊に之れを見る。裾礁は、直に陸と相接續し、其の間僅かに一帯水を距て、恰も着縁せるが如し。

故に一名之れを着縁礁と稱し、又た多く火山島に於て之れを見る。

珊瑚島成因に關して古來數説あり、元來珊瑚蟲は、清き海水温度二十五度内外

半島
地角

半島成因

本邦地理詳説

にして海面下九十尺以上に生息するものなり。然るに今日猛々數百尺の下に於て之れを見出すは是れ蓋し海底の沈降したる結果にして、初め裾礁を生じ、其の中央部沈降すると共に堡礁となり、更に又た沈降して環礁となりたる者、之れ進化論者タルウー井ンに反對し、降起説を唱導すと雖も、要するに沈降する者の外、尙更らにタルウー井ン説の如き生成を異にする者あるによるか。

一九 半島・地角及び地峽

大陸を以て幹部とすれば、半島及び地角は、其の肢部と見るべし。半島と地角は、三面海水によりて圍繞せられ、割合長く海中に突出し、只其の一部丈、大陸に連續する者にて、半島と地角との相違は、其の形の大小如何によるものなり。而して、半島の成因に關しては、今日未だ精説なしと雖も、從來の學說によれば、其の或る者を、陸島成立の反對として、説明せらる。先きに述べたるが如く、陸島は元と大陸と接續したるものなりしも、地變の爲め其の一部分陥落して、終に陸島となりたる者なり。故に、今其の反對に、半島を以て陸と島との間に、土地隆起し、若くは土砂の堆積によりて、連絡したるものと見るべく、乃ち山東半島、インド半島及

(イ) 島
(ロ) 半島
(ハ) 海
(ニ) 岬
(ホ) 地
平線
(ヘ) 海
(ト) 海峡
(チ) 燈臺
(リ) 山岳

地 形 の 概 圖



等は正ましく地峽と見るを得べきなり。而して海と海との間に挟まる地峽の成因に關しては、海底の陥落に基くものと、土地の隆起、土砂の堆積に因るものと

第三章 自然地理學

びイベクヤン半島の如き、是れが適例なり。尙

ほ其の外火山岩の噴出によりて、形成せられたる者なり。即ち我が國伊豆半島の如きは、適例なり。而して地峽は、半島地角の其の一部分が、島或は大陸に連絡したる者と見るべく、乃ち海と陸との間に挟まれたる陸地の一部にして、其の幅は到りて狭きものなり。然れども地峽は、強ち海と海とに、挟まれたる陸地の一部と稱するものにあらず、之を大陸の中央部に於ても、尙ほ且つ之を見るを得べし。即ち河と河との間にある狭部、狭地、湖水と湖水の間、又は河とよるもの、或は河と海とによつてなるものあり、是

の二つあり。前者は中央アメリカの如き、後者はスエズ地峽の如き、之れが適例なりといふべし。

二〇 海洋

地球表面上、陸地を圍繞する水面を海洋といふ。凡そ地表の四分の三を占め、全面積二四二八萬餘ある事は、既に述べたるが如し。而して、陸地に、六大陸あるが如く、海洋にも亦其の大陸の爲めに、五つに區劃せらる、乃ち大西、太平、インドの三洋及び兩極地方の南北氷洋是れなり。大西洋は、南北アメリカと、ヨーロッパ、アフリカとの間にある大洋にして、太平洋は、南北アメリカとアジア、オーストラリアとの間にある者、インド洋は、アジアの南にあり、北氷洋は、北極の附近に在る大洋にして、南氷洋は、南極の附近に在る大洋なり。以上の内、太平洋の面積最も大にして、大西洋の殆んど二倍、インド洋の凡そ二倍、南氷洋の凡そ九倍、北氷洋の十一倍半を占む。而して大陸の縁邊には、大抵一帯の淺海ありて、其の底の勾配極めて緩慢なり、之を坦海と稱し、普通六六〇尺の深さを以て、境界とせり。坦海を過ぐれば、海底遽かに深くなり、其の傾斜甚だ急なり、之を深海と稱し、數十尺

大西洋
太平洋
印度洋
兩極洋

坦海
深海

に達する事あり。故に、吾人が通常大洋と稱する部分は、此深海の部分にして、坦海は將に次章に述べんと欲する、部分に屬する者なり。

二一 海洋の形状

水は方圓の器に従ふものにして、其の周圍の状態により、種々なる形状を生ずるものなり。大洋とは水の大なるものにして、其の一部にして陸に近き所のものを海、又は副洋と稱し、多くは大陸の縁に於て、出入する岬角、半島、或は其の附近に散布する島嶼の爲めに圍まる者、彼の太平洋に於ける日本海、支那海、ベーリング海、オコツク海、大西洋に於ける死海、バルト海、地中海、インド洋に於ける紅海、ヘルシヤ海等の如き是れなり、然れども、尙ほ之を細見すれば、大陸の周圍にある者と大陸又は島嶼にて環繞せられたる者との二つなり。前者を縁海と云ひ、後者を地中海といふ。而して海にして、海岸深く入り込み、其の周圍割合に大なる者を灣、又は灘と稱す。尙ほ灣灘にして、其の形の小さな者を入江、又は港と稱す。港は通常船の碇泊に便なる所を云ふ者にして、其の他の區域は、入江若くは灣と稱へたり。二つの大なる水を相連結する狭き水路を海峡と稱し、海峡の長き者

縁海
地中海
海灘
灣
入江
港
海峡
水道

本邦地理詳説
を水道といふ。

二二 海流

海流

渦心

海流の原因

海洋の表面以下、百米乃至二百米の間は、概ね絶えず一定の方向に流動し、恰も海洋全體に於ける脈管の如く、又た海中に於ける河の如し、之を海流といふ。而して大洋にありて、其の海流は渦流をなし、其の方向は、北半球に於ては左より右に、南半球は右より左に向ひて流るゝが如く、其の渦流の中心點を渦心と稱し、之れにより南北太平洋南北大西洋インド洋等の區劃を生ず。尙ほ其の外、南氷洋の南極附近に大渦心ありて、三個の南洋渦心を連ね、北氷洋にも亦北大西洋の渦心を連ぬるものありとす。

海流は、如何にして起る者なるや、其の原因に關しては、古來多くの學說之れありと雖も、其の主なるものは風なり。蓋し風は、久しく海面を連吹すれば終に摩擦を生じて運動を起し、最初は單に表面のみに傳播すと雖も、時を経るに従ひ、次第に下層に及ぼす者なり。故に今日海流の方向を見るに、風の方向と同一に流れ、其間密接の關係ある者の如し。其外海流の原因としては、降雨蒸發の量に相

暖流
寒流

太平洋海流

異ありて、海平の不同を來たし、又た水温度の高低及び地重の差異等是れなり。海流には、暖流と寒流との區別あり、前者は熱帶の海洋に起り、後者は極地方寒帶の海洋に起る者なり。今各大洋に於ける其の主なる海流を擧ぐれば左の如し。

(1) 太平洋に於ては。

暖流にして、赤道の附近に赤道流あり、年中東より西に向ふものなり。而して赤道の南北に従ひ、南北赤道流と區別せらる。乃ち其北なるものは、フィリピン群島に衝突し、夫より黒潮と稱して、臺灣の東側に沿ひ、二つに分かれ、一つは對馬海流と稱し、日本の西海岸東北岸を洗ひ、他は黒潮本流にして、我が國の東海岸を洗ひつゝ、終に東向西風に驅られて北アメリカの西岸に達す、後ち南曲してカリフォルニア流となり、沿岸を南下して終に北赤道流に會合す。尙ほ赤道の南に行く者は、一部は直進してインド洋に入り、他は南曲して東オーストラリア流となり、オーストラリアの東海岸を洗ひつゝ、又た北東してニュージーランドの西岸を流れ終に南赤道流に會流す。而して是等南北赤道流の間に、東向する海

流あり、之を**反對赤道流**といふなり。

寒流にして北方より来る、**ペーリング**海流あり。南方より来る南氷洋流あり。前者は又た**親潮**と稱し、**ペーリング**海より、**カムチャツカ**半島、**千島列島**の東岸を洗ひつゝ、我が國の東北岸に到る。他は**オコツク**海に起り、**アジア**大陸の東側に沿ひて、**朝鮮**海峡に來る者、之を**樺太寒流**といふ。後者は南氷洋に起り、**南アメリカ**の南端に到りて、二つとなり。一つは**ヘリユ**流と稱し、他は**ホルン岬**より終りに去つて、**大西洋**に入るもの是れなり。

大西洋海流

(ロ) 大西洋に於ては。

暖流にして、又南北の赤道流ありて、東より西に向へり。北赤道流は、**西インド**の**アンチルス**列島に到り、二流となり、一つは**アルチルス**流と稱して、北上し、他は**メキシコ**灣流、**普通灣流**と稱すとなり。北**アメリカ**の東海岸を洗ひ、**ニユフアウ****ンドランド**に到り、終に東向して**ヨーロッパ**の西海岸に達し。一つは東又は東て南し**アフリカ**の海岸に沿ひ、他の一つは**ヨーロッパ**の西海岸を洗ひつゝ、終に北氷洋に入る。南赤道流は、**南アメリカ**の東端に到りて、二分し、一つは**ブラジル**

インド洋海流

流となり、一つは**ギアナ**流となりて、**ギアナ**の海岸を流るゝものなり。而して赤道附近に於て、又た**反對赤道流**ありて、西より東に向つて流る。

寒流にして、又た南北兩極に起る。北より來るものは、**東グリーンランド**流、**アラドール**流の二つとなり。前者は**グリーンランド**の東岸を洗ひ、南向更らに北折して同島の西岸を洗ふ。後者は**アラドール**の沿岸を南下し、終に灣流と衝突して、其の跡を絶つものなり。次ぎに南より來るものは、二つあり、一つは**南アメリカ**の南端に到り、北東流して**ブラジル**海流と合併し、他は**アフリカ**の南に於て、更らに分かれて二つとなり。一つは**インド洋**に入り、一つは北上して**ベン****グエラ**流となり、遂に南赤道流に合流する者なり。

(ハ) **インド洋**に於ては。

暖流にては、**夏冬**二季に分かれて、其の方向を異にせり。乃ち夏季は、**南西風**連吹するを以て、東に向ひ、冬季は、**地東風**連吹するを以て、西に向ふものなり。然れども赤道の南に於て、**年中**西流する赤道流あり。其の流れは**マダガスカル**の北端に到りて、二つとなり。一つは**マスカリオン**流と稱して、同島の東岸を南下し、

他はアフリカ大陸に衝突したる後、更に二分せられ、一つは北極又た東曲して、所謂反対赤道流となり。他は南流アフリカの南端に到りて東曲す、之をモザムビツク流といふ。

寒流は、南水洋に起り、モザムビツク流アスカリン流と合し、東流してオースタラリア附近にて、二つとなり、一つは北流して南赤道流に會し、他は尙ほ東向して、ニュージールランドに進む。之を南深洲流と稱す。

二三 潮汐

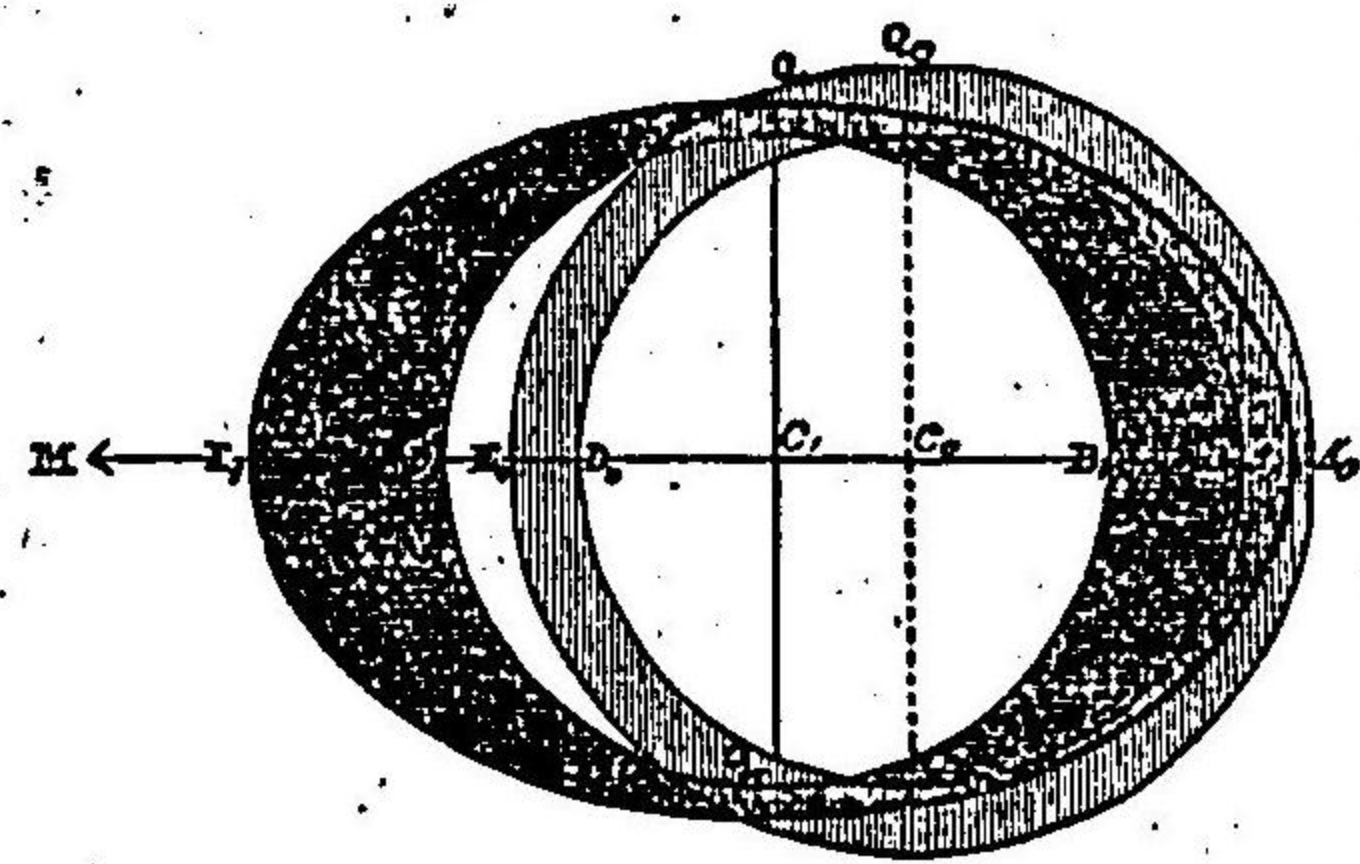
吾人試に海岸に立ち、海面上を見れば、一晝夜二回づゝ昇降を見ん、是れ潮汐と稱する者にして、其の上る時を上げ潮と云ひ、降る時を引き潮といふ。而して其の上潮の最極點を満潮と云ひ、引き潮の最極點を干潮といふ。尙ほ其の外大潮小潮の區別ある者とす。潮汐の原因に關して、古來の學說によれば左の如し。

潮汐の原因は、全く天體相互の引力に基くものにして、月の地球に及ぼす力最も大にして、日陽の引力之れに次ぎ。其の力僅に月の引力の九分の四にすぎざるなり。是れ蓋し月は小にして其力弱きと雖も、其の距離近く、反之太陽は大なるなり。

潮汐の原因

潮汐

潮汐の起る原因



れども、其の距離遠き所以なり。

今地球ありて一方に月ありとす、然る時は月の引力は、地球の中心Cに及ぼすと共に地球各分子を吸引し、其力は各分子と月との距離、自乗に反比例して減少し、其の水に對しては各引力其の分子の形狀位置に關して各々異なり、Dに及ぼす力は、中心Cより大にして、Eの部分は、中心より強く引かれ、Dの動く度よりも、大なることは理の當然なり。而してBは月に引かるゝ度少なく、從つてAも水なり、故に其の結果地球面上の水は、EDABに於て膨大となり。POの方は落下す、乃ち前者を満潮と稱し、後者を干潮といふ。而して地球は、一日二十四時間を以て、一回轉するものなれば、地球上の各位置は、一日に二回月に對する故、各場所に於て二回の満潮干潮を見るものとす。

月が地球に及ぼす引力の外、尙ほ太陽の引力あり、勿論其の力は微弱にして、月

大潮

小潮

潮汐の高さ

海岸線

本邦地理詳説

の引力に比して九分の四となれり。而して満月新月の時は、太陽と月は同一直線の上にあれば、月の外尙太陽丈の引力加はりて其の引力も従つて大となり、潮の干満に對しても、其影響更らに著し。乃ち太陽と月とが一直線にある時を大潮と稱し、上げ潮は互に相合じて、其の高さ最も大なり。反之、月の上弦下弦の場合は太陽と直角にあるを以て、其の働く力も亦従つて小となり。上潮は各所位置を異にして起り、互に相合することなく、故に潮の高さも低し、之を小潮と稱す。潮汐の高さは、大洋面に於ては、略ぼ一定して一尺を越ゆることなしと雖も。大陸の沿岸にては、時に七十尺に上ることあり。是れ蓋し陸其の者が、潮の進行を妨げて之れが停滯猪溜を來するに因るものなり。

二四 海岸線

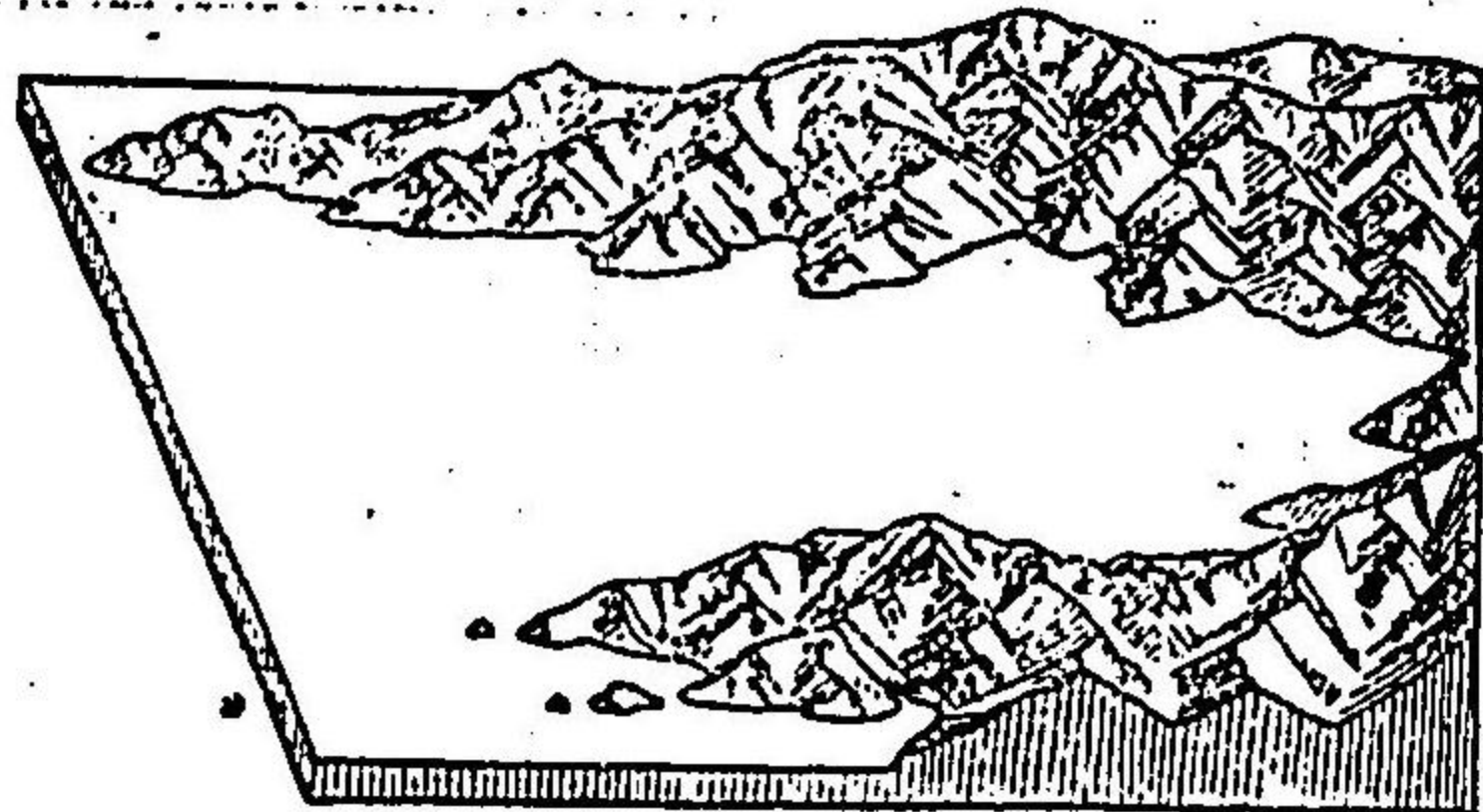
海岸線とは、陸と海洋との境界線なり。而して、其海岸の形状は、波浪海流風力河水等の作用により、變化を生ずるものなるが、今此等の影響なく、只に陸地の昇降に起因するものあり、乃ち海底の隆起したるものは、近海多く遠淺にして、傾斜頗る緩慢なりと雖も、反之海底の沈没したるものは、海岸絶壁にして峭壁數千尺

砂岸

岩岸

明海線と文

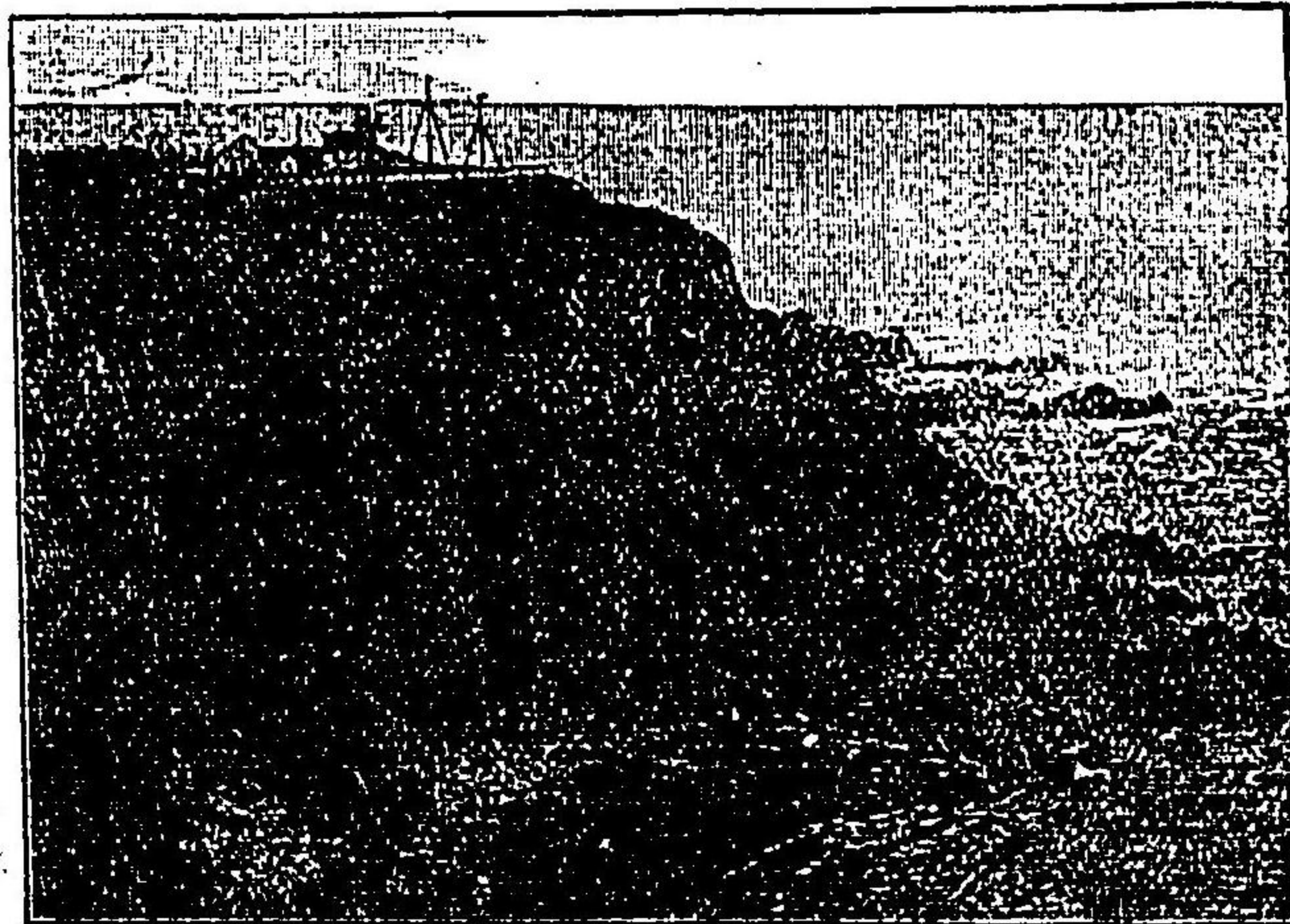
海岸の屈曲の状



嶼と稱するは、多く海水波浪の爲め、津蝕消磨せられたる岩岸にある者とす。

海岸線の出入、屈曲、複雑して其延長多き所は、是れ港灣に富む所以にして、従つて交通頻繁貿易商業繁盛となり、文化の度も進歩する者なり。現今ヨーロッパが世界の文明國と稱せられ、アフリカが暗黒世界野蠻の狀態にある所以は、一

例一の岸岩



は海岸線の延長大にして、他は短少なる結果に外ならざるなり。而して世界六大洲海岸線の延長を見るに、アジア洲は最も長くして、短かきはオースタラリアにあり、今其の一斑を示せば左の如し。

洲名	海岸線
アジア	二九五〇〇里餘
北アメリカ	一六九〇〇里餘
ヨーロッパ	一四三〇〇里餘
南アメリカ	九三〇〇里餘
アフリカ	七二四八里餘
オースタラリア	五三八〇里餘

近世地質學者なるジユース氏は、世界の海岸線を區別して、太平洋式大西洋式とせり。蓋し前者は其の特色として、其の

別海岸線の區

丘陵 高臺

地方の特殊山脈に平行し、多くは峭岸にして陥没の痕跡を呈す。後者は其の地方の特殊山脈と、著しき角度をなすものなりとす。故に今世界の海岸を見るに、アジアの東部海岸は、太平洋式に屬し、南部及び北部の海岸は大西洋式に屬す。ヨーロッパの北西部の海岸は、大西洋式にして、南部地中海は太平洋式に屬す、尙ほ其の他に關しては、讀者宜しく推考せよ。

二五 山嶽

地球陸面上は、千姿萬態にして、山あれば谷あり、千里茫茫たる平野あれば、鏡面の如き湖沼あり、涓々と流るゝ溪流あれば、滔々平野に溢るゝ巨流あり、以て一々之を明記すべからず、今順を逐ふて之れが説明を試みん。

山岳とは、陸地の著しく隆起するものにして、地理學上其の隆起を海面に比し、以て其の高低を定むるものなり。故に山岳と云ふは、普通海面上直立二五〇〇尺以上たらざるべからず、其より以下は、丘陵又は高臺と稱するなり。

然れども、此の區別は土地の情況により、多少相異なるものにして、山多き國にありては、尙三〇〇〇尺の山をも、丘陵と稱するあり。又た茫漠たる平野に隆起

山脈
山脈
山脈
山脈
山脈
山脈
山脈
山脈
山脈
山脈

本邦地理詳説

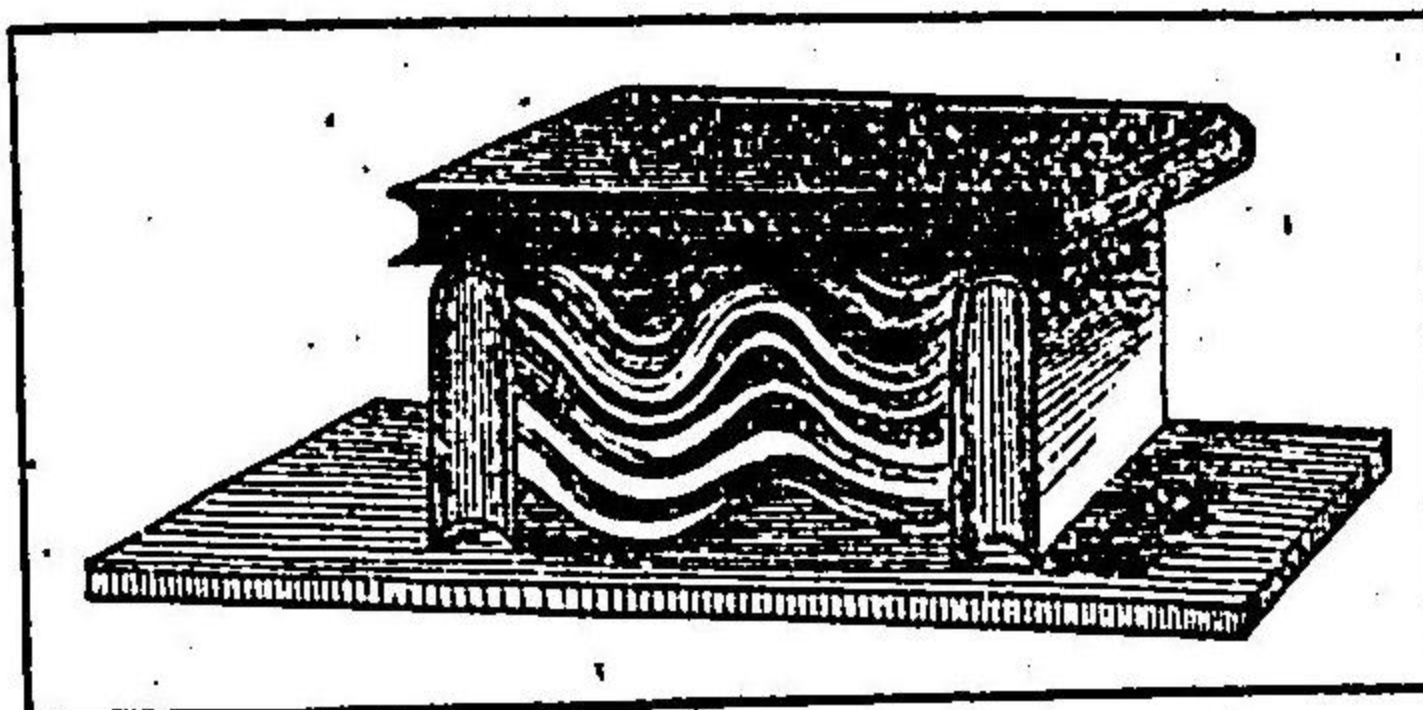
する山は、一〇〇〇尺に及ばざるも、大山高山と稱するあり、其の例尠なからずとす。

山岳は、普通孤立するものにあらず、多くは相連続して蜿蜒たる状をなせり、之を山脈と稱す、其の種類に二つありて、縦山脈、横山脈といふ、蓋し前者は經度線に平行し、後者は緯度線に平行する者を云ふ。更らに、群峯素々として、築集する者を山衆と稱し、又た數派の山脈相平行し、若しくは同質の山岳集まりて、規模壯大なる隆起の帯をなすものを、山系といふ。而して山衆にして、其の要部を區別すれば、山麓、山脊、山腹及び峠なり。山麓は、普通平地と、山衆との相接する境界にして、或は裾野と稱する事あり。山脊は、山衆の最高點を連ねたる線にして、山腹は、山衆の傾斜面を云ひ、峠は山脊を横切りて、道路の通する所を云ふ。尙ほ此の區別は、一山に於ても、悉く四要部を擧ぐる事を得べきなり。

山岳山脈の成因に關しては、普通分かれて、褶曲、斷層、削成及び火山岩とす。褶曲とは、地球横壓力の結果にして、地球は成生當時より間斷なく地熱を放散し、爲めに中心に向つて漸次縮少するものなり。故に地球の周圍を構成する各部分

褶曲山脈
斷層山脈
水蝕山脈
火山岩山脈
谷

は、等しく中心に向つて垂直に縮少せんと。其の垂直の力は終に變じて、水平に働く力となり。こゝに横壓力乃ち造山力を起す。されば此造山力の爲めに、水平の地層によりてなる地殼は、褶曲する時、其の皺襞の高隆線は、山脈をなす之を褶曲山脈といふなり。斷層とは、是れ又横壓力に起因する者にして、地層に皺襞を作る代はりに、地殼の裂罅を生じ、斷層を造りて土地の一部分、上下に移動す之を斷層山脈といふ。削成とは、水の作用を受け、地殼に浸蝕作用加はり、深谿生じ、其の結果、兩谿谷に挟まれる部分は、山岳を形成す之を削成山脈、又の名を水蝕山脈といふ。火山岩とは、火山の噴出し、其の噴出物相集まり、堆積して、終に一山山衆及び山脈をなすものなり、故に之を火山岩山脈といふ。



圖るたじ生な曲皺に層紙りよに力壓横

二六 谿谷

谿谷とは、地殼山衆の間に、長く横はる凹地なり。谷の成因に關しては、水の浸

蝕入谿谷

断層谷

閉谷
開谷
樓谷
横谷

本邦地理詳説

蝕に基因するものにして、其の形状は、岩石の性質地層の構造陸地の傾斜及び裂罅の有無に關係する者なり。而して、雷に水の浸蝕のみにより成生せらるる所の谿谷を蝕入谿谷と稱す、其の他水量も多く、浸蝕盛にして、硬軟の岩石並に地層の向斜層背斜層軸の如何に拘はらず、其の浸蝕作用を逞ふして、向斜谷又は背斜谷を生じ、断層線の所は深く浸蝕せられて、こゝに谷を生ず、之を断層谷と稱す。

岩石の硬き所は、是れ浸蝕の度少なく軟弱なる所は、浸蝕し易き故に、岩石の多き所は、谿谷も迂曲し、谷幅狹隘なり、反之、岩石少なく、且つ軟き所は、谿谷直進し、谷幅廣濶なり、故に前者を閉谷と云ひ、後者を開谷といふ。又た谷を大別して、縦谷・横谷とし、縦谷は山脈の方向に平行し、横谷は山脈と直角をなすものなり、尙ほ横谷は時に或は全山脈を横断することありとす。

二七 火山

火山とは、地皮の内外を連続する銅管ありて、地球内部の地熱の爲めに水蒸氣瓦斯熔岩等を噴出し、又た嘗て噴出したる兆ある山を云ふ。而して火山は、強ち山に限らず、水蒸氣瓦斯の噴出する所、即ち島嶼平原或は海中にても、火山と云ふ

層成火山
塊状火山
活火山
休火山

消火山

噴出口

噴出溝

火口壁

副火口

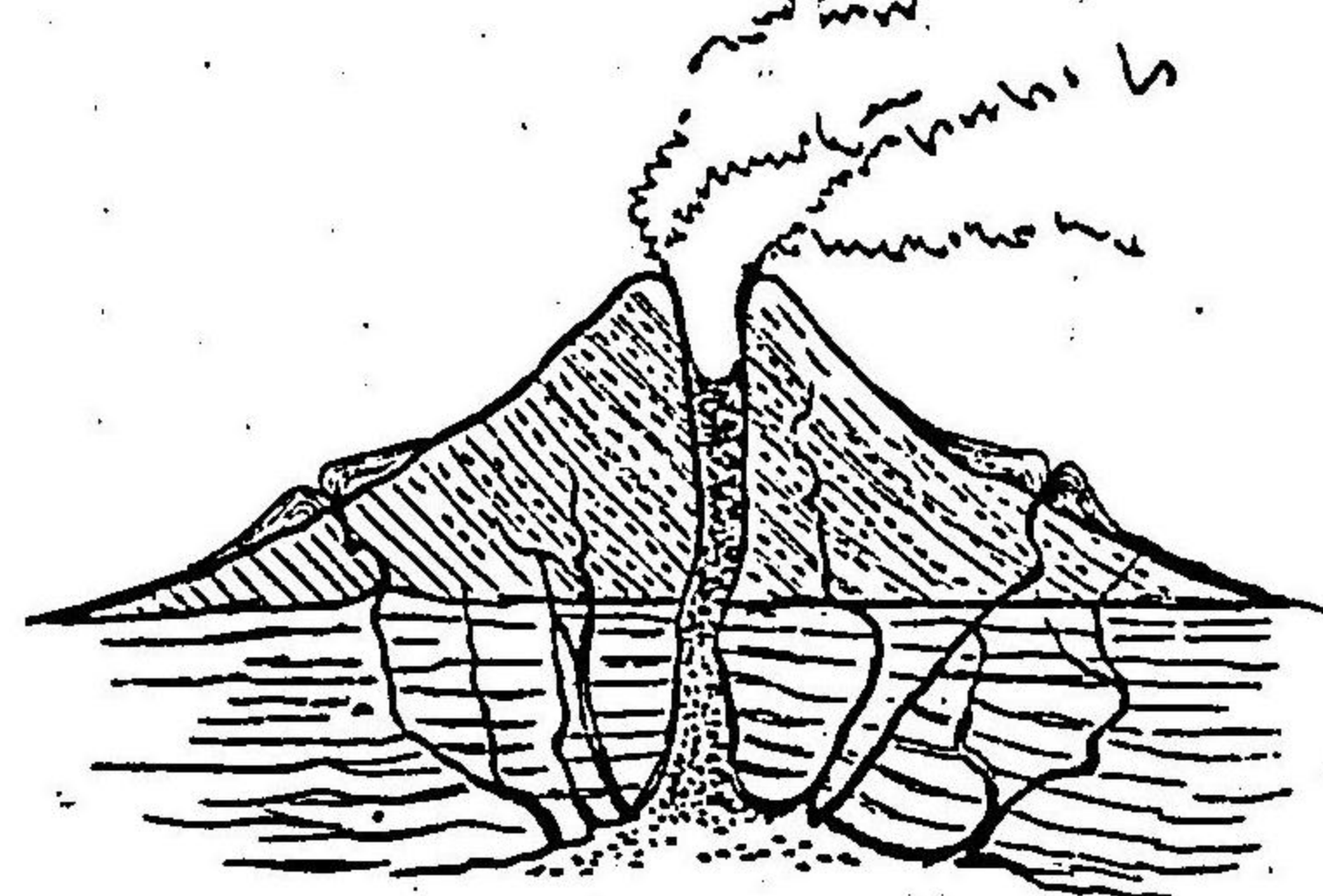
外輪山

なり。

火山は、其の構造上層成火山と塊状火山との二つに分かれ、又た其の活動の性質によりて、活火山・休火山及び消火山の三つに分かる。活火山は、現今瀕りに煙霧を噴出して、其の勢を逞ふするものを云ひ、休火山とは、又一名睡眠火山と稱し、有史以後一度び活動したるも、目下休止して其噴出中絶したる者を云ひ、消火山とは、有史時代に活動したる事なきは勿論、其の記録だになきと雖も、其の構造上より全く火山たる證據ある者を云ふ。

火山の形状は、大抵圓錐状をなして、其上に漏斗状の孔あり、之を噴出口と稱す、通例深く内部に接續して、一條の管をなせり、之を噴出溝と稱す、又た噴出口の周壁を火口壁と稱へ、其の周圍五六里に及ぶ事ありとす。尙此等の外火山には、副火口と稱し、噴出口あるに拘らず、山腹に孔を見る事あり。又た火山の噴出口を遠く取り巻く輪状の山あり、之を外輪山と稱し、舊き火山の遺跡として、大抵の火山に之を見出し得べきなり。而して活火山にして、其の噴出の際種々の噴出物あり、普通は瓦斯水蒸氣を吐くと雖も、其激烈なる者に到りては、此等の外火山灰

火山噴出物



と火山毛を降らし、火山礫、火山砂、火山弾を飛ばし、岩石を抛出し、更らに熔岩を流出し、風を呼び、雲を起し、雨を降らし、電光閃めき、雷鳴響き、天地爲めに凄然慘状を極む。蓋し其の煙と見ゆる者は、水蒸氣にして火と認むるは、熔岩が水蒸氣に反射するものにして電光の起るは、昇降する岩片の摩擦によるものなり。故に火山と稱するは、火の山にあらずして、寧ろ水蒸氣の山と云ふべきなり。

火山の原因に關しては、異説多く是れありと雖も其の主なるものは、乃ち地殻の地皮冷却して、裂罅を生じ、一部は毛細管現象によりて、熔岩上昇し、他の一つは、水の膨脹力によりて、激烈なる上昇を生ず。蓋し地球は固體にせよ、地熱あると、並に上部よりの壓力ある爲に、内部は悉く液化し、以て地表の弱部又は裂罅に沿ふて上昇し、其の熔岩を噴出するは、瓦斯の力大に力あり。而して其の瓦斯は、是れ地表水の地下に浸透

したる者、地熱に遭遇して、忽ち變じて瓦斯となり、以て周邊に膨脹するものなり。故に今日世界の火山の排列を見るに、多くは海岸近邊に存在するを以て、其證跡明かなりとす。要するに、火山は水と地熱とより、瓦斯物生じ、物理的作用に依つて、地球内部の裂罅部を通ふじて、地球表面に噴出するものなり。

火山は、強ち陸地に限られず、或は海水面以下にありて、怒濤を昇騰せしめて、水蒸氣、熔岩等を噴出する事あり。之を海中火山と稱し、往々其の現象を見るべき事あり、明治三十五年鳥島の噴火したる際、其の附近に海中火山の裂罅を認めたりといふ。

火山も亦、普通の山岳の如く脈をなして相連続する事あり、之を火山脈と稱す又群をなし、火山群彙をなすものとす。而して火山脈は、大抵地皮の裂罅線上に排列し、多くは大洋の縁海邊、又は海底山脈、島嶼に排列するが如し、今其の主なるものを擧ぐれば左の如し。

(イ) アジアに於て、

大陸にしては、カムチヤカ半島、天山、裏海の南岸及び裏海と黒海との間、アルメ

本邦地理詳説

ニヤ、小アジア、アラビヤの東海岸及びアデン地方等にして、島嶼に於ては、日本諸島、フィリピン群島、スタマラツカベンガル諸島、パレン諸島等なりとす。

(ロ) オースタラリアに於て、

大陸にして、オースタラリアの南部にあり。島嶼にては、ハワイ諸島、ニューヘブライデス、サンタクローズ、マリアナ、ニュージーランド等なり。

(ハ) ヨーロッパに於ては、

大陸にして、イタリー、スペイン、ハンガリー、ドイツ、フランス等にして、島嶼にては、アイスランド、アゾス及び地中海の諸島なりとす。

(ニ) アフリカに於ては、

大陸にして、ギニヤ灣の西岸及びサハラ沙漠の東岸にあり、島嶼にては、マデイラ、ケープベルト、島カナリ諸島、マダガスカル島、モーリチアス諸島、紅海の諸島是れなり。

(ホ) アメリカに於ては、

大陸にして、アラスカ半島、英領カナタ合衆國の西部、メキシコ、中央アメリカ、

リユーにして、島嶼には、アンデス諸島、アレチアン諸島、カアキレンチアン諸島及びガラバゴス島嶼なり。

二八 噴氣孔及び硫氣洞

硫氣洞
噴氣孔
炭酸噴氣孔

休火山の火口其他より、屢々硫化水素、亞硫酸瓦斯等を噴出するあり、之を硫氣洞と稱し、其の水蒸氣を噴くものを噴氣孔と云ひ、炭酸瓦斯を噴出するを炭酸噴氣孔と稱す。蓋し此等は、火山力の餘勢にして、其の活動止みたる後にも、此の現象を來たすものなり。初めは主に、亞硫酸又は硫化水素を吐き、後漸次其の硫黄減少して、水蒸氣を増力し、終に水蒸氣噴氣孔と變じ、最後に其の水蒸氣衰へて、炭酸瓦斯のみとなりて、炭酸噴氣孔となるものなり。世界廣く、又た各國多く之を見出し得べく、我が國に於ても、彼の地獄谷、大湧谷、小湧谷と稱するは、皆此の噴氣孔に外ならざるなり。

二九 溫泉

地球の内部より湧出する者を泉といふ。而して泉は、地中を循環する面、多少の鑛物質を含有す、之を鑛泉と云ひ。鑛泉には、溫度の低きものあり、又た高きもの

泉
鑛泉

冷泉
温泉

單純泉
硫黃泉
鹽類泉
炭酸泉
酸性泉

本邦地理詳説

あり、前者は冷泉と云ひ、後者を温泉といふ。然れども、こゝに冷泉と云ひ、温泉と云ふは、甚だ漠然たる區別にして、勿論各地の位置、國の溫度によりて、相異なるべし。乃ち寒帯地方にて温泉と稱するものは、温帯地方にては冷泉となり、温帯地方にて温泉と稱すべきものも、熱帯地方に到りては冷泉となりぬべし。故に今日に於ては、熱帯の高氣温乃ち三十度以上を以て、通例温泉と稱す可き様、定めたりき。

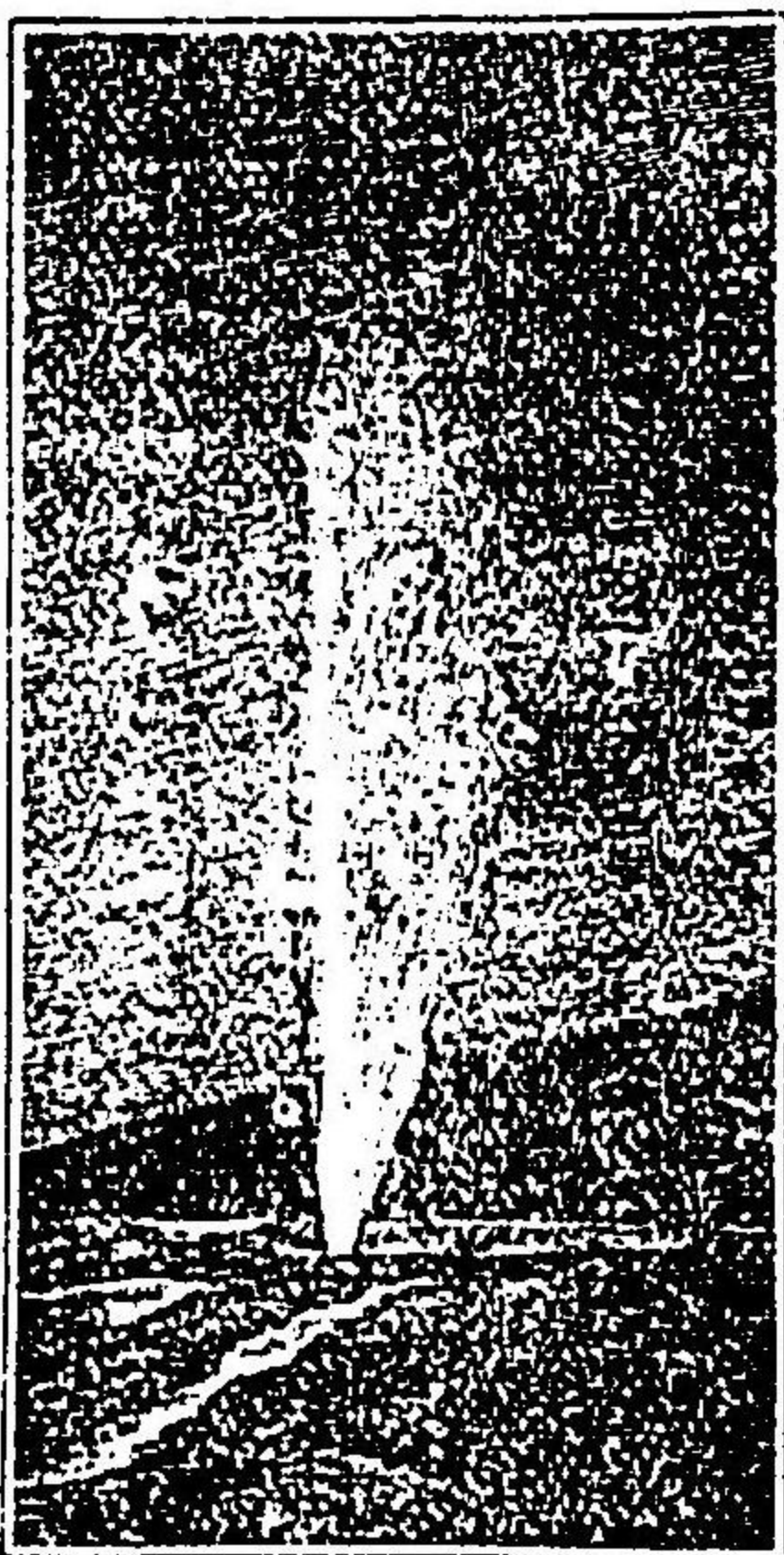
温泉高温なる所以は、蓋し其地の深き所に於て酷熱なる地熱に遭遇して上昇し、而して其上昇する間、地層中の礦物質の固形分を溶解し來るものとす。温泉は其の礦物質を含有し、其の種類により、單純泉、硫黃泉、鹽類泉、炭酸泉及び酸性泉に分つべく。單純泉は、礦物の量極めて少なく、殆んど普通の湯と異ならず。硫黃泉は多量の硫化水素を含有す。鹽類泉は、食鹽、硫酸、曹達、硫酸、苦土等を多量に含有す。炭酸泉は炭酸を多量に含む。酸性泉は、硫酸、亞硫酸及び鹽酸等を多量に含むものなり。

温泉にして、一定の時を経て、水蒸氣並に沸湯を噴出することあり。之を間喝

地震
地震の原因

間喝泉
岩喝泉の原因

間喝泉



泉と稱す。今其の原因に關し、マツケンジー氏の説によれば、下の如し。乃ち地下に一大洞穴ありて、岩石の裂罅及び孔隙等より滲入したる地下水は、此所に集まりて、一定の水平に達す。然る時は、其の水地熱の爲めに温められて、洞穴内の水は、次第に高温となり、終には沸騰點以上に達し、水蒸氣となりて

洞内を、上下に循環し、其の壓力は水面を壓迫するを以て、其の水は終に一つの通道によりて地表に湧出し、後ち一定の水平に到れば、水蒸氣の壓力減少して、湧出靜止すべしといふ。

三〇 地震

地震とは、地球内部に不安の所生じて、之れが爲めに地變を生じ、振動を起し、其の振動を各方面に傳播する者を地震と稱し、其の本源は必ず地の底にありとす。地震の原因は三つあり、乃ち火山地震、陷落地震及び地之地震是れなり。火山

火山地震

陷落地震

地心地震

海中地震

津浪

本邦地理詳説

地震は、火山作用にて起るものにして、火山破裂の際、其の附近の地に震動を起すもの、蓋し火山噴出する時は、必ず水蒸氣瓦斯又は熔岩等を噴出する故、其の力により地盤に振動を起し、附近に一大地震を起す者とす。陷落地震は地球の内部に洞穴を生じ、上部の地盤自重に堪えずして、こゝに落ち込み、夫れが爲めに周囲の部分震動を起すものなり、蓋し其の洞穴は、地下水の水蝕作用によりて生ずるものなり。地心地震は、是れ地震の主要源にして、多く其の現象を見る、乃ち地球の外部を構成する地殻の中に、龜裂生じ之れに沿ひて地盤の沁り込むによる。蓋し龜裂の生ずる所以は、地球收縮の結果に外ならざるなり。以上三種の内、地心地震は、屢々起る現象にして、又た比較的強震なり。我が國に於て明治二十四年の濃尾大地震は、此地沁りの結果なりとす。

地震は通例陸地に行はるゝものなりと雖も、又た海中にて此の現象を起すことあり。其の原因は、蓋し海底火山、或は海底陷落による者にして、波浪に影響して巨波怒濤を起し、延ひて海岸地方に、不時の災害を及ぼすことありとす。彼の津浪(一名海嘯)なる者は、乃ち海岸の地、又は海底に大地震の起りたる結果なり。

地震の配布

餘震

河川

地震は、地皮の弱點多き地方に起るものなれば、火山地方或は大山高嶽の附近に於て屢々其の現象を見る、乃ち地球上、地震多き所は、アジアの東部、カムチャカ半島、日本諸島、モルツカ群島に到る地、及び小アジア、ヨーロッパにては、其の南部、地中海の附近にして、イタリヤ之れが中心と見るべく、アメリカに於ては、北アメリカの西海岸一帯の地、及び中央回メキシコに多きものとす。

大地震の後にて、餘震なるものあり。是れ蓋し前地震の爲め、崩壊されたる地盤が、一定の安地に回復する爲め、起る現象に外ならざるなり。而して其の餘震の強弱及び繼續期間は、所謂主と見るべき、大地震の震動區域、又た震源の距離に關係するものにして、餘震の多きは、即ち震源淺く、震動區域の大なる結果なりとす。尙ほ餘震は十年二十年も繼續することありて、其の數大凡二千回に達する事ありといふ。

三 河川

河川とは、地球表面上一定の路回所にして、水の流れる者を云ふ。雨となり、雪となり、霰となりて、地表に落ち來る水は、大抵は蒸發し、又た地下に浸潤すると雖

本流

水域

河系

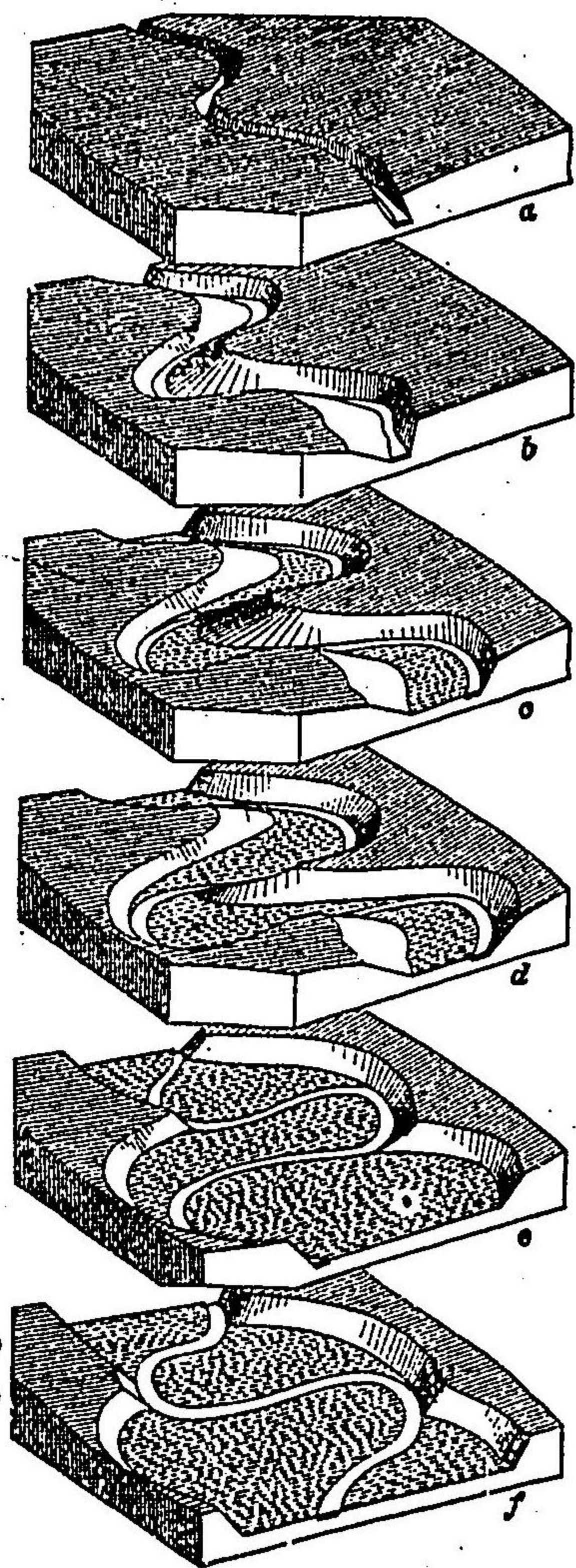
河口

三稜洲

本邦地理詳説
も尙ほ其殘剩の水は、表面を流れて、終に河となる。故に河川なる者は、必ず水なかるべからず、又動かざるべからざる者なり。

河川は大抵源を山間幽谷に發し、流れて終に海洋に注ぐ、之を本流といふ、然る

成生の川河

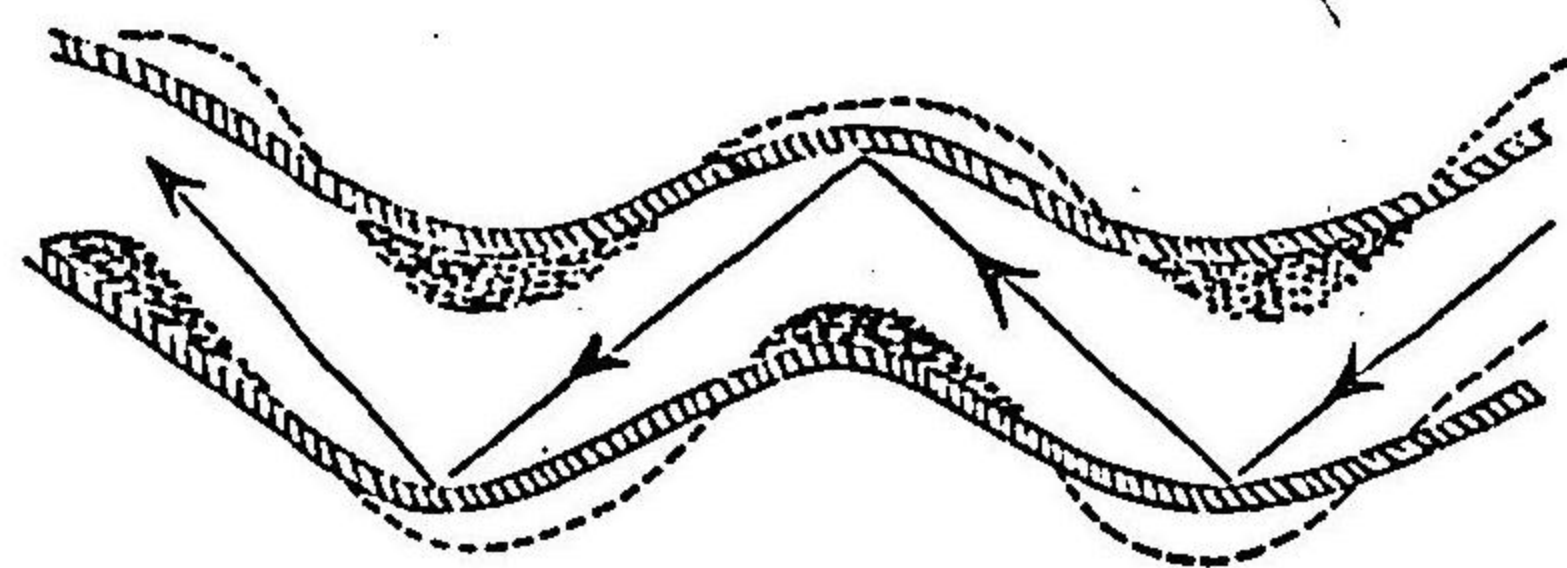


に河川には、多く支流を有するものなれば、其の河川の流るゝ區域を水域と稱し、其の本支流を合せて河系と云ふなり。河の初めて起る所を河源と稱し、河の海等に注入する所を河口と稱す。河口にして、末流分かれて海洋等に注ぎ、其の流水の間に挟まりて、多少三角形をなすあり、之を三稜洲と云ふ。

分水界
上流
中流
下流

河流の速力

河流の方向

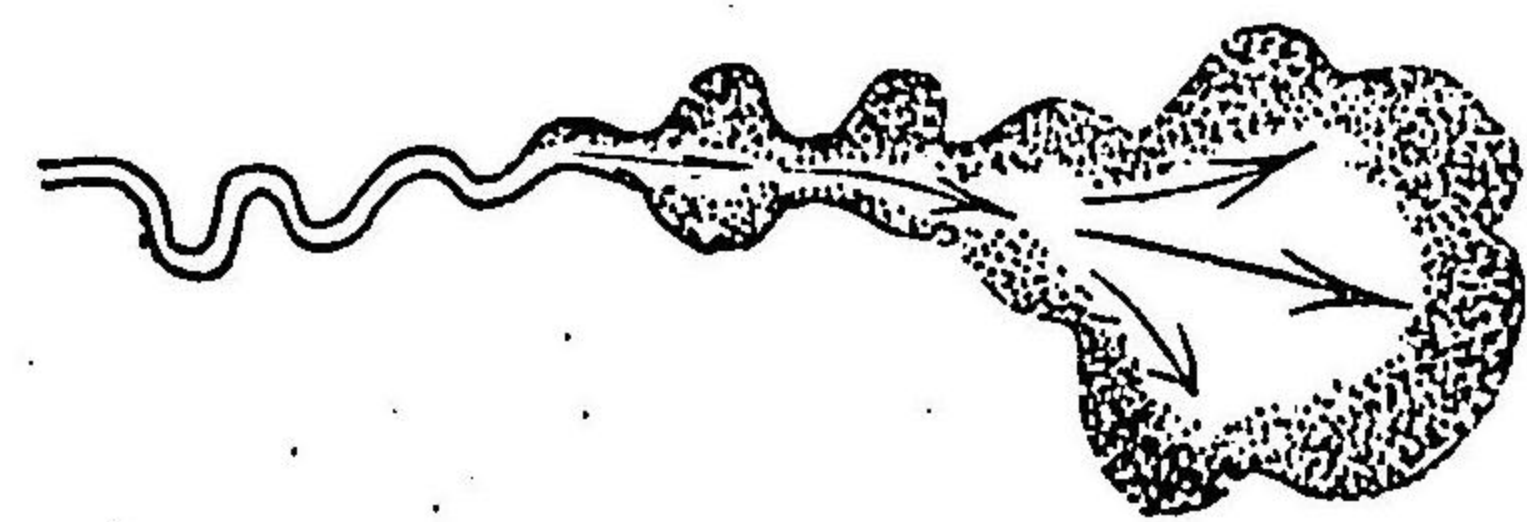


而して、一つの山脊又は高地にして、之より、河源を反對の兩側に發するものある時は、此の河源を分つ高地、山脊を分水界又は分水脊といふなり。

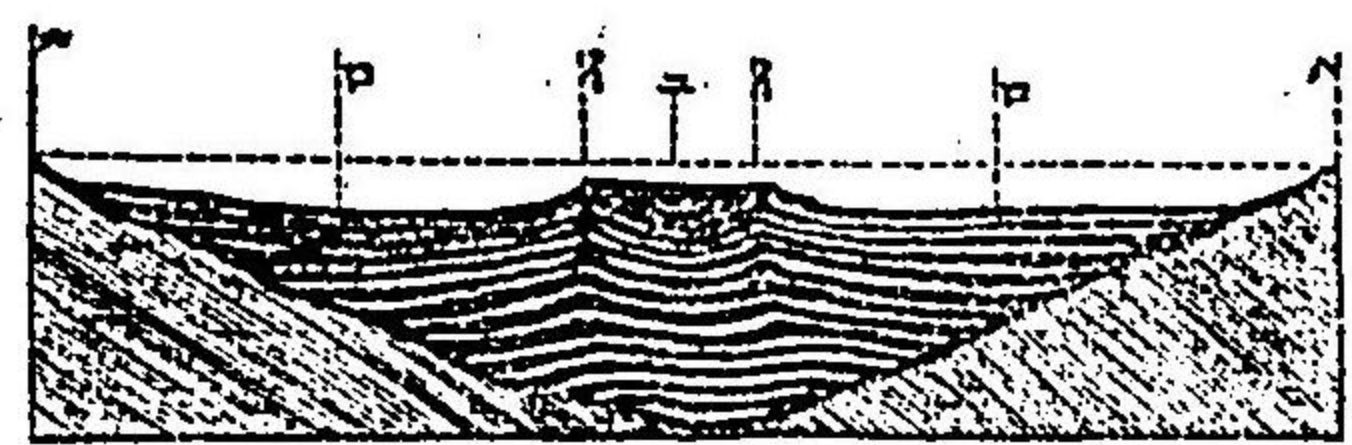
河流は上流、中流及び下流の三つに區別せられ、上流は又た山地の流水と稱し、降雨解雪の時、溪流として激しく流れ、且つ河床の勾配急なれば、水勢強くして土砂石礫を流すに足る、故に河底深く、穿掘されて、兩岸極めて高し。中流は、又た溪流と稱し、山岳丘陵の凹地、乃ち峡谷の間を流れ、河床の勾配稍々緩なりと雖も、尙ほ水流は土砂を運搬するに足り、石礫は轉送せられて、底部は漸く擴大となる。下流又た平原流と稱し、沖積地を迂曲回流し、終に海等に注ぐ、地勢は甚だ緩にして、沿道の低地に泥土、砂礫を沈積し、以て肥沃の土地を構成するものなり。

河流の速力は、一定すべからず、何となれば、河底の傾斜、水量に關係するのみならず、水源の高低、溪谷の廣狹、形状によりて、大なる差あり。乃ち水源高く、溪谷狭く、水量多く、且つ

河口土砂堆積の圖



河身横断の面



(ハ) 谷 (ホ)

(イ) 洪壇 (ロ) 湖原

流出するものなり、斯くて氷河が運動し流れて、終に海中に流れ込み、海上に浮ぶを氷山と稱し、現今兩極洋に於て、往々見る者なり。此等は、海流其の他、風力の爲め流されて、暖地暖流の所に來らば、忽ち氷解して、其の形ちを失ふ者なりとす。

三三三 湖沼

氷河

氷山

湖沼

淡水湖
鹹水湖

泉湖

湖沼ノ成因

火口湖

湖沼は、陸地の凹所に、水の滯溜したる者にして、河川と異なる點は、只流動すると、流動せざるとにあり。沼は湖の小形にして、且淺く、澤池は尙其小なる者なり。湖沼には、口あると口なきものとあり、前者は有口湖又は淡水湖と云ひ、後者は無口湖又は鹹水湖と云ふ。蓋し淡水湖は排流する口乃ち河川ありて、湖中の水は自由自在に流動し、新陳代謝をなし得べしと雖も、鹹水湖は排流する口なく、徒らに水の滯溜を見る。於是其の湖水は、太陽の爲め暖められて蒸發し、鹽分殘留して鹹湖となるものなり。尙ほこゝに注意すべきは、泉湖と稱するものあり、元來湖沼は大抵排流あり、又た入流あるべきものなるに、只に排流ありて入流なきものあり、斯は蓋し湖底より源泉湧出するに依つて、成立せるもの、故に之を泉湖といふ。

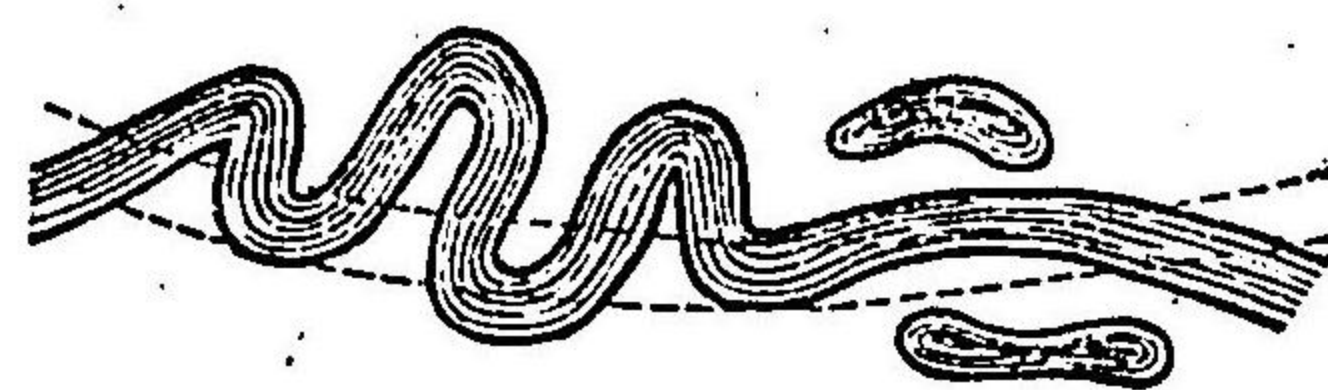
湖沼の成因に關し、種々あり、同時に各湖に對し、異なる名を生ずるものなり。乃ち休火山の噴火口内に雨雪の溜りたるもの、或は其の底部より泉の湧出するによりて、成立せるもの之を火口湖といふ。我が國の芦の湖の如き、之れが適例なり。火山爆發し、溶岩等流れて附近の河川流水を遮塞して、生成せるもの、及び

築堤湖
遠蹟湖
陷落湖
海岸湖
構造湖
山間湖
高原湖
平原湖

洪水の爲め、又は山崩の爲めに、河道遮塞せられ、水停滯して起生するもの。之れを築堤湖と稱し、我が國富士八湖の如き之れに屬す。往古の海底たりしもの、地盤の隆起して、乾陸となり、海との連絡絶えて、忽ち湖と變りたるもの、之を遺蹟湖と稱し、我が國の琵琶湖中央アジアの裏海の如き之れなり。地震に關し、地盤の一部陷落して、凹所生じ、水の溜りたるもの、之を陷落湖と稱し、我が國陸奥の十和田湖、之れが適例なり。風力により、海岸に砂丘を生じ、爲めに河流は其の口を塞がれて、流水停滯し、湖水となりたる者、之を海岸湖と稱し、我が國の猿間湖網走湖等之れに屬す。地層の稍曲斷層等によりたる者、之れを構造湖といふ。其他河道の屈曲、其の度を過ぎて、新に河道を開き、其の結果舊河道に水の停溜するもあり。我が國の印幡沼の如き、又た氷河の遺跡に水の滯溜するもの、或は動物が流水上に巢を作りて、流水を塞假し、終に湖となりたるものあり。而して、其の湖沼の存在位置により、山間湖、高原湖、平原湖に分かれ、山間湖は人生に裨益する所少なしと雖ども、風景に富み精神を養ふ事多し。反之、高原湖、平原湖は灌溉に資し、交通を助くる事甚だ多しとす。

湖沼消滅の
原因

河道の新と舊



最後に云ふべきは、湖沼の消滅なり、湖沼は往々變じて桑田と化することあり。蓋し其の原因は、涸渴、填充、堆積の三つに起因するものにして、涸渴は降雨少なき地、並に氣候暑熱にして蒸發多き地にあり。填充は河水流れて土砂を運搬するに よりて、湖底淺くなるものなり。堆積は、植物等の枯渴して湖底に堆積し、又は水草の腐敗堆積する時、湖沼底淺くなりて終に全く湖沼の性質を失ふに到るものなり。

三三三 平地及び高地

地球表面に於て、平地と云ひ、高地と云ふは、是れ比較的の語名にして、其の間判然と區別し能はず。而して、平地は、分かれて陷落平地と低平地との二つとなり、前者は海面以下にあるものにして、後者は海面上僅かに六百尺内外にあり。高地とは、低平地より高くして、通常千尺内外に位し、夫より以上にて山岳起伏するものは、丘陵と稱へ、又臺地、高臺と稱す。

平地は、縁海にあるものと、大陸の内地にあるものと、及び山岳丘陵の間に介在

沿海平原
湖底平原
沿河平原

本邦地理詳説

する者とあり、故に平原を分ちて、沿海平原、湖底平原、及び沿河平原の三つとす。

沿海平原とは、陸の縁邊乃ち丘陵山岳の海岸に迫り、河水の運搬したる土砂の堆積し、或は崩壊したる岩石山岳より轉送堆積して成生せし平原にして、尙ほ之を細分すれば、狹岸廣岸帶狀老朽沿岸平地となるべし、而して此等は、多く山麓の海濱に迫り、低地に緩斜し、其の面積の廣狹及び其の平原の土質の如何に關し、區別せられたるものなり。湖底平原とは、往古の湖沼或る地變の爲めに、水涸かれて平原に化したるものなり。沿河平原とは、河水の汎濫、其の他の作用の爲め、生成せられたる者、所謂沖積層平地にして、其の土質は崩壊されたる岩石、又は河水の爲めに運搬堆積したる粘土砂石にして、土壤豐饒、灌溉の便少なからずとす。而して沿河平原は、分かれて串狀堂狀及び楔狀平原の三となり、其の間の區別は、只河流の區域により、其の平原の形狀相異なるによりて、此の名を生ずるものなり。現今世界中平野と稱し、耕地灌溉の便多きは、此の沿河平原にして、到る所に之を見出すべく、我國に於ても、亦大平野と稱すべきは、所謂沿河平原に外ならざるなり。尙ほ平原平地にして、表面砂礫を以て蔽はれ、水氣なく、植物寸毛

沙漠
蝕削臺地
熔岩臺地
堆積臺地

氣温

も生ぜざるあり、之を持に沙漠といふ。

高原とは、海面上著しき距離にありて、其の平坦面は、多く荒陵にして、砂礫堆積し、周圍は山脈に繞圍せられ、總て絶壁なる者なり。分かれて蝕削臺地、熔岩臺地、及び堆積臺地となり、蝕削臺地は、風雨霜雪等の浸蝕作用によりて生じたるもの、多くは平坦なる地形を呈せり。熔岩地は、火山熔岩の流れて凝結して、成生したるもの、多くは平坦なりと雖も、時に急斜せり。堆積臺地は、山岳谿谷の向斜層地に堆積したるものにして、崩壊したる岩石、溪谷を填め、一見山岳丘陵の狀を呈せるものなり。

要するに、平原は主として、河水の運搬したる物體の堆積よりなりたるを以て、河流域又は沿岸地方に多く。高原は、山脈の結合點か、或は火山噴出物の堆積並に湖底遺蹟等に多きものとす。

三四 氣 温

氣温とは、大氣の温度にして、其の温度の本源は太陽にあり。然れども、實際に於て大氣其の者が、太陽の熱を吸収するものにあらず、又は是れありとするも、其

の分量は甚だ僅少にして、凡そ四分の一にすぎず。他は皆太陽によりて、温められたる地面、或は海洋面の反射熱を吸収するによるものなり。

地球の圓體なる爲め、且地球表面上、山河の分布陸海の位置複雑し居る爲め、氣温は種々に變化し、各地に於いて時に相違を現出する事あり。今其の主なる原因を擧ぐれば、一、其の地方が赤道に遠きと近きとにより、氣温上變化を來たす是れ乃ち太陽の光線の來射の方向を異にする結果にして、赤道に近ければ、直射を受け、遠ければ斜射を受けて、比較的冷寒を覺ゆ、乃ち熱帶温帶及び寒帶の分かれる、所以なりとす。二、其の地方の高低如何に關係するものにして、高ければ寒し、低ければ温暖なり。乃ち太陽熱は、大氣を温めるにあらずして、一旦大氣を透過して、地面又は海面に到り、其の地面海面を温め、然る後、其の反射熱によりて、初めて大氣の温度を生ずるものなり。且つ氣體は温めらるゝに従ひ、次第に膨脹して軽くなり、上昇し同時に温度を失ふ者なり。故に山上は、山下より冷涼にして、高地は低地に比し寒冷を覺ゆる者なりとす。三、其の地方の傾斜の方向に關係するものにして、太陽の光線の來射が、其の方向の前にある時は、温暖にて、之れ

に背く時は、寒冷なりとす。四、其の地方の地勢に關係するもの、乃ち山脈の有無により、雨量の多寡又は其地の風向を左右し、延ひて氣温に影響を及ぼすものなり。五、其の地方が海洋を去る、遠きと近きとに關す。元來、水は陸よりも比熱大なる結果、熱する事遅く、反之一旦熱せられたる時は、其の熱を放散して冷却すること甚だ遅し、故に海洋は其の附近の氣候を調和する事多きも、乃ち海洋より吹き來る風は、夏は涼しくて、其の地の炎熱を和らげ、冬は温くして、其の地の酷寒を削減するものなり。されば、海岸又は島嶼の如く、水に接近する地は、水面の影響を受けて、氣温は四季其の宜しきを得、之を海洋的氣候又は島嶼的氣候といふ。然るに、海岸海洋に遠き地方、所謂大陸の内部は、其の温水の影響を蒙らず、又た吹き來る風は、必ず多少陸地を經過し來るを以て、従つて夏は暑く、冬は甚だ寒し、之を大陸的氣候と稱す。六、海流の通過其の方向に關するもの、乃ち海流には、暖流と寒流との二つありて、前者は其附近の温度を高め、且多量の濕氣を齎らして、氣候を調和すと雖も、後者は、却て其の附近の温度を低くし、又た蒸發乏しきが爲め、濕氣を供すること少なしとす。七、風の方向に關係するもの、乃ち風が南方赤道

附近より吹き來るか、或は北極地方より吹き來るにより、其の地方の氣温上大に差あり、多くは南風は温暖に、北風は寒冷なりとす。要するに氣温の寒暖は種々の關係によりて起ると雖も、陸地は水面よりも寒暖共に酷烈なるものとす。

如斯氣温は種々の關係上、寒暖を生ずる者なる故、こゝに氣温の平均を知るべき必要あり、之を平均温度といふ。蓋し、其の平均温度は、一日中の者と、一個月の者と、一年間の者とあり。乃ち一日中の平均温度とは、一日中數回の觀測をなし、之を平均したるもの、一箇月中の平均温度は、一日一日の平均温度を、一ヶ月に纏めて再び平均したるもの、一箇年の平均温度は、毎日の平均温度を、平均したるものなりとす。

地球表面上、温度の高低を一目の下に瞭然たらしめん爲め、茲に地圖上に同温度線を畫かん必要生ず。乃ち同温度線とは一ヶ月のものを平均して一線に引く者あり、之を月同温度線と稱し。又た一年間のものを平均して一線に引くものあり、之を年同温度線といふ。然れども、尙ほ一年中月により多少寒暑の相違を生ずるにより、更らに一月及び七月に同温度線を引く事あり、以て其の温度の精確を見は

平均温度

同温度線

月同温度線

年同温度線

すものなり。

三五 風

風とは、大氣の流動なり。何故に大氣流動するや、其原因に到りては、種々ありと雖も、要するに、氣温の差密度の關係によるものなり。乃ち一地方の大氣の受熱が、共に一様にして、同一なりとせば、密度の關係は、少しも生ずるものなきに、先きに記したるが如く、種々の原因により、各一様ならざるなり。而して温ためられたる大氣は、膨脹し且つ軽くなりて上昇し、以て一地方の氣界を疎薄ならしめ、反之寒冷なる大氣は、收縮し且つ重くなりて、下降し、以て一地方の氣界を濃密ならしむ、故に氣體は、此の厚薄を平均ならしめんが爲めに、一つは上昇し、一つは下降して、こゝに氣流を生ず、是れ風の依て起る所以なりとす。冬日室内を温め置く時は、戶外より寒冷なる大氣吹き來るが如き、之れが適例なり。

風は、其の流動の速力に依り、種々に分かれ、陸上にては七種となり、尙ほ海上にては、十三種となる、乃ち左の如し。

陸上にて、無風、烟直上するのみ、軟風、漸く人身に感ずるのみ、和風、枝葉を動かす

風の種類

風の起因

風

無風 軟風 和風 疾風 強風 暴風 颶風 恒風

本邦地理詳説

のみ)疾風(小枝を動かすに到る)強風(勁枝を動かすに到る)暴風(幹樹を動かすに到る)颶風(猛烈の風にして山を崩し家を倒し大に慘狀を極む)是れなり。尙ほ海上にては、平穩至輕風、輕風、軟風、和風、疾風、雄風、強風、疾強風、大強風、全強風、暴風、颶風なりとす。

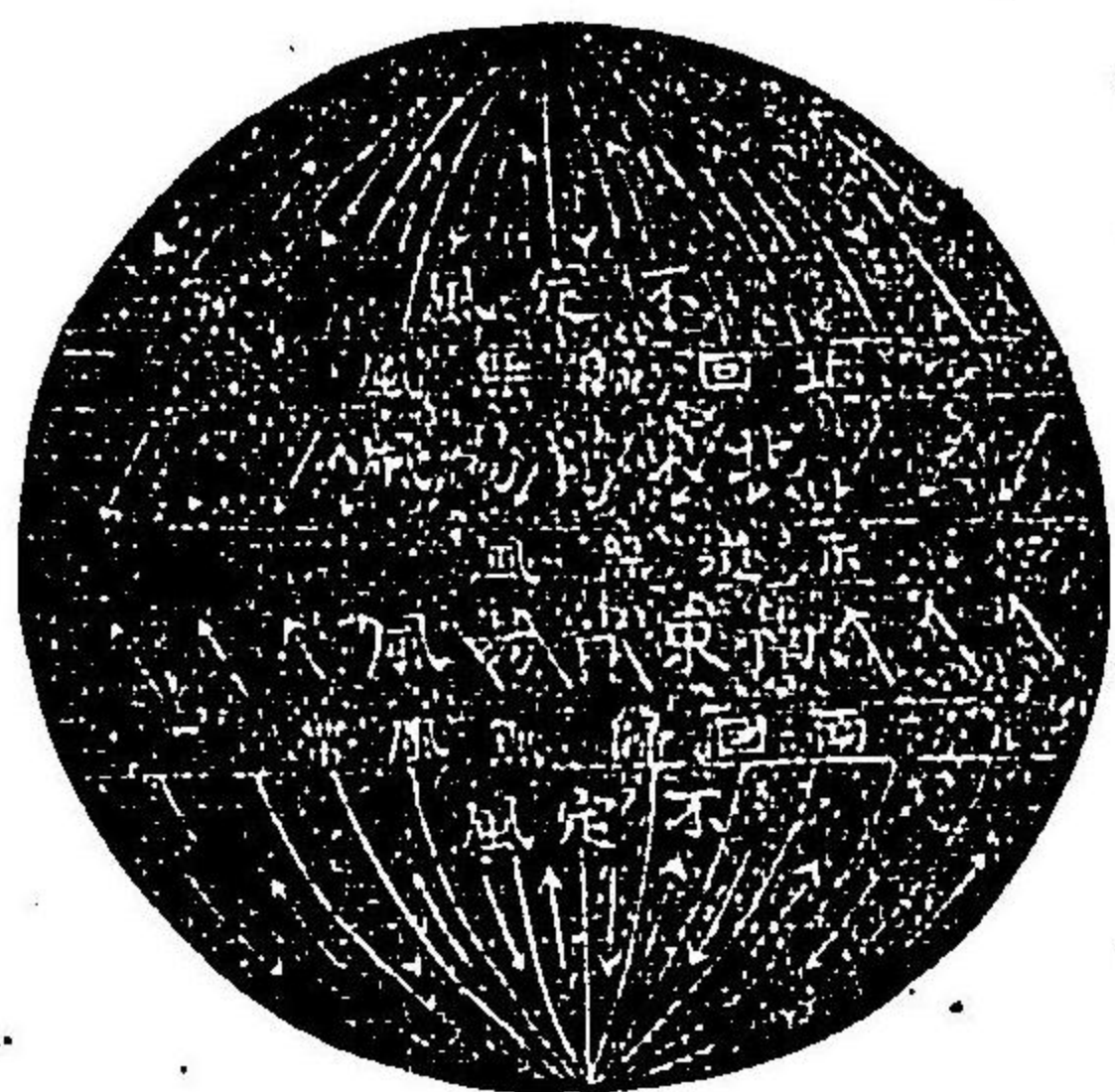
恒風。地球上、赤道直下の地方乃ち熱帶地方は、太陽の受熱最も多くして、四季共に暑く之れに反し極地方乃ち寒帶地方は、太陽の熱を受くる事少しく、従つて四季通じて寒冷なり。されば熱帶地方の大氣は、常に温らめられて膨脹し、稀薄となりて軽く、且つ上昇し、寒帶地方の大氣は、常に寒くして收縮し、濃厚となりて重く且つ下降す。而して熱帶地方に於て、軽く上昇したる大氣は、上にありて更に二つとなりて南北に向つて流動す。蓋し其流動するや、是れ上昇したる大氣は、溫度を減少し、同時に收縮して重くなり、地面に下降する者なり。反之寒帶地方寒冷の大氣は、重くなりて收縮し居る故、地面を俯ひて南方に流動し來り、熱帶地方の稀薄なる大氣を填充する者なり。如此地球上の大氣は、一つは温められて上昇し、一つは寒冷となりて下降するを以て、常に冷熱の大氣の循環交代ありとす。

貿易風 反對貿易風 赤道無風帶 回歸無風帶 貿易風及反對貿易風の方向 季節風

るものとす。故に所謂温帶地方にては、恒に熱帶の方に向つて、吹く風あり、之を貿易風と稱し、赤道の南北三十度以内の海上を吹くものなり。此の風は、貿易の航海上甚だ便なるを以て、此の名ありとす。又熱帶地方より寒帶地方に向つて常に上を吹く風あり、之れを反對貿易風と稱す。赤道近傍は、此貿易風南北兩方より相衝突して、上に昇り常に靜穩にして、一定の風あり、之を赤道無風帶と云ふ。又熱帶地方より寒帶地方に向ひし反對貿易風は、次第に下降し收縮し得るも、尙ほ面積に比して過剩を生じ、一つは極地方に流動するを以て、互に相壓迫し、茲に氣流は靜穩となる、之を回歸無風帶と稱し、南北緯度三十度邊にありとす。貿易風と云ひ、反對貿易風と云ひ、共に南より北、北より南に吹くべき筈なりと雖も、地球自轉する結果、惰性の關係によりて、赤道より極地に向ふものは、北半球にては、少しく東に偏し、極地より赤道に向ふものは、西に偏す。南半球にては、全く反對の方向にありとす。

季節風。又は定期風。貿易風は時に大陸の影響を蒙りて、著しき變化を生じ、甚しきは正反對の風を生ずる事あり。是れ乃ち季節風にして、重にインド洋の北

風の方向



部に吹くといふ、蓋し夏季に到りて陸地は著しく熱せられて大氣温まり、稀薄となりて、上昇する故に、海上より大氣流入し來る者なり。反之冬季に到れば、其の關係全く正反對となり、陸地は甚だしく冷却し、海上暖なる爲め海上の大氣は稀薄となりて上昇し、こゝに大氣の流動を見るなく。斯く季節により、方位を變する風を季節風と稱し、又た定期風と稱す。乃ち我が國に於て、冬季西北の風吹き、夏季東南の風吹くは、之れが爲めなり。

海風 陸風

地方風。各地の沿岸地方にして、朝夕時を期して異なる風の吹くあり、乃ち晝間は陸上の大氣、海上の大氣より稀薄となりて、上昇し、海上の冷なる大氣は濃厚となりて收縮し、以て前者の虚を填充せんが爲め、陸に向つて流動す、之を海風と稱す。反之、夜間は、海上の大氣は、陸上の大氣より暖にして、稀薄なる爲めに、陸の濃厚なる大氣は、海上の大氣を充たさんが爲めに、海に向つて流動す、之を陸風と

夕ナギ 朝ナギ 山風 谷風

暴風の速力

稱す。而して海風の陸風となり、陸風の海風となる時、一瞬全く風なき際あり、之を夕ナギ朝ナギと稱し、風の交換期として、兩風相衝突する結果、此の無風を生ずるものなりとす。尙ほ地方風として、山風谷風と稱するものあり、蓋し其の原因結果は、皆共に陸海風と相同じきものとす。

風は、平常に於ては、所謂和風軟風にありと雖も、時に暴風を生ずることあり。蓋し其の原因に到りては、未だ定説なしとす、乃ち特に一地方著しき低氣壓(寒冷の大氣)生ずるにありて、支那海附近に多く、春秋二季、季節風の變化交代期に、之を現出する者なり。此の暴風を起したる低氣壓は、一定不變同所に停滯するにあらずして、或方向に進行するものとす。而して其の暴風の速力は、所により多少の相異ありと雖も、先づ一時間二十八里以上にして、時に六十里走る事ありといふ。何故に速力強大にして、低氣壓の異動するかは、尙ほ後章重要事項欄にて記述すべきなり。

三六 雨 雪

地球上の水は、太陽熱の爲めに暖められて、絶えず多少蒸發し、水蒸氣となりて

濕氣 飽和 露點 霧霜露 雲 雨 霰雪霰

本邦地理詳説

大氣中に飛散す。故に、大氣中には、必ず多少此の水蒸氣を含有するものなり、之を濕氣と云ふ。蓋し其の分量の如何は、氣温に關係するものなりとす。乃ち氣温高き時は、多く之を含み、低き時は、少なし、大氣は、此の濕氣を含み得るに、一定の限りありて、此の限りに達したる時を、飽和と云ふなり。而して、飽和したる大氣の温度にして、下降する時は、其の温度以上の水蒸氣を含有する能はず、されども其の大氣をして、冷却せしめたる時は、飽和せしむる事を得べし、乃ち大氣の冷却によりて、飽和に到りし點を、露點といふなり。露點以下となれば、濕氣は凝集し、地面附近に於て、露となり、尙ほ冷却して、氷點以下となれば、露は固體となりて霜となる。又た濕氣の凝集にして、地面の附近の空中にて起る時は、霧を生じ。更らに一層高く、大氣の上際にて起る時は、雲を生ず。而して雲の水分子、互に凝集し、水量漸く多くなり、且大氣に運動ある時は、水分子互に衝突し、合聚して、終に大氣より、地上に落下し、雨となる。又た大氣の氣温、氷點以下にて凝集し、結晶して、片狀をなすを雪とし、其の結晶の大なるを雹と云ひ、小なるを霰と稱するなり。雨は、雲の水分子相衝突し、合聚して、終に大氣より、地上に落下したるものなり。

三帶の降雨 雨季 濕潤季 乾燥季

故に、雨は地方に依りて、其降る量に相異なるべく、即ち只に緯度の高低によりて、其の差あるのみならず、其の地方にして、海洋を距る遠さと、近とにより、大なる關係あり、蓋し海洋附近の地は、氣温暖にして、従つて水蒸氣の量多く、降雨も亦多く、反之大陸の内部の地方は、水蒸氣の量少なきを以て、従つて降雨少なし、即ち島國に降雨多くして、大陸國には降雨少なきものとす。

尙ほ、降雨に關し、之を地球三帶に照し、見んに、熱帶地方は、總て氣温高き故に、降雨の多きは、勿論にして、且つ其の降雨の有様は、極めて規則正し、即ち太陽が赤道の上に来たる前後數月間は、毎日の如くに驟雨ありて、一年中の雨を降らし、去りて其の期を過せば、更らに降雨なし、されは熱帶地方は、一年殆んど四季の別なきにより、只此の雨の降ると、降らざるの兩季に別かる、即ち前者を雨季、又は濕潤期と稱し、後者を乾燥季といふ。温帶地方にては、氣温は常温にして、水蒸氣は所謂過不及にあらざれども、風の方向一定せざるを以て、従つて降雨は、不規則にて、熱帶地方の如く一定せざるなり。只春季、秋季は、寒帶地方より吹き來る寒風と、熱帶地方より吹き來る熱風と、相衝突會聚して、以て保存する所の水蒸氣を凝結

せしむる爲めに、割合に他の二季より降雨多しとす。寒帯地方に到りては、氣温寒冷なる爲め、従つて水蒸氣の發散すること少なく、降雨は比較的他の二帯に比して、少なきものとす。乃ち我が國に於て、北海道網走近傍が、我國の最寡雨たるを以て、略々寒帯地方が、降雨少なきを證するに足るなり。

雪は、さきに云ひし如く、大氣中の温度降ること甚しき、氷點以下に到れば、水蒸氣凝結して、地上に落つるものなり。故に、地球上寒帯地方は、常に降雪最も多きが如し、されど實際其の然らざる所以は、蓋し凝集すべき水蒸氣の乏しき結果に外ならず。依りて、地球上降雪の最も多きは、温帯地方にして、氣温の低き地方にあるものとす。

一地方にして、雨或は雪となりて降る水量を、其の地の雨量といひ、耗(ミリメートル)は我國の三厘三毛、又は厘(センチメートル)は我國の三分三厘にて示すを常とせり。而して、雨量は地方によりて相異あり、斯は蓋し氣温、風向、海流、地勢等が、各地により、各々相異なる結果にして、一般に熱帯地方は水蒸氣多く、従つて雨量多く、一年平均約二五〇〇耗に達し、温帯地方之れに次ぎ、一年平均約一〇〇〇耗

雨量

内外なり。而して寒帯地方最も少なくして、僅かに一年平均一二五耗にすぎざるなり。

三七 氣候

氣候とは、或る地方の冷熱と乾濕との有様、乃ち其の地方にての一定時間内に現出する平均の状態を云ふものなり。されば氣候なるものは、生物の生存繁殖に頗る關係するものなり。

熱帯地方の氣候は、四季共に氣温同じくして變化なし。赤道附近は、只雨季乾燥季に分かれ、亞熱帯地方は、寒温二季に分かるのみ、總て夏季は氣候一定して、温暖なりと雖も、冬は氣候の變化多く、西風吹き來りて、天候悪しくなる事ありとす。温帯地方の氣候は、北温帯にして水陸の分布、複雑し、島嶼、基布散在するを以て、氣候の變化最も著しく、大陸の内部は、海岸地方に比して、雨量少なく、温度亦低し、而して南温帯にありては、海岸多きを爲め、氣候は、海洋的なれば、従つて變化少し、只冬季は夏季より、風多く且つ暴風多し、されど寒熱の差殆んどなし。寒帯地方の氣候は、氣温年平均は、攝氏零度以下にして、夏と冬との間著しき相異あり、又

熱帯氣候

温帯氣候

寒帯氣候

た西風多くして乾燥す。

三八 天産物

天産物は、普通分かれて、生物及び礦物の二つとなり、生物は更らに分かれて、動物植物の二つとなれり。

礦物は、地球各部に散在するを以て、今茲に其分布を瞭然と區別し得ざるなり。反之、生物即ち動植物は、各帶多少其の趣きを異にす、蓋し生物は氣候氣温の變化地形の如何により、其の分布大に異なるものなれば、熱帶温帶及び寒帶地方夫れ夫れ特徴あり。されば、熱帶地方には、温帶寒帶の生物を見る能はず、又た温帶地方にて、熱帶寒帶の生物を見る能はず、寒帶地方にて、熱帶温帶の生物を見る能はず、故に各帶の或物を、他の一方に移殖せば、忽ち萎縮枯涸する者なり。於是乎、即ち生物の分布は、各帶に従つて異同なかるべからざるなり。

熱帶地方に於ては、濕氣充分なれば、常緑樹の植物鬱蒼として繁茂し、其の種類數多之れありて、其形狀一般に高大なり、且つ美麗なる花咲き、香味なる果を結び、又た液汁に豊かなり。即ち其の主なる者は、榕樹、棕櫚、椰子、樹芭蕉、バナナ、咖啡、棉

熱帶地方生物

温帶地方生物

寒帶地方生物

山と生物

花竹サボテン、無花果、蘇鐵等繁殖す。動物に到りても、亦其の構造強大にして、繁殖頗る盛んなり、其の主なるものは、象、獅子、犀、虎、河馬、鱈、魚、駝鳥、蛇、猿等あり。温帶地方に於ては、生物の繁殖、其の生長勿論、熱帶地方の如く、盛んならずと雖も、之を寒帶地方に比較すれば、遙かに旺盛に且つ優等にして、所謂四季百花笑ひ、禽鳥天涯に飛ぶの狀態を見るべきなり。植物は、總て常緑樹なるものは、少なしと雖も、人間生活上に至大なる利益を附與する樹木は、正に此地方に多し、即ち其主なるものは、橄欖、松柏、樺、桂、樹、楓、樹、榆、棉、茶、烟草、五穀、百菓等なり。動物に於ても、亦人間に必要な者多く、熊、猪、鹿、及び牛、馬、羊等の家畜類等、其の主なるものとす。

寒帶地方に於ては、氣温の低き爲め、生物の繁殖少なく、且つ生長の遅き、形狀の小さは、勿論なり。即ち植物にあつては、赤楊、水楊、矮樺等の小灌木及び蘚苔等にして、動物にては、白熊、馴鹿、海豹、鱒、鯡等なりとす。

熱帶温帶及び寒帶を通じ、氣温の相異なるが如く、熱帶温帶の山岳に於ても亦下部より上部に到り、氣温の變化あり。是れ蓋し、大氣濃密なると、稀薄なるとに異なるものにして、従て生物に異種ある者とす、即ち山麓にありては、其地方特有の

本邦地理詳説

生物生存するも、頂上近き所には、矮小の灌木生じ、一五〇〇〇尺以上に到れば、僅かに蘚苔等を見るのみ。即ち我が國の高山新高山に登らば、明かに其の現象を見るべきなり。

如此地球上の生物には、各地方の特色特徴あり、故に今固有生物に従ひ、地球上を次の六大帯に區別するを得べし。

- 一 新熱帯。西インド諸島と南アメリカ全體及中央アメリカ
- 二 新北帯。メキシコの中央より北極に到る、即ち北アメリカ全體
- 三 舊北帯。ヨーロッパ全體、アジア及びアフリカの北部
- 四 アフリカ帯。アフリカの中央より以南全體
- 五 東洋帯。東洋諸國及びインドマレイ諸島
- 六 オースタラリア帯。オースタラリア及び其の附近の島嶼を含む

本章重要事項

第一 水成岩と火成岩との特徴には、一、火成岩は塊状をなして層状を呈せざれども、水成岩は層状をなし、塊状をなさず。二、水成岩は有機體の遺跡即ち化石

を含有すと雖も、火成岩は全くなし。三、火成岩は、被離質多孔隙狀の結晶をなせども、水成岩は、是等の結晶なし。四、火成岩は、岩脈岩床岩鏡岩塊圍をなせども、水成岩には全くなし。五、水成岩は、水力の爲め、摺磨せられたる砂礫とを含有すと雖も、火成岩は之を含まず。六、火成岩は、噴出の際、他岩に接觸して其等の岩質を變化せしむる事あれど、水成岩は、斯くの如きことなし。

第二 近時地質學の發達に伴ひ、化石といふ名を屢々見る。蓋し地質學上化石といふは、其の實質が化石せると否とによらず、只其の動植物が生存せる時代か、地學上現今にあらざる時は、現時溫泉にて生成せらるる、彼の木葉石と云ふ如きは、其の形狀化石の如きも、之れ地學上化石といふべからず。何となれば是れ現世實際目前に、生成しつゝあるものなり。

第三 陸と海は、現在三と一との比例となり、海は陸より遙かに大なり。然れども今試に陸が海より大なりと假定せよ、然らば如何なる感慨あらむ。即ち氣候、所謂大陸的氣候の區域廣くして、不毛荒野の地廣漠として、際涯なからむ。從つて陸上の交通に至大の不便を感じ、更らに海洋を利用原生する今日に反し、海洋を利用する事少なく、文化の發達上非常なる關係を及ぼすべし。

第四 六大陸中、アジヤの面積最も大にして、ヨーロッパは第五位にあり、故に其の面積上より云へば、ヨーロッパはアジヤの大半島なる如しと雖も、政治上將又文化上より見れば、アジヤはヨーロッパの半島國なるが如き感あり、是れ蓋し

本邦地理詳説

ヨーロッパは世界の文明國なるに拘らず、アジアの全體は、四離五裂して、固あれど殆んど獨立し難き弱國たるの狀態にあればなり。

第五 島嶼には、大陸に於て見るべからざる特色あり。第一、四周海水にて圍繞せらるゝ結果、氣候の調和を來し、所謂海洋的氣候にして、四季氣温の變化緩慢なり。第二、島嶼國は、其面積區域狭小なる結果、住民は相親交し、協同一致の精神堅く、愛國心に富むものとす。然れども、反之其の缺點とすべきは、所謂島國根性なるものありて、雄大の志に乏しく、小成に安んずるの氣風あり、總て保守的の行爲多しとす。

第六 中島國は、古代文化の最も發達したる國なりしに拘らず、現時世界の中島國を見るに、一を逐ひ二に到る迄、大抵屬國にあらすんば、弱國なりとす。是れ何によるか、其の原因未だ知るべからずと雖も、朝鮮半島、インド半島、パルカン半島、イペリア半島等の如き、其の國勢を見れば、思ひ半ばにすぎん。

第七 地角即ち岬岬は、航行上重要な價值を有し、燈臺の建設ありて以て、航海の危険を警戒す、又た岬岬は、海流と一大關係ありて、魚族の群集に影響を及ぼす事は、世界の所謂漁業國及び我が國の近海に於て、明かに推知するを得べし。

第八 海洋、潮汐は、是れ海水の運動なるか、尙ほ夫れに加へて波瀆なるものあり。蓋し、波瀆の原動力は、風にあるものとす、乃ち風吹きて、水面を壓迫するの結果、其平準を失して、こゝに擾亂生じ、起伏動搖するものなり。而して、波瀆は、波山

と波谷とありて、一上一下して、順次其の運動を進行すと雖も、水分子は實際運動するのみにて、決して移動すべきものにあらず。尙波瀆の速力は、勿論風の強弱に關係するものなれども、約一秒間に二十五尺乃至八十尺、乃ち一時間約七里乃至二十二里の割合となれるものなり。

第九 海の色は、大抵藍色と綠色とに分かる、蓋し其の色の別かるゝ所以は、鹽分の含蓄如何によるものにして、鹽分多ければ藍色を呈し、然らざれば綠色をなせり。故に我が國近海を流るゝ黒潮は、其の海色黒藍色をなし、多量の鹽分を含む結果、此名を生じたるものなり。

第一〇 山岳は、吾人人類に取りて、蓋だ有用なるものにして、第一、山岳は、大氣中の濕氣の大半を吸收し、一般人生に缺く可からざる雨雲を降らすものなり。第二、交通上將た又た灌溉上人生に必要なる河川は、大抵源を山岳に發するものなり。第三、諸礦物は、大抵山岳中に藏せられ、且つ其の發掘上利便を與ふること少なからずとす。第四、高山の頂上にある寒冷なる大氣は、熱帶地方の氣温を調和するものなり。第五、山岳には、樹木繁殖して鬱蒼たる森林を呈し、其の間涓々と流るゝ溪流ありて、山水相呼應し、美景を呈し人心をして愉快ならしむ。

第一一 火山は、構造上、層成火山と塊狀火山とに分かれ、層成火山は、其の内部は外観上成層せる物質よりなると雖も、其の實際熔融の狀態にありし、噴出物の堆積

第三章 自然地理學

本邦地理詳説

に外ならず。故に層成火山の形には、大抵圓錐狀をなし、岩石は異質のものよりなる。而して塊狀火山は、其の形圓錐形より寧ろ鐘形をなし、又は岩蓋をなせり、尙其の岩石は異質の者にあらずして、何れの部分の同質より成立せるものとす。

第一二 地震の運動に二種あり、一つは波動と云ひ一つは直動といふ。直動は地震の中最も恐るべきものにして、上下垂直に震動するもの、蓋し震源其の直下にありて、震央の部分に當る時は、必ず直動を感ずるものなり。波動は、震央を距るに従ふて震動波形となり、地平的に震動するものなり、故に前者に比較すれば、稍々穏なりと雖も、其の實恐怖すべきものなり。尙直動波動の外に、施動するものあり、されど此の運動は、獨立の者にあらずして、前二者の運動結合してなりたるものなりとす。

第一三 河川は、上流より下流に向つて、適當の勾配を以て流るゝ者なりと雖も、其傾斜にして九十度に到らば、瀑布となる。河川交通上甚だ不利益なりと雖も、其の水勢を利用して人生缺ぐべからざる仕事をなし得る便あり、乃ち水力電氣の如き之れが一例なり。

第一四 河口は、他の川に注ぐもの。湖沼に注ぐもの。内陸にて消滅するもの。内海に終るもの。大洋に注入するものなり。而して河口の形狀には、漏斗狀をなすもの、多く江灣を有せり、河口をなすもの、河口に砂丘生じたる爲め、河口

蓋がれて瀉口出づ、三稜湖口。普通口(河口)に於て特別の形狀を爲さざるものとあり。

第一五 世界中の大河は、皆或地點に發源し、各方面に向つて流る。而して其の河口が南向なるか、或は北向なるかに従つて、其の流域沿岸の地に害を及ぼす事あり。乃ち北向せる河川は、源を温かき地に發して、寒き地に流るゝを以て、初夏氷解融雪の際、先づ河源に初まり、其の水は河口の猶、氷結して居る結果、其の流路を失ひ、溢れて沿岸の地に洪水を生じ、人畜を害すること夥し。反之、南向せる河川は、源を寒き地に發するを以て、融雪氷解の時は、先づ河口より初まり、其の水は流路を得て、或る海に流出し、決して害を及ぼすことなし。讀者は宜しく世界の河川に就き、尙ほ其の得失を推考せよ。

第一六 氷河は、世界到る所にあるにあらず、現世氷河のある地は、ヒマラヤ山、コンロン山、アルタイ山、アルプス山、ヒンニース山、ニュージーランドの高山、ノルウェーの北方諸山、及び兩極地方に見るのみ。

第一七 氣温の本源は、太陽にあり、故に一日中、太陽の直上に來る時、即ち正午十二時が、最も氣温の高き時なるに、實際は然らずして、午後二時前後最も暖かなり、又た氣温低き時は、午前〇時なるに、實際は朝、日出前にあり、更らに一年中夏至は暑く、冬至は寒冷なるに、實際は夫れより以後一ヶ月にあるが如し、是れ蓋し地球表面が、太陽熱を吸收し又た之を放出するには、多少の時間を要する爲め、

本邦地理詳説

此の現象を生ずるものなりとす。

第一八 稀薄なる大氣は、輕くなる爲め上昇す、故に他の濃厚なる大氣は、此の處を充たさんが爲めに吹き來る。されど地球は自轉ある爲めに、其の方向は決して一直線にあらずして、螺旋狀の跡を取り、四方より吹き來る、之れを施風と稱し。北半球にては、時計の針と反對の方向を取れり、(南半球は時計の針と同向) 又た反對旋風と稱するものあり、總て前者と正反對の方向と原因とに基くものなり。

第一九 雲は、水蒸氣の凝集したる者なるが、其の形狀千狀萬態にして、一見之れを區別すべからずと雖も、雲級によれば左の四級に分かれ、尙ほ細分して十種となる。即ち卷雲(白色を帯び、羽毛又は纖維の形をなせり)積雲(其の質、厚密、上邊は球狀にして、下邊は平たく、且つ色は少しく白色を帯ぶ)層雲(横に延び、帶狀をなし地の附近にあり)雨雲(灰黑色にして一定の形なし地面に最も近し)是れなり。

第二〇 雨量の分布は、種々の原因によるものなり、即ち山脈連なりて、濕氣を帶べる風の方向に直角なるものは、其の山脈の前面の地は、雨多くして後るは雨少し。山脈高くして、貿易風、氣節風の衝にあたる地方は、雨多し、是れ我が國に於て充分説明し得らるゝものなり。

第四章 人事地理學

三九 人類の區別

人類起原の當時は如何なる者にせよ、人類は動物界に於て特殊優秀の位置にあり、之を外觀的解剖的疾癘等總て體格上、將又た智力的、德義的、信仰的等總て心理上より其の基礎根柢とし、諸地方人民間に存する性質に則り、人類の變種即ち人種を區別して大略五種となす。蓋し此區別や人各々其主義見解により、分類の方法も亦種々之ありと雖も、今日人類學者中に行はるゝ人類の區別左の如し。

アジア系統人民
北部 日本人、朝鮮人、滿洲人、蒙古人
南部 タツタン人、ラツプ人等

支那漢人、シヤム人、ビルマ人、チベット人、安南人等

イギリス人、フランス人、アリアン、ドイツ人、イタリア人

人類區別

アヨロツバ系統人民
アフリカ人種又白色人種
(コーカサス人種又白色人種)

北 部 族
南 部 族

(ベルシヤ人インド人等
コーカサス地方人民
ビレニース地方人民
モロツコ人アルゼリヤ人
エジプト人等

ハミチツク

アラビヤ人アビシニア人
ユダヤ人等

セミチツク

セ子ガンビヤ人リベリヤ人
ダホメ人等

アツカフツシユメンホツテントツト等

スービニヤ人スタン人
バンツ人等

ダコマ人エキスモール人

南方アフリカ系統人民
(アフリカ人種又黒色人種)

子 子 子
グ グ グ
ロ ロ ロ

アメリカ系統人民
(亞米利加人種又赤色人種)

北 部 族
中 部 族
南 部 族

トリンケツト等

メキシコ土人等

バタゴニヤ人ブラジル人

テラデルフヨール人

チリール人等

タスマニヤ人トドロエツタ

オーストラリア土人等

マレー人ジャバ人臺灣蕃人

カロリン島土人マダガスカル島土人

アンダマン人ニコバー人

ニューギンヤ人

海岸島嶼人民
(マライ人種又褐色人種)

オーストラリア族
マライ族
子グリチツク族

世界の人口は、實に一、五四七、四二三、〇〇〇人なり、中最も多きはアジア系統人民にして、次ぎはヨーロッパアフリカ系統人民なり、此二者を合すれば凡そ全数の五分の四に達す。

四〇 文化

一五四七四二三〇〇〇人餘の人類に於て形體上の相違あるのみならず、又た其の社會發達の狀態により無數の階級ありと雖も、現今普通に用ゆる語に従へば野蠻・未開・半開及び開化の四つに分かる。蓋し其の意義に到りては區々なれど、多くは其の職業による者の如し。更らに此等人類は、或る一地方に永住する者と、時々土地を移住して一定の基なき者あり。故に之を定住人種・不定住人種と二大別する事とせり。

不定住人種とは、移住遊牧の人民にして一定の基礎なく、時々機に應じ諸所を遍歴する者なり。故に彼等は生計上直接の必要物體に關係し、未だ此物を産出すべき土地との關係を知らず、されば土地の所有權力よりは寧ろ食物需用品に對して、往々彼等の間に衝突を來たすことありとす。然れども尙ほ彼等の狀態を細見すれば、極力食物の爲め奔走漂泊する者と、及び土地との關係稍々繫留を來たし、或る時間時代は夫所に住居し、後ち更に移住する者あり。前者は狩獵・漁獵的の人民にして、後者は遊牧的の人民なりとす。斯くして野蠻の人民は、前者に屬

野蠻人民
未開人民
半開人民
開化人民
不定住人種
定住人種

し、未開の人民は後者に屬する者の如し。換言せば、野蠻の人民は其の位置最下等にして、智力蒙昧・性質頗る粹惡なり、職業は主として漁獵・狩獵に従ひ以て生計の途を營み、時に野生の果實を拾ひ、尙ほ甚しきは人肉を喰ふ、故に彼等の間食物を貯蓄して後日の缺乏に用意するの思慮は毛頭これなく、従つて耕作の何たるを解せず、常に漂泊的不安の生活をなす者なり。未開の人民は、前程に比し稍々發達し其の位置高しと雖も、尙ほ智識進歩せず、性質猛惡なり、職業は主として牧畜に従ひ、水草を逐ふて移轉し、間々耕作の業を營む、然れども一定永住の事なく生計に應ずべき産物の存在する間は住居すと雖も、若し中途にして天災の爲め消喝すれば、忽ち去つて他の地方に到る。故に彼等は固定的家屋あるにあらず、運搬に便なる天幕を有し之を以て家となし、風雨を凌ぐ者所謂半ば漂泊的の生活をなせり。

定住人種とは、只に食物と人生との關係を知るのみならず、一步進んで土地と人生との間に厚き關係生じ、人民は其の土地を耕作して食物を得、其の地に永住して製造物を作り、以て土地に對する思慮・念察の深くなるまゝに、所謂愛郷心起

本邦地理詳説

り文化の基茲に到りて定まる然れども實に細見して其の内部に入れば土地の關係其厚薄其區域の廣狹如何により二種となるべく乃ち半開開化是れなり。半開の人民は一定の住所を有し耕作の業を營み智識稍々發達し學問技藝多少見るべく又多少の商工業に従事すと雖も抑も其の土地は甚だ狹隘にして航海の如き只だ内部の靜海に止まり更らに現今文明の利器を用ゐずのみならず却て之を嫌惡し又了解せざるが如し。開化の人民は是れ現今人類高等の位置にあり智力最も發達し學を研き業に従ひ技術を練り分業の法行はれ道徳最も進歩す是れ等は一定の住所を有し其の土地は頗る廣く自由に往來交通し得べく只に自國のみを以て生活區域となさず進んでは大山を越え萬里の波濤を航し遼遠なる海外人種と交際し以て其國を富まし其の生活を高尚ならしむる人民なり。

四一 言語

言語は自己一身の思想を口にし以て相互の意思を交換する者にして是又た人類の區別系統の異なるに従ひ各々同じからず然れど之を大別すれば單綴語

(各語一音よりなりて語尾に變化なし)添加語と句の間判然たる區別なく數語を連ぬれば一大語となり以て一句の意味を顯す及び曲折語は意味を異にし同時に語尾又他の方法により曲折するものなり)の三となるべし。現今世界に使用せらるる言語の種類は實に九百種に上り尙ほ訛語の數は五千種あり然れども現に最も重用せらるる言語は僅に八十餘種なり。就中多く行はるる言語は勿論支那語なりされと支那語は數多の方言を有し彼等同國人にして尙ほ少距離を去れば忽ち言語の相通せざる状態なる故實際支那語を辯する者は夫れ四億人ありと云ふべからざるなり。次は印度語にあれど是れ亦支那語と同じく盡く印度人に依て話さるると云ふべからざるも現在は凡そ二億に及ぶといふ。今茲に世界言語別表を作らんに實に左の如し。(但しヒツクマン氏の調査に係る者なり)

印	セルマニツク語	イギリス語	ドイツ語	オランダ語
	五、六〇〇	七、七〇〇	四、八〇〇	六、三〇〇
	千位	千位	千位	千位

巴羅歐語度

ギリシヤ語	スベイン語	ロマ語	ポランド語	イタリア語	新ギリシヤ語	イタリー語
50,000	20,000	10,000	46,000	10,000	34,000	34,000
スラバ語	ロシア語	ポーランド語	ポロニア語	サルヴェドク	スラバ及びウエ	82,000
94,500	8,000	16,000	3,400	15,000	15,000	15,000
イラニシ語	ペルシヤ語	アルメニヤ語	カシミア語	アシサム語	アシサム語	30,000
26,000	1,000	5,000	1,000	1,000	1,000	1,000
インド語	ヒンドスタン語	ベンガル語	アサム語	ハンガリー語	ハンガリー語	87,000
20,000	1,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000
ウラル	トルキスタン語	モンゴリヤ語	朝鮮語	朝鮮語	朝鮮語	10,000
5,000	5,000	4,000	10,000	10,000	10,000	10,000
日韓語	日本語	朝鮮語	朝鮮語	朝鮮語	朝鮮語	10,000
49,000	8,000	8,000	8,000	8,000	8,000	8,000
東亞語	支那語	アンナン語	ビルマ語	ビルマ語	ビルマ語	10,000
38,000	7,000	24,000	6,000	6,000	6,000	6,000
マレー、ジャバ	マレー、ジャバ	ボクシヤ語	ボクシヤ語	ボクシヤ語	ボクシヤ語	10,000
25,000	25,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
リシヤ語	リシヤ語	リシヤ語	リシヤ語	リシヤ語	リシヤ語	10,000
24,000	24,000	14,000	14,000	14,000	14,000	14,000
セミチツク語	希伯來語	ガアラ語	ガアラ語	ガアラ語	ガアラ語	6,000
24,000	24,000	14,000	14,000	14,000	14,000	14,000

以上の國語言語中、今日最も廣く世界に蔓延して通する者はイギリス語なり。

殊に世界の重なる貿易市場に於ては刻語の使用多く其語を用ゆる國民はイギリス、北米合衆國、北米カナダ、オースタラリアなり其の外尙は商用語として使用せらるゝは、スペイン語、ホルトガル語なり、蓋し是等は十六七世紀にあつて、兩國が各地方に殖民地を有したる結果にして、専ら中央アフリカ中央及び南アメリカ地方に用ゐらる。又た世界列國の交際上フランス語を用ゐ、専らヨーロッパ大陸に行はれ。ドイツ語は大概學術語に用ゐらるゝ風あり。

四二 宗教

世界各人種にして、文明開化の人種は、勿論野蠻未開の民なりと雖、多少教法を信じ道德の理を辨へざるはなし、是れ乃ち宗教の起る原因なり、蓋し文化の度の高低如何により、宗教も亦深遠高尚なるあり、淺薄野卑なるありて一定せず、要するに現今世界隨所に行はるる宗教所謂教法なる者は、其類別數多之れありと雖、主なるものは、拜物教、拜星教、婆羅門教、佛教、拜火教、回々教、猶太教、基督教、儒教、神教の十種なり。尙是れ等宗教は其の性質に由りて分類すれば、無神教、一神教及び多神教の三に歸し、基督教猶太教回々教は純然なる一神教にして、儒教は無神教

拜物教
拜星教
婆羅門教
佛教
拜火教
回教
猶太教

本邦地理詳説

其他は多神教なりとす。今十種の宗教教法に關し聊か説明せん。拜物教は専ら野蠻人種の間に行はれ、最も野蠻卑劣の宗教にして、天然物人爲物なるを間はす、彼等が目にて奇異不思議と見ゆる者は、皆神とし尊信する者なり。拜星教は、エシフト・メキシコ・アツシリヤ等に行はるゝ宗教にして、専ら日月星辰の天體を尊信する者なり。婆羅門教は、インドに起りし者にして、今尙隆盛なり、蓋し婆羅門教の主義は、天地間を主宰する者は梵天王ありて、僧侶は乃ち梵太の化身なり、故に僧侶を尊拜せざれば梵天に對して不敬なる者とせり。佛教は、大乘教小乗教と分かれ釋迦牟尼の開始せし宗教にして、其の要旨主義は絶對的の善道を修め人間の苦難を脱し、極樂に到りて無窮の永樂を得べしと云ふにあり。拜火教は、ペルシヤ地方に行はれし宗教にして、宇宙を支配する神に陽神と陰神との二つありとし、陽神は善き神、陰神は惡しき神なり、火は萬物の中最も尊とすべき者なれば、之を以て陽神の徳を代表するものと信じ、以て之を崇拜せり。回教は、西紀第六世紀頃アラビヤの人モハメツトの唱導せし宗教にして、唯一の神と其の使節と自稱せる開祖を尊信せしむる者なり。猶太教は、ユダヤ國に

基督教
儒教
神教

起りユダヤ人今尙ほ尊信する者にして、其の崇拜物は唯一の上帝なり、經典は乃ち舊約全書と稱する者なり。基督教は、舊教新教希臘教とに分ると雖是れ耶穌基督の唱導せし宗教にして、猶太教より分岐したる者なり、乃ち唯一上帝の外尙ほ耶穌基督を以て救世主と稱して尊信す、經典には舊約全書の外、後世耶穌基督の高弟等の相協議して著はせる新約全書なる者なり。儒教は、或は之を宗教中に入れざる者あり、蓋し支那の孔子を祖として、専ら儒教道徳を説明する者なり。神教は、所謂純粹なる宗教に屬せざる者、我が國固有の教法なり、乃ち皇祖皇宗の諸神を祭祀し、其の他英雄豪傑賢人等苟も國家に功勞勳功ある者は、皆之を神として尊拜する者是れなり。今世界宗教と人口とを五大洲に區別すれば左の如し。(但しキース氏の調査による者なり)

種別	人口	洲				
		アジヤ	ヨーロッパ	アフリカ	アメリカ	濠洲大洋洲
舊教	二二三、五五〇	八五〇〇	一五六、〇〇〇	二二〇〇	五七、〇〇〇	八五〇
新教	一四九、九五五	一、〇〇〇	八六、〇〇〇	八二〇	五九、〇〇〇	三、二三五
希臘教	九八、〇三〇	六、〇〇〇	九二、〇〇〇	三〇〇		
アルメニヤ等	六、三〇〇	三、〇〇〇	三〇〇			

第四章 人事地理學

本邦地理詳説

總計	教宗外以教蘇耶						教	
	合計	其他宗派	猶太教	拜火教	回教	婆羅門教	神教	佛敎等
一、四九九、二六九	一、〇〇六、三〇四	八三〇	六五〇	一五、六二〇	二〇七、七五五	二〇七、四〇〇	四三〇、一七四	四九二、八六五
八三三、〇一〇	八二二、五一一	二五〇	二六〇	一五、〇〇〇	一六〇、〇〇〇	二〇七、〇〇〇	四三〇、〇〇〇	一九五、〇〇〇
三六〇、〇八〇	一一七、八〇〇	三五〇	五、五〇〇	二〇	五、七五〇	一六〇	一六〇	三〇八、三〇〇
一七〇、七八〇	一六五、七三〇	—	—	—	四〇、〇〇〇	三〇〇	—	五〇、五〇〇
一三〇、六〇〇	一四六、〇〇〇	二〇〇	三〇〇	一四、〇〇〇	—	一〇〇	—	二六、〇〇〇
五六、九九	一六、八四	—	—	—	—	—	—	四、〇一五

四三 政治

國家は人類の團體にて社會組織の一形式なり。人類相集りて一の團體なる事は謂ふを俟たず、何ぞ夫れ人民無くして國家を想像し得べけんや、されども人類の團體あればとて、直に以て一國の名を與ふる能はず、何となれば家族と人類の團體にして、町村會社組合も亦人類の團體なり、果して然らば國家と他の團體との間必然的に起る他の現象なかるべからざるなり。

第四章 人事地理學

凡そ如何なる國と雖も、苟も一國の名を冠したる以上は必ず人民領土主權の三者を具備せざるべからず、國家は社會組織の一形式にして人類の團體なれば國家の一要素として人民を要する事、茲に多言を費やさずして明かなり。されども今人民の團體あるも未だ一國を成すに足らず、是れには必ず一定の土地其領土なかるべからず、往昔蒙昧の世水草を逐ふて隨所移住せし所謂遊牧人種の如き、各民族は、各々其の統治者として首長を戴き一見國家の如き觀ありしと雖も、是れ過去に於て國家の未だ發達せざる際の一現象たるに過ぎず、未だ國家觀念ありと云ふべからず、故に國家觀念に於ては、領土を有せざる者をば之を國家と云ふを得ず、人類の團體ありて、上に首長を戴き、苟も上命下服の關係ありて直に之を國家と云ふが如きは、彼の出沒常なき海賊の如きは國家と云ふべきも是れ不合理の極點なり。然れども一定の土地に人民生息するも未だ以て國家をなす者にあらず、人民領土の外國家成立には主權なかるべからず、若し主權ありて之を統治する事なくんば、人民は只一定の土地に群息するといふに過ぎずして決して團體としては活動し能はず、所謂弱肉強食の状態に陥り、秩序立たず、節

制なき無味乾燥の國家となるべし、されば苟も多數の人民相集まりて一團體をなせば、必ず之を統治して其の團體の秩序を維持する者なかるべからず、是れ一家に家主なりて以て其の家族を統治し、各部落に各部落の長ありて其の部民を統御する所以にして、國家も亦之に倣ひ主權に依りて統御するは理の當然なり。然るに國家と他の家の團體との間に異なる所は實に此主權にあり、乃ち主權とは其の國家固有にして且つ唯一最高の權力を意味し、若し一定の土地人民ありて一の權力に依り統治せらるるとも、其の權力たるや他に高等の權力あつて之を賦與し、又は保護する時は其の權力は主權にあらず、従つて其の權力の下に統治せらるる團體は決して國家と稱すべからず。故に如此最高唯一の權力を有する主權者は、國家の秩序を維持し、民衆の安寧を保ち、福利を増進し、外敵の凌辱を禦くが爲めに令を下し、法を布き、民衆は其の主權に服従し、法を守り、令に従ひ、茲に初めて完全なる國家と名付くるを得る者なり。

國家と主權

國家は、一定の土地を其の領土として一定の人民之れに依り、最高唯一の主權を以て統一する團體なる事は、如何なる國なりと雖も毫も異なる所なく、苟も一

君主國體
貴族國體
民主國體

國の名を與へ得る者は此三要素を具備せざるはなし、然れども主權は何れの所に存在するか、又た其の主權は如何に運用せらるるやの形式に到りては、時を異にして國を異にするに依つて一様ならず、是れ即ち國により國體を異にし、政體に相異なる所以にして、其の主權の所在如何によつて國體を異にし、主權運用形式の異同によりて政體の異同を生ずるなり。

主權の國家に在る事は、國家の要素として主權を要し、主權なければ國家なく國家あれば必ず主權ある事によりて明かなり、然れども其の主權は國家の何れの部分に在るか、何者によりて總攬せらるるか、は國により各々異なる所にし、て、國體は之を大別して、君主國體、貴族國體、民主國體の三種となるなり。蓋し君主國體とは、國家の主權唯君主一人にありとする國體にして、國家統治の大權は帝若くは王と唱ふる君主唯一人之を總攬し、國民は皆被治者の地位に立ち、君主の命令に服従する國體を云ひ。貴族國體とは、國民の中優等の階級に屬する貴族の數人相共同して主權を總へ、自餘の國民は皆其の命令に服従する國體を云ひ。民主國體とは、現今の共和國の如き者にして、一人若くは少數の貴族主權を

本邦地理詳説

總攬するに非らずして、主權は國民全體に歸し、國民は國民全體としては統治者たると同時に國民各個人としては被治者の地位に居り、以て主權者として國民全體の發したる法令法則に服従し、之を遵守する國體を云ふなり。

政體

專制政體

立憲政體

政體とは、國を統治する權力即ち主權が如何に行使せらるゝかの形式を云ひ分ちて專制政體及び立憲政體との二つとす。專制政體とは、主權が専ら自己の自由意志の決する所によつて、法を布達し令を公布する者を云ひ。立憲政體とは、之に全く反し憲法と稱する國法ありて、主權者と雖も且つ一定の規矩に準據し、憲法の範圍内に於て統治權を行使し、自己の主斷によりて法令を下すが如き事決してあらざるなり。專制政體は、更らに君主專制政體と貴族專制政體とに分つを得べく、貴族專制は、近代に於ては其の例を見出す能はずと雖も、君主專制の政體は尙ほロシア帝國支那帝國等に於て之を見るべく、内外の政務は總て君主一人の專斷によりて行はるゝなり。立憲政體も亦之を細別して立憲共和政體及び立憲君主政體の二つとなすを得、フランスス、井ツツル、北アメリカ合衆國の如き諸共和國は前者に屬し國民は憲法の定むる所によりて一定の代表者

貴族專制政體

君主專制政體

立憲共和政體

立憲君主政體

立憲君主政體

立憲君主政體

の如き諸共和國は前者に屬し國民は憲法の定むる所によりて一定の代表者

共約憲法
欽定憲法

を選出し、議會を組織し、以て立法を司り、國民の選舉によりて就職したる大統領は、國家最高の役人として國務全般を統治す。立憲君主政體とは、國家統治の大權君主一人に歸し、君主は主權者として最高の權力を有すれども、其の權力の運用に關しては憲法の規定に基き、或は國民參政の權を定め、或は臣民の權利義務を明かにし、君主と雖も敢て妄りに之を變形し之れに反する事を得ず、必ず憲法の範圍内に於て統治權を運用する形式を云ふなり。尙ほ立憲政體國に於て、其の始めて憲法を制定するに當り、或は國民の代表者を集め、其の協議に基きて制定するもの、又は君主の意思に依り、臣民の福利を慮りて主權運用の形式を知らしめ、主權行使の一部に參與せしめ、君臣共に之を遵守すべき事を明かにせしものなり、前者は普通共約憲法と稱し、後者は欽定憲法と稱するなり。

四四 兵 備

一國既に成立して國家存立の基礎となりたる以上は、一國自から守衛すべき要素なかるべからず、何となれば萬里茫漠たる遠洋波濤の間に孤立し、周圍の關係なき國に於ては、敢て防禦守衛の術を講すべき必要なしと雖も、今日の如き一

兵備の必要

本邦地理詳説

兵備の種類

國は一國と相接し、相隣り、所謂國境によりて其の領域範圍を定むるに於ては、國境を守らざるべからず。尙ほ又た天倫の道に従ひ世界平和の下に國家を維持し、秩序を整理すべきは多言を要せずして明かなりと雖も。世界人種の異同且生存競争の繁盛なる現勢に於ては、時に衝突あり、内亂あり、されば之れが鎮撫討伐にあつべき機關は必然的に起るべき現象なり、即ち現今世界の各國が巨大の費を投じ以て之れが防禦の術を講じ之れが發達を促かしつゝある所以なり。

兵備の種類は、各國各々相異あり、スヰツツルの如き海に接せざる國は之を除外とし多くは海陸兩軍よりなり、陸軍は陸地を警衛し海軍は領海を防禦するの任にあたる、依りて今世界の重なる國の陸海軍兵備の大略を擧げ以て其國の真相を窺へば實に左の如し。(但し西紀千九百〇三年の調査による)

世	國名	人口	平時兵員	戰時兵員	陸軍費	人口一人に付陸軍費
支	アルゼンチン	四七九四、一四九	一八八〇〇	四八三、七四九	一八〇〇、一五八〇	三、七六
支	オーストリーハンガリー	四九、四〇五、二六七	三六一、六九三	一七三六、七六三	一三、八九〇、七三四	二、七〇
支	ベルギー	六、七九九、九九九	四八六、三七七	一七五、〇三七	二、二五〇、九二四	三、三〇
支	那	三、七五、〇〇〇	六六五、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	四、五〇〇、〇〇〇	〇、〇八

世界各國陸軍平時戰時兵員及陸軍費

國名	人口	平時兵員	戰時兵員	陸軍費	人口一人に付陸軍費
朝鮮	五、七三三、二四四	四、二〇〇	五〇、〇〇〇	五、五六一、五六一	〇、〇一
日本	三、四六四、七七〇	九、七六九	六一、五八二	五、五二七、五二六	二、二四
ドイツ	三、八九六、九四五	二〇〇三、九四七	四、九四四、七〇五	二、八六一、九二九	七、三四
イギリス	五、六三六、七七八	二、二八八、三九九	五、五六一、二九五	二、八四四、五八八	五、〇四
イタリヤ	四、九五二、五一一〇	二、九三、五五七	一、〇三四、二八一	九、五二四、二〇〇	三、一〇
フランス	二、四三三、八〇六	二、二一〇、四	二、一八、九五八	七、一四三、五三三	二、九二
オーストリー	三、三、四七五、三三三	三、〇七六、九九六	三、三三三、四四六	一一、二七五、七九二	三、四六
メキシコ	四、三、七六三、一五三	一、四一、七七〇	四、七、七七〇	三、八〇〇、三、四八八	〇、八六
日本	一、三、六〇四、九三三	二、九、二六五	二〇八、九八四	六、八五六、二九六	〇、五〇
オランダ	五、二六三、二六七	六五、九九九	一九四、三九九	一九〇〇、二、三七〇	三、六〇
オランダ	二、三三九、八八〇	三〇、九〇〇	五〇、八〇〇	七、三六六、六八〇	三、二八
オランダ	五、四二八、八〇〇	三〇、〇〇〇	一一五、〇五七	一一、八六二、二〇〇	二、三六
オランダ	一、二八、九三〇、三一九	八六〇、〇〇〇	三、四六〇、〇〇〇	三、二、四七八、二一四	二、五四
オランダ	一、八、六一八、〇八六	八七、八六七	九三、七〇六	六一、八〇二、六八六	三、三三
オランダ	五、一七六、二二八	二九七、三三三	四九七、二二三	二〇、〇九〇、六〇四	三、八八
オランダ	三、三、三、四四三	一五三、八九二	二、四、二、五五六	一一、三、五、三五〇	三、四三
オランダ	二、四、〇、二、八九〇	二、一九、四二〇	一、五〇〇、〇〇〇	三、九、五〇、九三三	一、六四
オランダ	八〇、八、四七、〇〇〇	五九、八六六	八、七、七、五〇〇	二、二、四、六、八九八	二、六〇
オランダ	一、二、九、四、九、三、三三	八七、二、七、〇〇	三、七、四、六、一、三二	二、九、五、〇、二、二、六二	八〇、九

第四章 人事地理學

世界各國軍艦人員及海軍費用

國名	艦數	乘組人員	海軍費用	國名	艦數	乘組人員	海軍費用
アルゼンチン	五二	九、一五〇	一、一〇三、三三四	オーストリア	一四八	一四、六三四	一五、二六、七五六
支那	一八	二、〇一〇	六、七五〇、〇〇〇	ハンガリー	六六	一、八五〇	一三、七五、三二八
フランス	五五三	四五、三三六	一、三、七、九、四、九、四	デンマーク	三三	三、七〇〇	四、三、四、五、七、七〇
イギリス	六九〇	一〇三、八四二	三、〇〇〇、〇〇〇	ドイツ	四五	三、七八二	二、九四三、四〇六
イタリア	三四六	二五、四一一	五〇、八六六、三六六	ギリシャ	一四四	二八、一五六	二〇、一六、一〇一〇
オランダ	二二九	七、七六四	一三、三、五〇、七、二、八	日本	四九	二、六三八	三、三〇、六八〇
ホルトガル	四二	一、九〇〇	八、三、七、五、八、一〇	ノルウェー	三六	六、二、七、一、五	九、九、五、九、三、七、六、八
スペイン	六二	七、三〇四	一、四、三、七、六、八、一〇	ロシア	三九	三、九七一	六、四〇、七、五、九、四
トルコ	一〇二	二〇、六七九	四、八〇、六、六、三、八	スウェーデン	六八	三、九七一	六、四〇、七、五、九、四
總計	三、六二七	四三二、九九三	九三六、一五五、四一六	合衆國	二七六	二五、二五八	一五、七、七、二、七、二、六

四五 生業

一國の隆盛國家の富強は、生業の發達如何による者なり、蓋し生業とは、人間生活の必需用に應ずべき産物を創成する者にして、其の貨物の生産に必要な條件は、之を天然力と人力とに區別するを得べきなり。

生業の沿革

古代の如く世未だ開けず、百般の業總て朦味幼稚なる時は、天與の物産と土地との關係は至大なる者にして、一國の生産は舉つて天然力により以て其の事業

業務の區別

に従事するもの、是れ農業が夙に早き世に開け、國の大本なりと唱導せらるゝ所となり。然れども人智日々に發達し、社會月に進歩し、萬般の業複雑となる今日に於て、只に天然力のみに通重し、以て人力の産物を輕んずるは、眞に殖産興業の道を講じたりと云ふべからず、故に一國にして殖産興業を起し、一國の隆盛を望まば、其の要素の發達と調和は最も留意せざるべからざるなり。而して其の要素なるものは、又た社會の進歩に伴ひて種々多様面に分かれ、一は二に二は三となり、以て其の分業の間に各自生業を發達せしむる者、かくて各國各國民は自己の長所によりて物品を製作し、以て相互間に其の物品の交換を行ふ力を有す、蓋し其の交換を行ふ力は交通機關の發達に依頼する者なり、故に交通機關の完備せると否とは、生業の發達に影響し延びて業務の分擔に關係するものと云ふべし。されど今日にありては交通機關既に充分發達して、自由自在に世界を濶歩するに到りしかば、業務は益々細分せられ、尙ほ將來に於て稍々多からんとす、されば此複雑なる職業を一々分類し得る事は、至難なる事なりと雖、今日吾人の生活上直接に影響する業務に付き、之を區別すれば、獵業、漁業、鑛業、農業、林業、牧畜業

第四章 人事地理學

國名	年次	鐵道線路		電線	
		年次	年次	年次	年次
アルゼンチン	一九〇一	一九〇一	一九〇一	一九〇一	一九〇一
オースタリ	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二
ベルギー	一九〇一	一九〇一	一九〇一	一九〇一	一九〇一
支那	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二
デンマール	一九〇〇	一九〇〇	一九〇〇	一九〇〇	一九〇〇
フランス	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二
アルジェー及びトニス	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二
印度支那	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二

次に世界各國の鐵道及び電信線路を擧ぐれば左の如し。

國名	輸出入	輸出	國名	輸出入	輸出
デンマーク	三三三、七四、〇〇〇	二八〇、二七、〇〇〇	フランス	一八二、四、五、〇〇〇	一七九、〇、六〇、〇〇〇
ドイツ	三、一六〇、五七、〇〇〇	二、五九、五、二、三、九、五〇〇	ギリシャ	五、四、六、一、〇〇〇	三、二、七、六、七、〇〇〇
イタリア	八〇、七、五七、〇〇〇	六〇、九、六八、五、〇〇〇	オランダ	一、八、九、八、三、〇〇〇	一、六、二、五、八、三、〇〇〇
ホルトガル	一、四、一、三、一、〇〇〇	六八、八、五七、〇〇〇	ロシア	六、二、七、七、〇、〇〇〇	九、〇、八、五、〇、〇〇〇
スペイン	三、三、四、二、六、八、〇〇〇	三、二、四、二、五、二、〇〇〇	スウェーデン	二、七、八、九、八、〇〇〇	二、一、七、九、四、八、〇〇〇
ノルウェー	一、六、二、六、七、〇、〇〇〇	一、〇、七、三、七、〇、〇〇〇	スウェイツル	五、〇、〇、八、三、七、〇〇〇	三、六、六、四、三、〇〇〇
トルコ	二、二、〇、四、七、〇、〇〇〇	一、四、〇、三、三、〇、〇〇〇	イギリス	五、五、一、三、六、二、二、四、〇	三、〇、〇、八、一、七、九、〇〇〇
合衆國	二、〇、〇、六、一、四、六、九、〇〇〇	二、九、八、五、一、五、六、〇〇〇	支那	四、三、一、三、〇、〇〇〇	二、八、二、九、五、〇、〇〇〇
日本	三、二、七、八、六、八、二、〇〇	三、〇、〇、五、七、六、五、三、三			

本邦地理詳説

製造業、工業、商業及び運輸業にして實に此等は國家富強の源資となり、國民の富力を増進するものなりとす。今世界の人々が職業就中農工商學に従事する一般の比較を擧げ以て其の立國の基礎を窺ふべし。(但し千九百〇三年の調査により統計數は百分比例なりとす)

國名	農業	工業	商業	國名	農業	工業	商業
ドイツ	三七、五	三七、五	一〇、六	オーストリー	三八、〇	三七、〇	一一、〇
ハンガリー	六四、〇	二、〇	六、〇	イタリ	五七、〇	二八、〇	四、〇
スウェイツル	三七、〇	四、〇	一、〇	フランス	四四、〇	三四、〇	九、〇
英克倫、威耳斯	一〇、〇	五七、〇	一一、〇	スコットランド	一四、〇	五八、〇	一〇、〇
アイルランド	四四、〇	三、〇	五、〇	イギリス	一五、〇	五四、〇	一〇、〇
合衆國	三六、〇	二四、〇	一六、〇				

要するに、農業はハンガリー國、工業はイギリス、商業にてはアメリカ各々其第一位を占む。次に世界各國の貿易輸入及び輸出を擧ぐれば左の如し。(但し千九百三年調査)

國名	輸出入	輸出	國名	輸出入	輸出
オーストリー	七八二、〇八三、〇〇〇	八八七、四一七、〇〇〇	ベルギー	一、〇、六、二、五、六、〇〇〇	八、四、四、一、二、〇〇〇
ハンガリー					

本章重要事項

第一 アシヤ系統人民は、一般皮膚黄色にして頭丸く、顔平たく、頬骨出で、毛髮正直にして黒色なり、髭鬚概して多からざる者とす。ヨーロッパ系統人民は、皮膚白色にして顔は細長く、額廣く、鼻高し、毛髮は褐色を帯び縮れるを嚚とし、髭鬚甚だ多し。南方アフリカ系統人民は、皮膚黒く、額扁平にして傾斜す、鼻低く、唇厚し、髪は黒色にして多くは縮み、髭鬚最も少し。アメリカ系統人民は、皮膚銅色にして額低く、且つ狭く、顔面廣く、頬骨高し、毛髮は黒色にして正直

總計	スウェーデン	スウェーデン	スウェーデン	トルコ	エジプト	其他	合衆國	ハリスツピン諸島	其他	其他
四九〇,二二九	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	二〇一,八三九	一九〇〇	一九〇〇	一九〇〇
	八,三六九	七,三三三	七,三三三	二,五〇六	二,八三三	二,九〇九	二〇一,八三九	一九〇二	一九〇二	一九〇二
	一九〇〇	一九〇〇	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	二二九,九三九	一九〇二	一九〇二	一九〇二
	二〇,三〇八	九,五二二	四,一三三	二,四八三	二,三七八	二,三七八	二二九,九三九	一九〇二	一九〇二	一九〇二
一,一〇〇,二六五	一九〇〇	一九〇〇	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	二二九,九三九	一九〇二	一九〇二	一九〇二
三,九五八,五五〇	四三,四八六	三〇,四七二	一三,八〇三	三八,六六一	九,七四五	一,五六,九九八	二二九,九三九	一九〇二	一九〇二	一九〇二

ドイッチ	イギリス	英領印度	カナダ	新西蘭	南オーストリア	クイーンズランド	グイクトリア	其他	ギリシャ	ハンガリー	イタリア	日本	メキシコ	オランダ	殖民地	ノルウェー	ロシア	フィンランド	シベリア	ホルトガール	
一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	
三三,二一三	二二,〇七八	二五,五二九	一八,一四〇	二,三三三	一,九〇一	一,九〇三	三,三〇二	六,四七	二,三六〇	九,九二〇	五,一〇二	一〇,四一七	一,七六四	一,四七七	一,二八五	三〇,三三五	一,八八八	四,九二七	一,四七二	一九〇〇	
一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二
九七,八九五	四六,〇九八	五五,〇五五	三五,九〇二	七,四六九	一〇,二四六	六,四六七	五,三三七	一,四三六	二,八二二	一,七三〇	四,三六七	三,九〇二	一,三六〇	七,一〇四	一〇,三三三	二,七〇〇	四,三三〇	五,二一五	一九〇〇	一九〇〇	
一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二	一九〇二
三六,二六二	三四,六一五	一八,〇八八	八二,三五五	二二,七〇五	一七,八五三	二〇,五三七	一三,四八〇	六,三三九	七,七二二	一〇,四九三	七,〇二〇	九〇,三五四	一四,七六八	二七,二一〇	一四,二七九	三〇,九七六	五,九〇〇	八,六六〇	一一,五三三	一九〇二	一九〇二

本邦地理詳説

髯鬚多からず。海岸島嶼人民は、皮膚褐色頭狭く顔廣くして額低く、毛髮縮れ黒色を帯ぶるものなり。

第二 現今世界各地方を見るに、所謂野蠻人種なる者は多く熱帯地方寒帯地方に住居し、其中間なる温帯の高燥の土地味瘠せたる場所に未開の人種住居し、自剝の低地肥沃の土に半開化の人種住居す。何故に野蠻人種が斯く極端の帯地區域内に住居するや、否やは疑問なれど、要するに彼等の活動努力を消費するなき天與の物體あること、及び天惠の薄遇が彼等をして衣食住の外、又た更らに勢力を注ぐべき餘力を遺す能はざるに因る者なりとす。

第三 野蠻人種未開半開人種等は、永遠無窮此の状態を維持する者にあらず、彼等の間には漸次進歩發達して其の跡を絶ちつゝあり、是れ文明開化の人種人民が其の區域内に移住して、之を訓育し教化し、以て彼等の風習慣例の進歩改革を見るに於て明かなり。故に字内の状態にして、永久に之を維持する者とせば、所謂野蠻人種未開人種なる者は漸次退化し以て絶無となるべきは理の當然なりとす。

第四 人類人種の區別ある以上は、言語の相異差異あるは理の當然なり、然れども現今の如く其種類の多きに到りては、交通上甚だ不便なる者なり、故にフランス語が交通場裡に立ちて通用語たるが如く、世界通じて使用せらるべき言語を確定統一するは、目下の急務ならん乎、是れ言語學者が極力注意すべき要項

なりと云ふべきなり。

第五 宗教所謂三大教にして、佛教小乗教は、専らアジアの東南、シヤム・ビルマ・アンナン・セイロン等に行はれ、大乘教は、アジアの東北、支那、朝鮮及び我が國に行はれ。回々教は、アジアの中部及西部のアラビヤ・ペルシヤ・トルコ・アフリカの北部一部分ヨロッパの東部等に行はれ。耶蘇教の希臘教は、ヨロッパの東部スラヴ民族に、舊教は、ヨロッパの南部ラテン民族に、新教は、ヨロッパの西北及び北米の北部ニュートン民族間に行はるゝ者の如し。

第六 君主政治國にして、帝の支配する國を帝國と云ひ、王の支配する國を王國と云ひ、民主政治の國は之を民主國又たは共和國と云ふなり。

第七 世界各國の兵備機關は、夫々陸海軍に分かれて完備せる者の如し、されど其の國の位置國勢により各特徴あるが如く、英國は海國なれば海軍力強く世界第一と稱せられ、ドイツ國は從來陸軍の擴張訓練に注意したる爲め陸軍は大に整頓せる者の如し、然れども其國の強弱は宜しく實戦にあり闘争して勝敗を決せざるべからず、彼の世界の陸軍國常勝國と驕りしロシア國が、明治三十七八年に於て我が國の爲め破られたり、海軍の如きは殆んど全滅したるが如し、故に單に其の機關の優劣を以て、直ちに國の強弱を判定するは空中樓閣と云ふべきなり。

第八 現今社會の複雑に伴ひ、生業も亦種々雑多に分かる、然れども此等の業は元

第四章 人事地理學

本邦地理詳説

と是れ一時的に起りたるにあらず、夫れ一歴史と沿革發達の順序あり、蓋し其の發達の諸階級の特徴は、生産の方法と器具の發達によりて區別せらるゝなり、乃ち最古の時代は、狩獵漁獵に従ひ、天與の産物をば不完全なる用具を以て捕獲し、次いで人智稍々發達し、用器整ふと共に、遂に土地を耕やし以て食品産物を獲んとする、所謂農業時代に移り、是より各自收得の物品を彼の地此地に運搬輸送すべき業務乃ち商業時代に到り、かくして一方に交換物の資料を作ると共に、他の方面には之を商賣し、同時に交通機關を完備せん爲め交通事業に従事し、以て其の便宜を計り、次いで、收得の原資料に人工を加へて種々の製作品を作るべき、所謂工業時代生ず、於是乎、農業開け工業發達し商業益々盛大となる者なり。

第二編 大日本帝國總説

第一章 大日本帝國自然地理學

四六 位置

東半球にして、舊世界の極東、太平洋の西北隅に位し、全部北半球内にありて、大小無數の島嶼になり、南西より北東に向つて、或は赤鯨の泳ぐが如く、雲龍の飛ぶが如く、蝙蝠の翼張るが如く、猿猴の立つて舞ふが如く、土龍の起つて躍るが如きもの、相連鎖して、長く斜に横はる國は、是れ我帝國にして、旭日東に出づるに因み、國號を日本ニッポンと稱し、又た氣候温和、五穀豐熟する地なれば、豊葦原瑞穂國と云ひ、尙大八洲國扶桑國敷島蜻蜒國の如き尊とき芳名を有せり。

更らに又た近來我國を稱して、東洋の花彩、列島東亞の防波堤、或は東洋の英國と云ふ、蓋し此等の間には、隱然許すべからざる意義趣味ある者にして、乃ち花彩列島は、我國の位置宜しく、氣候温和にして、四時循環適宜を得、山海川野の美秀雅

位置

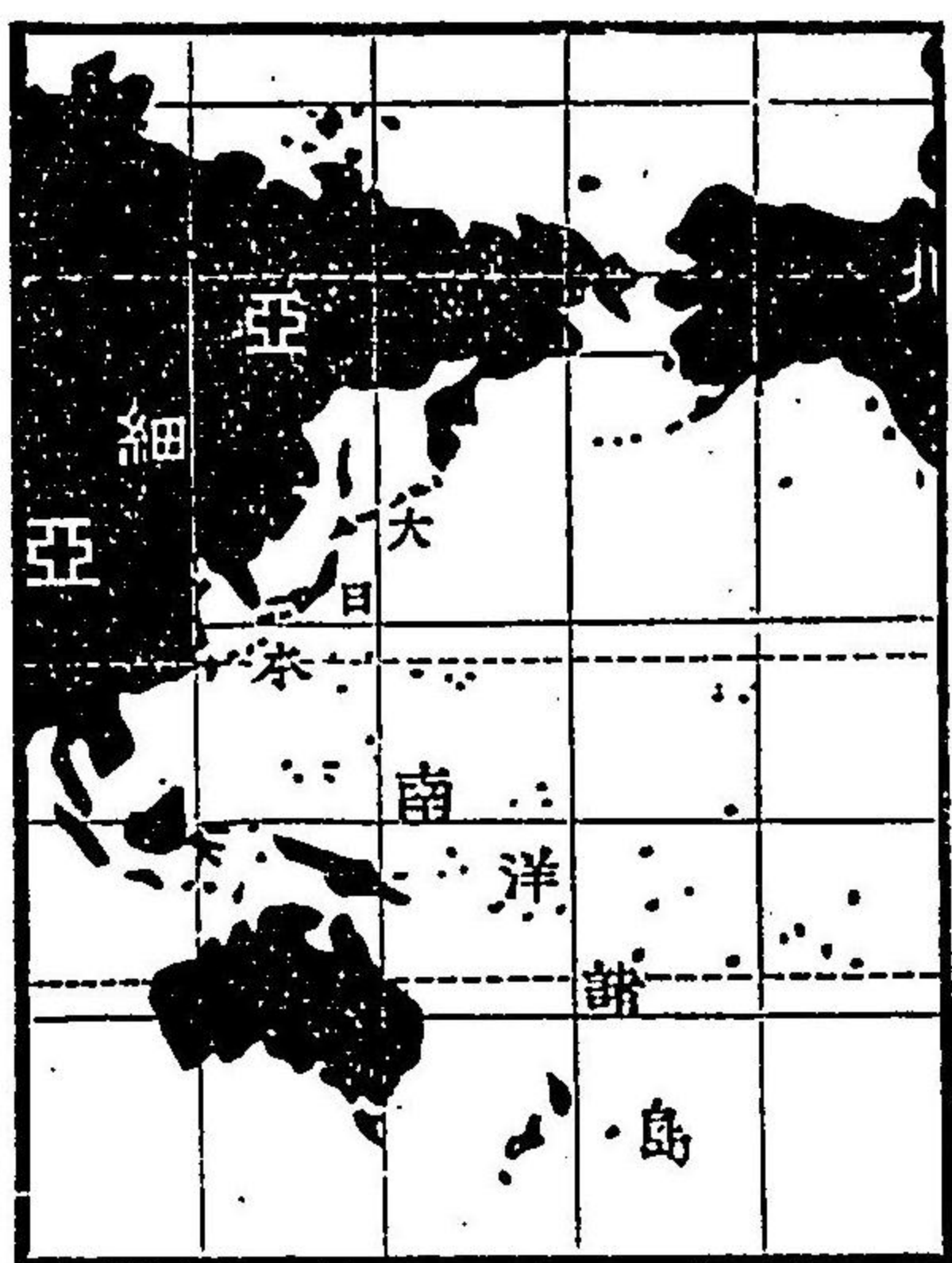
第一章

大日本帝國自然地理學

本邦地理詳説

致なるは、以て東洋一の仙境國たるを示し、防波堤は、恰然太平洋の一隅に萬里の長城を築きたるが如く、以て東洋の覇權を掌握し、東亞の責任を受け、徐ろに他來の侵襲を防喝するが如き感慨あり、尙東洋の英國と稱せらるゝ所以は、其位置地

本邦の位置



形の只に類似するのみならず、將た文明の度、人種の性質に於て、一致する所あるべく、殊に同盟國として、東亞西歐に隔離し、宇内強國の間に立ち、世界の平和を維持せんと欲す、其意味の深遠にして、犯すべからざる趣向あるは、今更茲に多言を要す限りにあらざるなり。

帝國の極點

四七 帝國の極點

我が國は、アジアの東部北半球の内に横はり、極南少しく熱帯に入ると雖も、極北は、寒帯を距たること、凡そ十六度餘なれば、主として温帯中に位し、永晝永夜の

患なく、極暑極寒の不運に遇はず、四季温和なる天然の美國なりとす、今我國全部及び其の主要部たる五大島の緯度經度の極點を擧ぐれば、左の如し。

全國島

- 極西、澎湖島花嶼西端。 東經一百十九度二十分。
- 極東、千島列島の内占守島の東端。 東經一百五十六度三十二分。
- 極南、臺灣島南岬南端。 北緯二十一度四十八分。
- 極北、千島列島の内阿頼島北端。 北緯五十度五十六分。

本州島

- 極西、神田崎。 東經一百三十度五十二分。
- 極東、閉伊崎。 同 一百四十二度四分。
- 極北、大間岬。 北緯四十二度三十一分。
- 極南、潮岬。 同 三十三度二十六分。

北州島

- 極西、オハナ岬。 東經一百三十九度四十六分。
- 極東、納沙布岬。 同 一百四十五度四十八分。
- 極北、宗谷岬。 北緯四十五度三十一分。
- 極南、白神岬。 同 四十一度二十四分。

第一章

大日本帝國自然地理學

本邦地理詳説

四國島

- 極西、佐田岬。
- 極東、蒲生田岬。
- 極北、觀音岬。
- 極南、蹉跎岬。

東經一百三十二度一分。
 同 一百三十四度四十分。
 北緯三十四度二十四分。
 同 三十二度四十二分。

九州島

- 極西、下神岬。
- 極東、鶴望岬。
- 極北、城山。
- 極南、左多岬。

東經一百二十九度三十四分。
 同 一百三十二度五分。
 北緯三十三度五十八分。
 同 三十一度。

臺灣島

- 極西、國聖港。
- 極東、三貂角。
- 極北、富貴岬。
- 極南、南岬。

東經一百二十度三分。
 同 一百二十二度四分。
 北緯二十五度十六分。
 同 二十一度四十八分。

四八 四隣

我が國は、四面環海にして、東は渺茫たる北太平洋を距て、遙かに北アメリカ

四隣

廣袤

に臨み、北は千島海峡オホーツク海を経て、アジア露西亞に相對し、西南は日本海、朝鮮海峡、黃海及び臺灣海峡を狭みて、シベリア朝鮮支那に隣り、南はパシ―海峽を距て、北米合衆國領フィリピン群島に境せり、如此く、我國は陸續せず、環らすに海水を以てす、されば我が國は國防上甚だ利益あると共に、海軍の優勢且つ其の強大ならん事、是れ肝要なる者と云ふべきなり。

四九 廣袤

我が國は、北緯二十一度四十八分より、五十度五十六分、東經百十九度二十分より、一百六十六度三十二分の間に長く狭く横はり、其全長南西凡そ八百六十餘里に涉り、東西凡そ三十乃至八十里となり、其狹長なること、實に世界第一なりとす。尙ほ更に之を五大島の各部に就きて云へば、

●本州島●の南北全長凡そ四百十里餘にして、東西凡そ三十乃至六十里あり。●北州島●は幅員各々九十里に涉り、●四國島●の南北は、凡そ三十五里餘、東西凡そ六十七里餘となり、●九州島●は、南北凡そ八十三里餘、東西凡そ五十二里餘に涉り、●臺灣島●は、南北一百二十里、東西凡そ三十里となれり。

第一章 大日本帝國自然地理學

面積

本邦地理詳説

五〇、面積

我が國は面積小なるにあらず、之を世界強大國に比すれば、其の本國のみに就きては、遙かに大なるあり、即ちイギリス、ベルギー、オランダ、イタリアの如きは、我より小にして、更らにドイツ、フランスは、稍々大なりと雖も、僅かに二割餘に過ぎず、されば舊來我を以て小となし、彼を大國と稱せし所以の者は、蓋し其の屬國領地を合算したる結果にして、只北米合衆國、ロシア、支那國等の如きは、是れ眞に世界の大國といふべきなり、今各強大國の面積を擧ぐれば、左の如し。

國名	本國の面積
合衆國	三、五六六、一〇四方哩
ロシア	二、〇九五、六一六
支那	一、五三二、四二〇
ドイツ	二〇八、八三〇
フランス	二〇七、〇五四
日本	一四七、六五五

各州島面積

イギリス	一一〇、九七九
イタリア	一一〇、五六九
オランダ	一一、六四八
ベルギー	一一、三七三

附加 六方哩は、我が一方里なり、日本の面積は、臺灣、屬島を除けり、蓋し之を加算すれば、一六一、一九八方哩となる割合なり。

我が國の面積は、十六萬一千百九十八方哩、乃ち二萬七千一百方里なり。就中本州尤も大にして、全面積の半を占め、北州之れに次ぎて、本州の三分の一たり、九州臺灣は殆んど同大本州の半に當り、四國尤も小にして、九州の半に相當せり、今我が國の主幹部乃至大屬國の面積を擧ぐれば、左の如し。

各州島	本地	屬地	合計
本州	一、四四九、二二二	七八、九一	一、四五七、一三二
北州	五〇五六、七八	二七、〇九	五〇八三、八七
四國	一一五一、二四	二九、四三	一一八〇、六七

本邦地理詳説

九州島	二二二、一八六	三〇五、六八	二六二七、五四
臺灣島	二二五三、二四	—	二二五三、二四
千島列島	一〇一一、四九	—	一〇一一、四九
佐渡島	五六、三三	—	五六、三三
隱岐島	二一、八八	〇、〇一	二一、八九
淡路島	三六、五五	〇、一四	三六、六九
壹岐島	八、五五	〇、〇八	八、六三
對馬島	四三、九五	〇、七七	四四、七二
琉球島	一五六、九一	—	一五六、九一
小笠原群島	四、五〇	—	四、五〇
澎湖島	八、〇七	六、二六	一四、三三
總計	二、六六三、五六	—	二、七〇六、九三

尙ほ我が國は、普通行政區劃とし、一道三府四十三縣臺灣總督府とに分かれ、其等の面積一道總督府を除きては、巖手縣尤も大にして、香川縣最小なり、今各府縣

各府縣の面積

及一道一總督府の面積を擧ぐれば左の如し。

東京	一三八、一三	大阪	一一〇、一九	京都	二九二、八五
神奈川	一五〇、四〇	兵庫	五三五、七六	長崎	二五三、七八
新潟	八二七、九六	奈良	二五八、三五	埼玉	二四九、一一
和歌山	二九二、四六	千葉	三三八、四九	茨城	三九五、三二
岡山	四四五、〇七	栃木	四二六、二五	廣島	五四五、六四
群馬	三九四、六五	山口	三九〇、四八	長野	八七八、七五
島根	四三七、四四	山梨	二九七、三三	鳥取	二二八、八五
静岡	四九五、二八	徳島	二六九、〇五	愛知	三一九、一五
香川	一一〇、八〇	三重	三五二、二八	愛媛	三六一、三九
岐阜	七〇六、〇一	高知	四八四、九七	滋賀	二二六、六〇
福井	二五七、〇二	佐賀	一五七、一七	石川	二七二、四七
福岡	三三四、二七	富山	二五九、一六	熊本	四八四、三一
大分	四一七、六四	福島	八九五、二五	宮崎	五〇五、四〇

第二章 大日本帝國自然地理學

本邦地理詳説

宮城	四八三。八五	鹿児島	五九一。五一	山形	五九七。三五
沖繩	一四三。九八	秋田	七三五。三九	巖手	一、〇三九。四三
青森	六三六。一八	北海道	五、九八七。〇三	臺灣	二、二六〇。四二
澎湖島	八。二一				
總計	二七、一六七方里四四				

附加。前計表と後計表との間、其の差凡一〇五方里五一ありて、前者は自然的一區劃の面積にして、後者は、普通行政區劃の面積なり、蓋し其の差の生ぜし所以は、實測方法の如何によるものにして、後者は、専ら陸軍省の實測になれども、其の足らざる部分は、地方廳の計算に基きたり、故に其の間多少の相違を來たし、終に此結果を現出したるものと知るべし。

五一 島嶼

我が國は、殆んど四千の大小島嶼より成り、其の内陸島、火山島、遺蹟及び珊瑚島の性質を供ふるもの少なからず、今五大島、其他屬島にして、稍々著るしきものを

擧ぐれば左の如し。

本州島(一九五三)

太	伊豆南部諸島	神子元島、大島(二〇)、利島、新島(六)、式根島
平	小笠原群島	神津島(五)、三宅島(七)、御倉島(七)、八丈島(一〇)、青島、父島(一五)、母島(一四)、兄島、弟島、姉島、妹島、姪島、聳島、向島、平島
洋	硫黄諸島	硫黄島、北硫黄島、南硫黄島
瀬	志摩諸島	答志島(六)、菅島、大島(四)(組伊)
戸	淡路島(三九)、家島(四)、向島(六)、因の島(一〇)、生口島(六)	
内	大崎上島(二三)、大崎下島(五)、倉梯島(二五)、江田島、能美島(一五)、殿島(三)、平群島(七)	
日	本	彦島(六)、青海島(九)、見島(四)、隱岐諸島、一島前知夫里島、中の島(一六)、西の島(二〇)、二島渡(三〇)

本邦地理詳説

海(能登島一五、佐渡島五三、西米生島、

北州島五八三)

小島、大島(四)、奥尻島(一四)、焼尻島、利尻島(九)、禮文島(一二)

千島列島(六一三)

阿頼島(二〇)、占守島(四五)、パラムシル(二七〇)、オンチコタン島(五

〇)、シヤコタン島(三五)、新知島(六〇)、ウルツブ島(九二)、擇捉島(二八

〇)、色丹島(四五)、國渡島(一六〇)

四國島

小豆島(三〇)、鹽飽諸島、大島(二)、伯方島(一〇)、大三島(一五)

興居島(六)、鬼那島(七)、日振島(五)、大毛山(五)

九州島(八六一)

櫻島(一〇)、種ヶ島(三七)、屋久島(一六)、川邊諸島、甌列島(上甌島一七

中甌島下甌島(二〇)、天草諸島(大矢野島一五、上島三七、下島七〇)長島

(二二)、五島列島(中通り島六二)奈留島(一七)福江島(六〇)

彼杵諸島、平戸島(四三)、壹岐島(三五)、對馬島(一八五)、
トカラ群島、奄矣群島(大島五九)經ヶ島(二〇)
沖繩諸島(沖繩島七四)久米島、先島列島(宮古列島八重山列島)
臺灣島(三〇〇)

火燒島、紅頭嶼、澎湖群島(湖澎本島漁翁島白沙島)

五二 半島

我が國は數多の島嶼相集まりたるものなれば、元より諸大陸に於けるが如く、
巨大なる半島を見出し、能はざるは、敢て怪しむに足らずと雖も、其の間尙ほ幾多
の小半島、各方面に突出し、多くは土地隆起し、又は土砂堆積の結果出來せし者な
り、今其の主なる者を擧ぐれば左の如し。

本州島。

- 北部半島、 牡鹿半島、 房總半島、 三崎半島、 伊豆半島、
- 渥美半島、 知多半島、 志摩半島、 兒島半島、 彌山半島、
- 能登半島、 男鹿半島、 津輕半島、

本邦地理詳説

北州島。

知床半島、花咲半島、渡島半島。

四國島。

高繩半島。

九州島。

國東半島、大隅半島、南薩半島、宇土半島、島原半島。

彼杵半島。

臺灣島。

恒春半島。

五三 地角

我が國は、半島の尠少なるに反し、地角の數甚だ多く、今其の主なるものを擧ぐれば左の如し。

本州島。

大間岬、尻屋岬、犬吠岬、野島崎、觀音岬、石廊岬。

御前岬、伊良湖岬、師崎、潮岬、日の岬、珠洲崎。

入道崎、龍飛崎。

北州島。

惠山岬、襟裳岬、納沙布岬、知床岬、宗谷岬、野斜布岬。

神威崎。

四國島。

蒲生田岬、室戸岬、蹉跎崎、佐田崎、觀音岬。

九州島。

佐多岬、開聞崎、野間岬、野母崎、鐘崎、地藏崎。

鶴見岬。

臺灣島。

富基岬、三貂角、南岬、南西岬。

五四 地峽

我が國は、大小數多の島嶼より成立し、爲めに所謂地峽と稱するもの甚だ稀れ

第一章 大日本帝國自然地理學

地峽

に、只九州島に於ける彼、杵半島の諫早地峽のみ、されど尙ほ琵琶湖を中心とし、若狭灣、伊勢灣の間是れ一種の地峽と見做すを得べく、されば將來大に注目し、將た計畫すべき地點にして、日本文明の中樞は、此の開鑿後、此所に集中すと云ふも敢て過言にあらざるべし。

五五 領海

從來國際公法によれば、最低潮の海岸より三海裡を以て、其の國の領海となせり、依て我が國も亦通常三海裡を以て、我が領海となす、是れ蓋し西紀一千八百七十二年、普佛戦争の際、局外中立國の宣言に測るものなり、されば四面環海にして、數千の島嶼より成立する我が國の如きは、交通出入をなす毎に、必ず海によるものなれば、従つて其の領海廣く、世界上如此き類を多く見出す能はざるなり。

五六 海流

我が國の海流には、南北二つあり、第一は、暖流にして、日本海流と總稱し、南フ井リツピン群島近海に起り、臺灣の東岸に沿ひ、北流琉球諸島を通過して、九州の南部に到り、茲に本支二流となり、一つは北方對馬海峽より日本海に入り、我が國西

領海

日本海流

對馬海流

黒瀬川

樺太海流

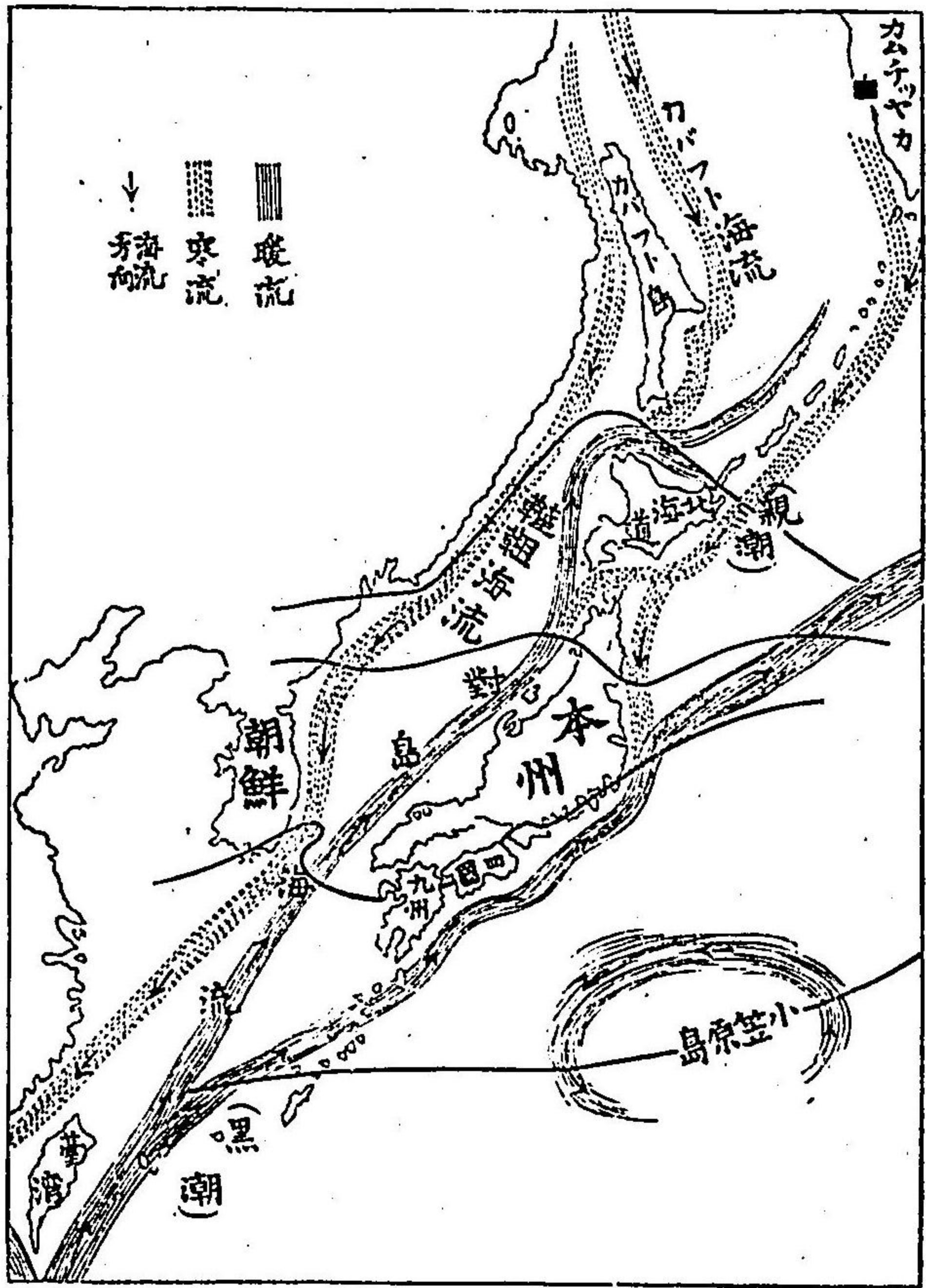
韃靼海流

千島海流

北岸を洗ひつゝ、東北に進み、再び分れて、津輕海峽、宗谷海峽に入りて、後終に消滅せり。之を對馬海流と稱す。而して他の一つは、九州の南方土佐海洋を通り、紀伊の南端潮岬に衝突し、夫より北東に向ひ、九十九里濱鹿島洋に到りて、東方アメリカに流れり、其色藍黒なるを以て、黒潮、又た黒瀬川と稱し、其温度は周圍の海水より四乃至五度高く、又其の速力諸所に於て異なると雖も、紀伊の附近にありては、一日凡百裡となり、沖繩諸島以西は、二十乃至三十裡なりといふ。

第二は、寒流にして、ベーリング海、オホーツク海より來り、分れて三つとなる。其の一は、露領カムチャツカ半島近海に起り、千島列島の間を縫ひつゝ、北州島の南海岸、本州島の東海岸を流れ、鹿島洋に到り、黒潮と衝突して、海底に沈む、之を親潮海流と稱し、二は、樺太島の東海岸を流れ、北州北見の海岸に沿ひ、根室海峽を出でて、終に親潮に合流す、之を樺太海流と稱し、三は、韃靼海峽を経て、シベリアの海岸に沿ひて、對馬海峽を通過し、支那東海に到りて消滅す、之を韃靼海流と稱せり、親潮海流は一名千島海流と云ひ、千島列島近邊に於て、五度内外の温度を有し、速度は一日五乃至十五裡なり。

本邦近海の海流圖



北州島の東
南岸、本州島の
東北沿岸、屢々
海霧濃厚にし
て航海上少な
からざる妨害
を蒙ることあ
り、是れ蓋し親
潮寒流と、黒潮
暖流との衝突
温度の激變に
基因するもの

にして俗に之を瓦斯と稱せり。
五七 港 灣

我が國は、太平洋の西北隅に位し、隆起せる一大聯島嶼なれば、其の周圍にある港灣の數少なからず。大抵太平洋中に屬せり、然れども我が國に於て所謂良港といふべきものなきは、甚だ遺憾なりとす。今其の主なるものを擧ぐれば左の如し。

北海。(オコツク海)
太平洋。

- 根室灣、厚岸灣、膽振灣、函館港、陸奥灣野邊地灣
- 宮古灣、釜石港、牡鹿灣、松島灣、東京灣品川海横須賀港
- 館山灣、浦賀灣、相模灣、下田港、駿河灣、清水港
- 鳥羽灣、伊勢灣美濃灣、大坂灣、神戸港、土佐灣
- 須崎港、臼杵港、津久見港、佐伯港、細島港、内浦灣
- 蘇澳港、花蓮港
- 西海(支那東海)。

鹿須島灣、大浦港、八代灣、天草灣、島原灣
第一章 大日本帝國自然地理學

有明灣(筑紫海)、長崎港、佐世保港、大村灣(鯛の浦)、
伊萬里灣、基隆灣、
南海(支那南海)、
南灣

臺灣海峽。

打狗港、安平港、國聖港、鹿港、淡水港、

日本海。

唐津灣、博多灣(福岡灣)、若松港、美保灣、若狹灣舞鶴港
宮津港、敦賀港、七尾灣、富山灣、壽都灣、小樽灣、
瀬戸内海。

播磨洋、兒島灣、水島洋(備後洋)、廣島灣、吳港、宇品港、
伊豫海、別府灣、周防海、

五八 海峽

我が國の如き島嶼國は、自から數多の海峽を見るべく、されば専ら此海峽によ

りて、我が國防上尤も肝要の海關となし、所々に要塞の設けあり、今我が國の著し
き海峽を擧ぐれば左の如し。

宗谷海峽、千島海峽、擇捉海峽、根室海峽、津輕海峽、
鳴門海峽、由良海峽、明石海峽、佐田海峽、下關海峽、
大隅海峽、平戸海峽、壹岐海峽、對馬海峽、朝鮮海峽、
臺灣海峽、澎湖海峽、

五九 海岸線

我が國は、四圍海水に包まるゝを以て、海岸線の延長従つて多く、實に七千四百
三十二里餘に達し、面積三方里に對し、海岸線一里の割合となるは世界其地を
見ず、彼のギリシヤ國は、海岸線長きを以て、西洋文明の先驅國となり、ノルヴエー
國は、海岸港灣に富むを以て、世界第一の漁業國と稱し、イギリスは、海岸の出入多
き結果、世界唯一の海運國、商業國と稱せられぬ、されど其海岸線と面積の比較は、
五乃至七方里に對し、海岸線一里となれり、されば我が國が東洋文明國と稱し、霸
權を掌握して、東洋の舞臺に濶歩し、國運の進張幾月に達して、名聲を宇内に轟か

本州島海岸

す所以は、蓋し地理上此豊富なる海岸線の賜物なりといふべき乎、尙ほ各五大島に就き、細視細見して聊か研究する所あるべし。

- (イ) 本州島の海岸は、全長凡そ二千四百七十五里餘にして、太平洋に面する部分と、日本海に對する側に於て大に差あり、尙ほ東北地方と西南地方にありて、海岸其の趣を異にし、殊に東京灣より、西方瀬戸内海の西端に到る間は、小灣大灣犬牙交錯して良港多く、錨地に適し、我が國屈指の港灣は、正に此地此海岸にありて、同島面積に比し、六万里に對して、海岸線一里の割合となれり。
- (ロ) 北州島の海岸線は、全長凡そ六百二十八里餘にして、北海に面する海岸線は、殆んど一直線の状態となり、屈曲少なく、従つて良港に乏しく、東南岸に到れば、稍々見るべく、膽振灣、厚岸灣、根室港あり、津輕海峡に入れば、函館港の如き良港あれども、是より西北の方日本海に到れば、又屈曲なく、従つて良港少なし、されば同島面積に比し、八万里に對して、海岸線一里の割合となれり。
- (ハ) 四國島の海岸線は、全長凡そ六百七十五里餘にして、面積の小なるに拘らず、海岸線は、他の諸島に比し、甚だ長し、即ち西方海岸に到りては、屈曲破綻相

四國島海岸

北州島海岸

九州島海岸

交錯し、之れに次ぎて、瀬戸内海に瀕する海岸延長大なり、されば面積一方里半に對し、海岸線一里の割合となれり。

- (ニ) 九州島の海岸線は、全長一千八百四十六里餘あり、瀬戸内海太平洋の東岸に於ては、多少破綻ありと雖も、又た一直線に見ゆる所あり、されど一度び、南端佐多岬を西に迂回し、西北海に出づれば、屈曲小綻出入交々相犬牙し、其の港灣の多きと、他の諸島の到底及ばざる所にして、海内の良港は、實に此地方の海岸に屬し、同島面積一方里半に對し、海岸線の延長一里となれり。

臺灣島海岸

- (ホ) 臺灣島の海岸線は、全長凡そ三百五十二里餘なり、全島の輪廓殆んど一直線の楕圓形をなし、西岸の南北兩部に於て、稍々其の出入港灣を見ると、雖も東岸に到りては、斷岸絶壁従つて記すべき港灣なく、同島面積六万里に對し、海岸線一里の割合となれり。

以上の觀察により、之を推測すれば、我が國の海岸は、面積に比して長く、従つて港灣出入に富むと云ふべし。殊に本州の西南部、四國及び九州の海岸線延長著しく、其面積に比し、長大なるは、尤も注意すべき點にして、我が國古來の文運が、

西南地方に發源し、漸次東北地に波及し。又太平洋沿岸の地、日本海沿岸に比し、早く進捗せしは、蓋し故なきにあらざるなり。

六〇 我が國土地發育

我が國地體の基礎と稱すべき部分は、太古代に屬し、片麻岩、蛇紋岩、石英岩、雲母片岩等の變質岩よりなり、濃飛高原、阿武隈山系、陸奥山脈、四國山脈及び九州の西北、杵築、天草半島等に露出す、されど未だ化石を含まず、此上に古生代の部分ありて、粘板岩、硬砂岩、石灰岩、砂岩、輝石、燧岩等を含みて、廣大なる區域に露出し、管束植物、不正尾甲、鱗魚類、海百合等の下等動物の化石あり、又た此時代古火成岩なる花崗岩盛んに噴出し、地盤に大變動を生じ、以て我が國地體をなす、山脈の方向を確立せるが如し、次ひで中生代の岩層は、此の上に位し、砂岩、泥灰岩、白雲岩、石膏、粘板岩等を含みて、北上山系、陸前、加賀、越前、四國の沿岸、東海道地方に露はれ、羊齒科、蘇鐵科、松柏科及び蝨蟲類、有袋類等動物の化石を含む、されど本代の面積は、甚だ狹隘なり。

新生代岩層中の下部、第三紀は、其露出頗る廣く、砂岩、砂利、頁岩、粘土、泥灰岩及び

重要なる石炭層、石油産地を含み、前代化石の外、哺乳類にて象の祖先、猛兇類、張角獸等の化石ありて、我が國到る所に現はる、又前代より活動し、繼續する火山作用は、其極度に達して、所謂造山力著しく加はりぬ、斯くて上部なる第四紀洪積統に到り、砂礫、粘土、塩母等の累層ありて、象齒を出たし、又人類の遺跡及び石製品、土製品、貝製品等の遺物を含有し、又火山の噴出物多く、各所に堆積して、我が國土に一大變形を存し、更らに上部なる沖積統は、最新の地層として、現時の海岸、又は河川の流域に、一大平野を作り、以て我が豊草原の國土を形成し、今尙ほ繼續しつ、人口稠密、交通便利なる區域は、正に是れ此層上に位せるなり。

六一 我が國地質構造

我が國は數千の島嶼、相連鎖して一帯をなし、西南より東北に向つて、斜に横はり、アジア大陸に向ひて、三大彎弓形をなし、北なるは、千島列島にして、北彎と云ひ、南なるは、琉球列島にて、南彎と稱し、中央は、本州、北州、四國、九州にして、中彎と云ふ。中央彎の北翼を、北東より南西に走る隆起帶は、樺太山系と稱し、北方樺太島に起り、北州島を中斷して、本州に入り、中央を縦貫して走る、又た南翼をなし、西南よ

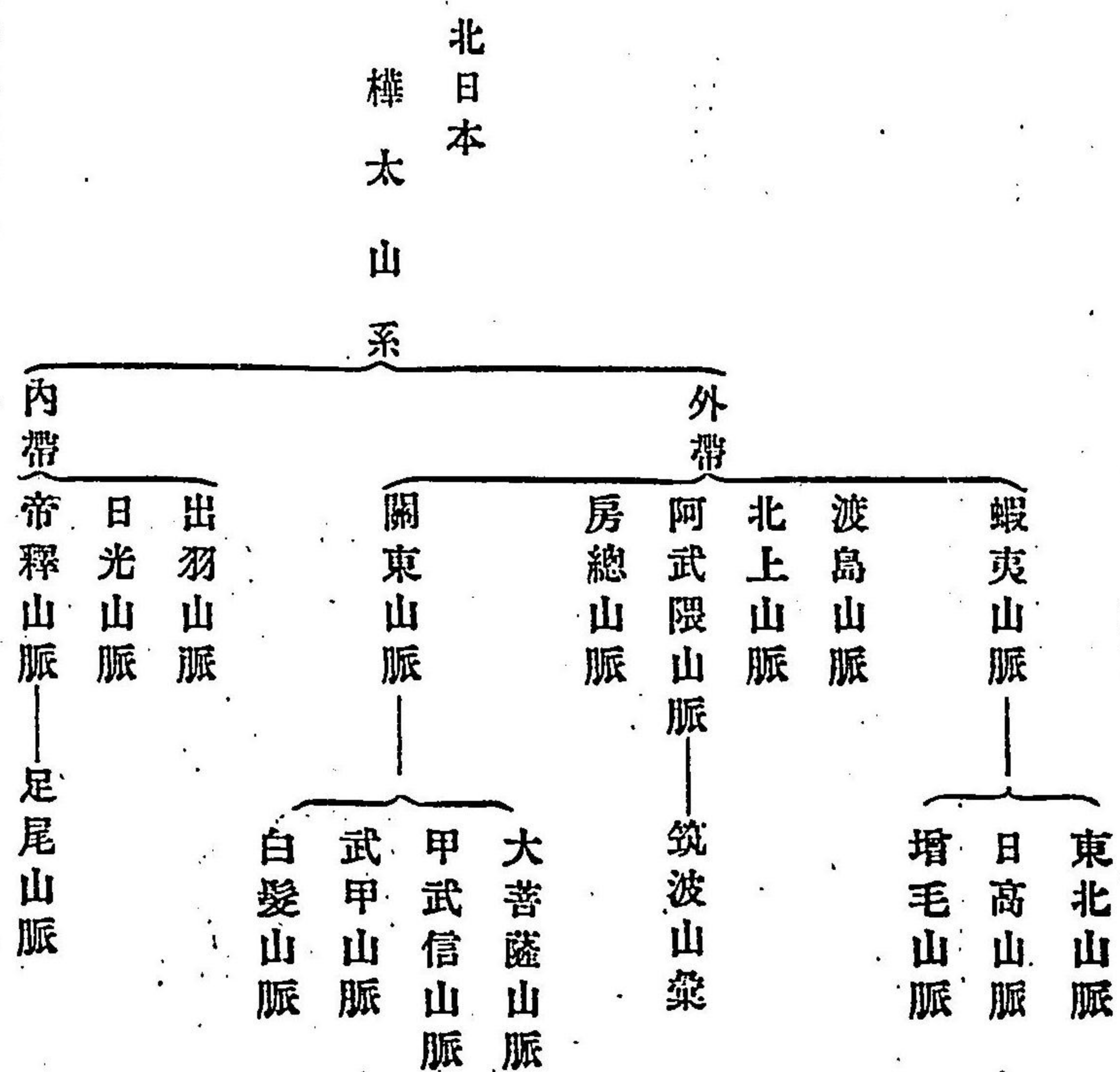
崑崙山系

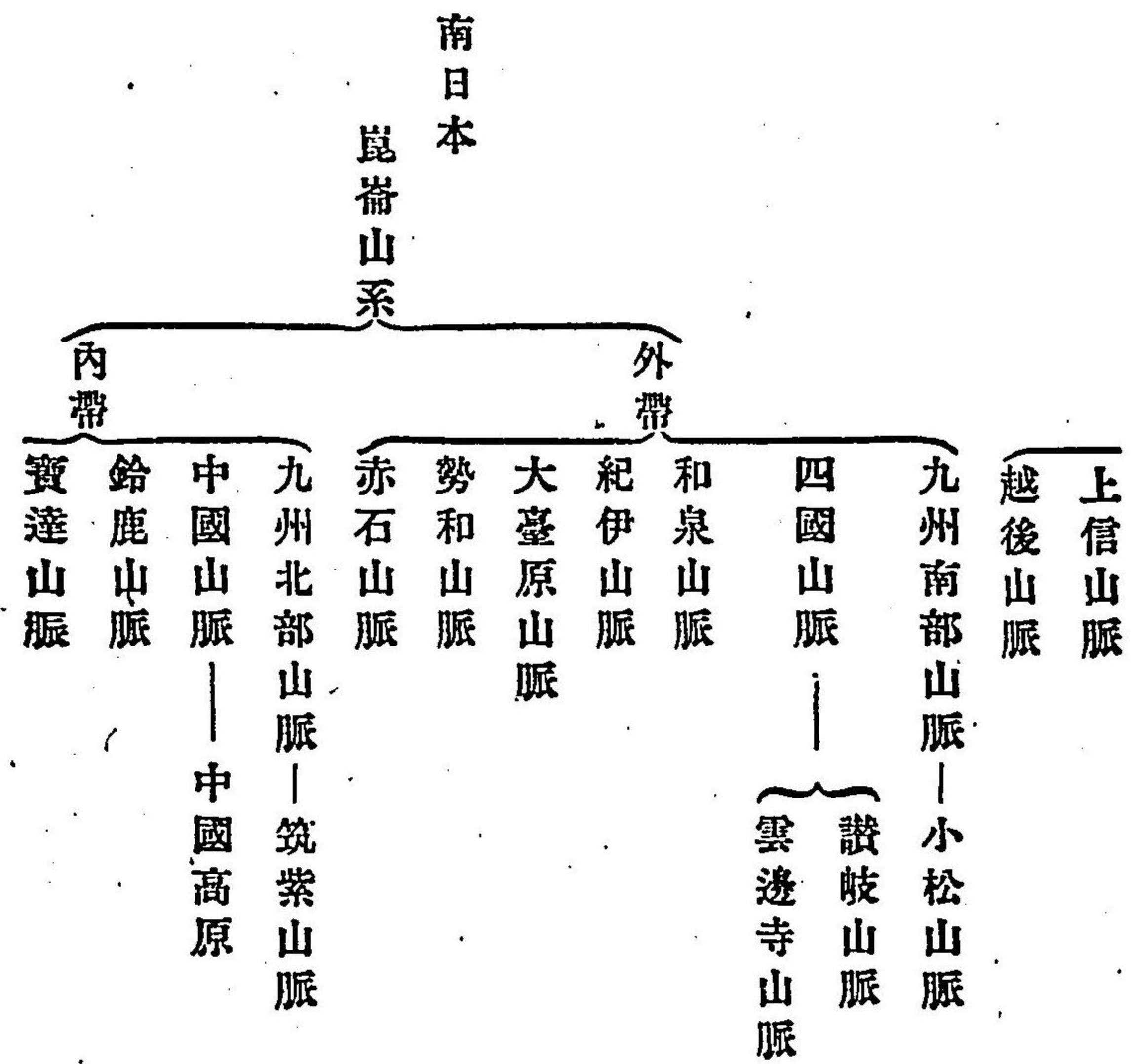
南日本
北日本
表日本
裏日本

本邦地理詳説

り北東に走る隆起帯は崑崙山系と稱し、支那崑崙山系より引ひて、我が南西臺灣の北東北州に渡り、四國紀伊國を通じて東海道の三河、遠江の境界を貫き、前者樺太山系と相接合す、即ち此接合衝觸の地は、本州島の中位にありて、幅員尤も廣く、我が土を南北に分つ、故に地學者は、此隆起帯を基とし、以南を南日本と稱し、以北を北日本と稱す、而して北日本と南日本に於て、東南太平洋に瀕するの地は、新舊の水成岩及び最新の者になり、地層整然として、排列し、火山頗る少なく、一帯凸形をなす、之を外面又た表日本と稱す。反之西北日本海に面する所は、地層構造極めて複雑にして、新舊の水成岩、或は火成岩交々露はれ、加ふるに火山の隆起頗る多く、泥流相重疊堆積し、一帯凹形をなす、之を内面又裏日本と稱せり。南日本に於て、崑崙山脈に屬し、外面の山脈を構成せるものは、九州南部山脈、四國山脈、和泉山脈、紀伊山脈、和勢山脈、赤石山脈等にして、内面の山脈は、九州北部山脈、中國山脈、寶達山脈、飛驒山脈、木曾山脈等なり、更らに北日本にありて、外面山脈を構成せるものは、蝦夷山脈、渡島山脈、北上山脈、阿武隈山脈、房總山脈、關東山脈等ありて、其の内面の山脈には、分水山脈、出羽山脈、越後山脈、日光帝釋山脈等なり。

第一章 大日本帝國自然地理學





六二 火山脈

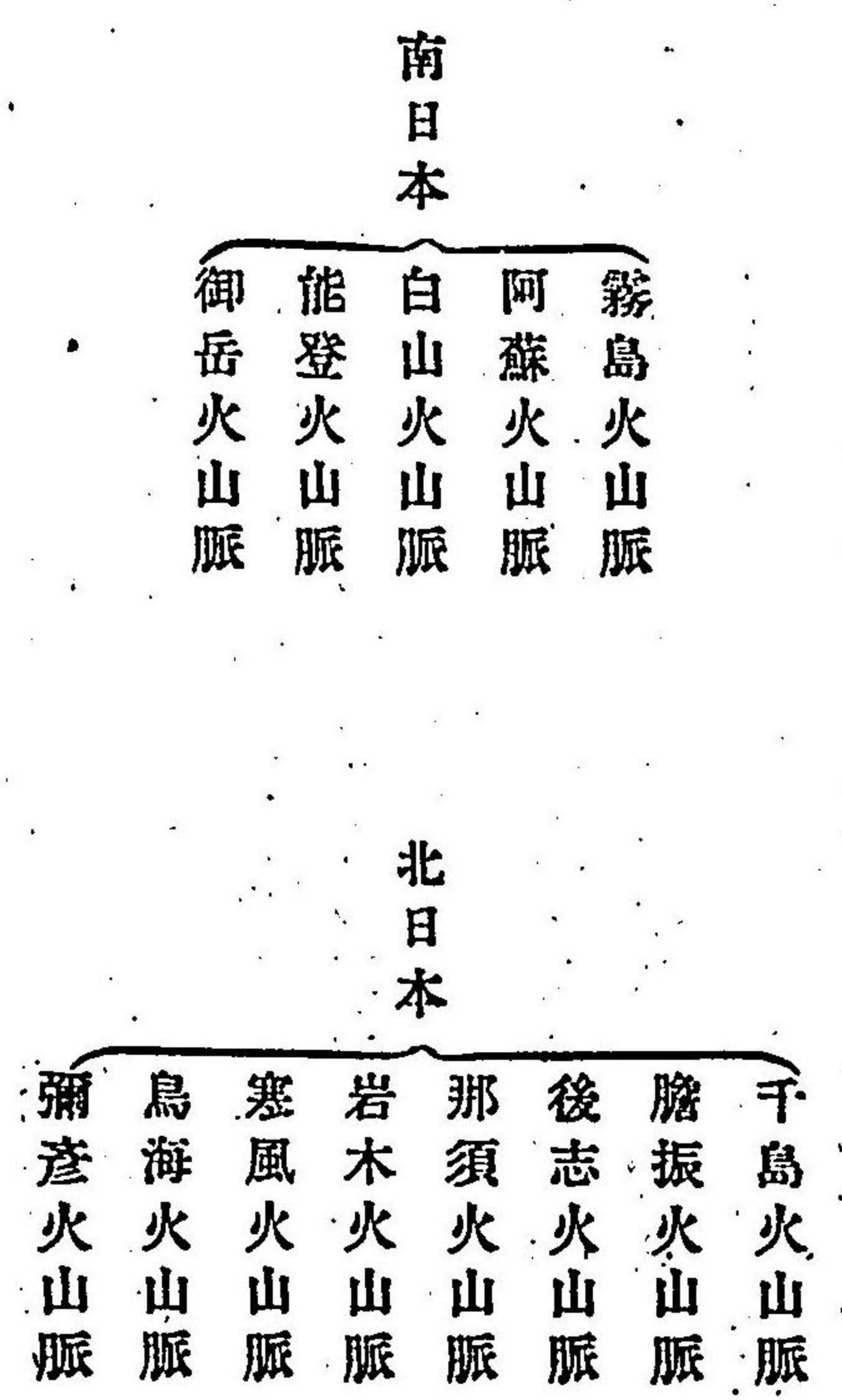
現今地學者の説によれば、世界の火山脈は、太平洋沿岸、近く相併行して、多くの火山あれども、大西洋に於ては、火山脈海岸直角に走り、且つ火山寡なりと、而して我が國の火山は、實に此の太平洋に位し、火山脈相併行して走るものとす。

我が國の火山脈には、其の重なるもの三つありて、第一を富士帶火山脈と稱し、崑崙山脈と、樺太山脈との衝突點に當り、南洋マリアナ群島に起り、小笠原島、伊豆諸島を通じて、本州に入り、富士淺間八ヶ岳より、越後妙高山、焼山に到る。第二は千島火山脈にして、露領カムチャツカ半島に初まり、千島列島を過ぎ、北州島に入り、膽振根室、後志火山彙となり、以て本州島に渡り。第三は霧島火山脈と稱し、臺灣の北島に起り、烏島、輿論島、硫黃島等を越えて、九州島に入り、霧島山彙は阿蘇に到り、中帯に接続せり。第四は中帶火山脈と稱し、千島霧島火山脈に屬し、本州島に入るものにして、南するものは、四國の北岸を通ずるものと、中國の北岸、能登火

富士帶火山脈
 千島火山脈
 霧島火山脈
 中帶火山脈

本邦地理詳説

山脈白山火山脈、御岳火山脈となりて、富士火山帯に入り、北より来るものは、陸奥山脈、那須山脈、寒風火山脈、鳥海火山脈、彌彦火山脈となり、富士火山帯に入るものにして、實に本州の中部を縦貫せるもの、其の間又た火山多しとす。



その他、臺灣の北東に於ては、大屯火山彙群聳せり。

六三 火山

我が國は世界屈指の火山國にして、多くは内帶裏日本の方面にあり、其の數凡

主なる火山

そ二百、即ち我が國大山、高岳と稱するもの、大抵火山に屬せり、今之を五大島及び其の屬島によりて區分すれば左の如し。

- 本州島及屬島には、凡そ九十七座ありて、活火山、休眠火山の中主なるものは、**山岩木山、西吾妻山、盤梯山、那須山、淺間山、三原山、富士山、燒山**等なり。
- 北州島及び屬島には、凡そ四十六座ありて、活火山、休眠火山の中主なるものは、**良牛山、硫黄岳、雄阿寒山、樽前山、駒ヶ岳**等なり。
- 四國島及び屬島には、凡そ三座ありて、活火山、休眠火山の顯著なるものなし。
- 九州島及び屬島には、凡そ二十六座ありて、活火山、休眠火山の中主なるものは、**由布岳、温泉岳、阿蘇山、活霧島岳、櫻島**等なり。
- 臺灣島及屬島には、凡そ十一座ありて、活火山、休眠火山の中主なるものは、**大屯山**なりとす。

六四 温泉

温泉は、火山地方に多きを常とす、されば我が國の如き、火山脈縦横に貫通し、火山噴出の多き地方は、勢ひ温泉の數饒多なるは勿論にして、凡そ一千餘あり、就中

尤も著名なるもの、凡そ四百餘、即ち本州島に三百餘。北州島に二十餘。四國島に九餘。九州島に凡そ七十餘、臺灣島に凡そ十二あり。而して我が國の温泉は、多く硫黄泉に屬し、之れに次ぐものを鹽類泉、食鹽泉として、炭酸泉、鐵泉は極めて少なし、今各地方尤も顯著なるものを舉ぐれば左の如し。

五大島の温
泉

●本州島。草津、鹽原、箱根、熱海、修善寺、和倉、有馬、城ヶ崎、
●北州島。下湯川、湯有内、足山溪、登別、
●四國島。道後、
●九州島。阿蘇、別府、山鹿、小濱、
●臺灣島。北投、

六五 地震

我が國は、又た世界上有名なる地震國にして、微震を通算すれば、平均一日一回半の割合となり、所謂大地震と稱すべきもの十一年十二年目に一回ある事となり、彼の安政二年江戸の大地震の如き、近く明治二十四年濃尾地震、明治二十七年庄内地方の震動の如き、今尙ほ人口に喧嘩する所なり。

我が國の地震は、所々頻繁の數を異にし、又た震動の強弱ありて、西南地方は、概して地震の度數少なく、又た強さも弱し、然れども富士火山帯近傍、那須火山脈、御岳火山脈等の近傍は、地震尤も多く、作用又た激烈なり。要するに我が國は地震頻繁なりとも、地盤の堅固如何により、之を感ずる度少なく、従つて被害なし、惣て脆弱なる地は、之を感ずること大に、災害亦大なりとす。我が國地震の本源は、勿論火山噴起に基くものなりと雖も、又た地之地震多く、濃尾地震、庄内地震、陸羽地震の如き之れが適例なりとす。

六六 河川

我が國は、太平洋の西北に位せる群島にして、其の幅の狭長は、以て大陸の如く、大河長流を見出し能はずと雖も、山岳丘陵に富み、氣候温和にして、四圍海水の暖流ある結果、降雨饒多なり、従ひて、水流河川夥しく、灌溉の利を與ふ事大なり、されは山間には、蒼鬱の樹林多く、平野原土に豊饒なる耕地も少なからずと雖も、地形の狭長なる山脈の縦横に走る結果は、爲めに水流をして急激ならしめ、舟運の便顯著ならず、時に或は沿岸の地水害を蒙ること屢々ありとす、故に我が國の河川

本邦地理詳説

は所謂上流中流と稱する者にて、谿谷の間に狂奔する細流と云ふべく、彼の下流を有し、航通運輸の便益を興ふる下流性のものは極めて稀なりといふべし。

我が國は南北に脊骨をなせる大山系大火山系と東西に走れる富士火山帯ある爲め、河川の分水界線縦横に錯在し、水流各々其の方向を異にし、或は長く、或は短かく、流れて海に入る、今各州島に就き、其の主なる分水線河流を擧ぐれば、

本州島河川

本州は、北方奥羽地方に於て、分水山脈を分水界となし、之れより東流西流するを以て、河川短かきと雖も、之と平行して流るゝ者は、稍々長く、大河にして灌漑の利あり、彼の北上川、最上川の如き是れなり、中部は元來土地廣濶なるを以て、長流稍々多く、殊に縦谷を流るゝ者は、尤も長大なり、分水線は、富士火山帯を中心とし、縦横十字形をなし、河流は其の一點を基礎とし、各方向に流れ、沿岸の地平野多し、彼の利根川、信濃川、木曾川、天龍川、大井川、神通川等の如きは其の適例なり、次に西南近畿、中國地方に於ては、近畿の中部に地溝帯あり、左右の山脈より分流せる稍々長大の大河淀川を見ると雖も、其の他に於ては、小分水界の所々に聳立し、爲めに河流狭小なり、殊に中國地方にありては、中央山脈の分水界をなせるを以て、

北州島河川

従つて長大の河流をなさず、水域の平野著しきものなし。

北州島は中央に丁字形の山脈あり、且つ地形の四角にして、廣濶なれば、割合に長大の河流ありて、水域の平野を見出し得べく、彼の石狩川、天鹽川、十勝川、常呂川等の如き是れなり。

四國島河川

四國島は、中央に脊椎山脈の走るありて、南北の分水界をなせり、故に諸大河は、皆之を以て界とし、東西南北流走し、只だ吉野川は、縦谷を流るゝを以て、最も長大なるものとす。

九州島河川

九州島は、北に九州北山脈、南に九州南山脈聳立連貫すと雖も、大體に於ては、其の分水線は、南北に亘り、諸川は、之れに分水せらるゝ故に、長大なる河川なし。されど地形の北方に廣濶なる爲めに、稍々北部に於て、其の最長なる者を發見し得べく、即ち彼の筑後水白川の如き是れなり。

臺灣島河川

臺灣島は、地形南北に長く、東西に狭く、且つ中央山脈あるを以て、諸川東西に分水せらるゝ事、本州島西南中國の如きなり、されど多少山脈に併行して、奔流する者は、稍々長川なり、乃ち濁水溪、淡水河及び淡水溪は、其の適例なりとす。

六七 湖 沼

我が國は、土地の狹隘山岳の多き爲め、大湖水を見出す能はず、之を大陸の湖沼に比すれば稱するに足るものなし、只周圍十里以上の者十二三里以上の者四十餘あり、其の中大なるものは、本州島北州島に見るを得べし、されど其の所在地の高きにありて灌溉となるもの少なきは、甚だ惜しむべきなり、今其の主なる者を舉ぐれば、大率左の如し。

本州島。

霞ヶ浦、北浦、印幡沼、手賀沼、猪苗代湖、十和田湖、小河原湖、諏訪湖、

芦の湖、河北瀉、琵琶湖、宍道湖、

北州島。

洞爺湖、支笏湖、釧路湖、サルマ湖、網走湖、

六八 地 勢

我が國の地勢は、地形の狹長にして、加ふるに山脈の縦斷して脊梁をなし、且つ火山噴出の激烈なる結果、土地起伏凸凹し、到る所山岳を見從つて所謂高原平原

湖沼の主なる者

と稱すべき地甚だ少なく、偶々之れありと雖も、其の規模狹小にして、到底大陸地方に於けるが如く、大原野を發見し能はざるは、又た論を俟たざる所なり、今左に我が國原野の一斑を見るべし。

本州島。本州島主要の部分に占め、面積の殆んど七分の四は、此の高原地にして、彼の中央高地、紀伊高地、中國高地等は、其の著しきものなり。

平原は、多く河流の沿岸に沿ひ、所謂沖積層平原に屬し、交通便利、土地肥沃にして、耕耘に適し、縱令其の稍々荒瘠なる者なりと雖も、牧畜業を營まれ、即ち北上川に於ける北上平原、最上川に於ける最上平原、四圍山脈を控ゆる會津平野、信濃川にありて越後平原、利根川其の他支流の灌域に關東平原、木曾川に於ける濃尾平原、淀川にある阿倍野平原等は、其の主なる者にして、尙ほ沿岸溪谷の小平野に到りては、一々枚舉するに遑あらず。

北州島。北州島は、山脈縦横に十字形を以て貫登せるが故に、高原少なしとせず、彼の北東山脈、日高十勝等は、其の著點なり、平原に到りては、谿谷平原、沖積平原多く、尤も廣大なるは、石狩川沿岸に於ける石狩平原、南東千島帶山脈と、日高山脈

本邦地理詳説

との間に挟在し、沿海の地に跨かれる十勝平原、釧路平原は有名なる者にして、土地の質、土壤の如何多少、荒瘠の比難は免かる能はずと雖も、多くは耕耘、牧畜に適する好地なりとす。

四國島地勢

四國島。四國島は中央を南北に走る脊梁山脈を除く外は、大抵高原地にして従つて廣大なる平野の存するあるなく、只喜野平野、讚岐平野は稍々見るに足るされど、地味の肥沃にして、農業耕耘には尤も良適地なりとせり。

九州島地勢

九州島。九州島は南北に二大山脈聳立し、其の間高地を以て連続せり、故に九州全島は此の高原高地に屬する者と云ふべく、彼の日向の如きは全國一大高原をなせり、されば九州島に於ては曠漠たる平野の存するあるなく、只筑後川、川内川、菊池川、緑川等の沿岸に稍々稱すべきありて、地味極めて肥沃、且つ氣候温暖なるを以て、農産地として我が國第一なり。

臺灣島地勢

臺灣島。臺灣島は中央山脈南北に聳貫し、多少東部に偏倚するを以て、所謂高原と稱すべきは、全島東部に偏在せり、平野は多く全島の西部河流の沿岸にありて、地味肥沃、農耕に適し、加ふるに氣候の温暖なるを以て、未だ開墾修地せざる所

は、樹木蒼鬱として、繁茂し一大富林をなせり。

六九 氣候

我が國は太平洋の西北隅にある無數の島嶼より成因するを以て、氣候概して寒暖乾濕共に宜しく、天然の中和を得たり。されど地形の東西に狭く、南北に長くして、山脈の聳立雜錯し、且つ一帯帯水を距て、アジア大陸に對する爲め、氣候上或る地方にありては、非常なる炎熱寒冷を覺え、或は寒暑著しく差を見るべく、又た降雨の多寡季節を異にするあり、總て一地方に於て時々一様ならざる事ありとす。

古來地理學者の論說によれば、大陸の東岸は西岸に比し、一般寒暑共に酷烈なるは東半球、温帶地方に於ける特性なりといふ、されば我が國は對岸北米の南岸に比すれば、大に寒暑を覺ゆると雖も、尙ほ之を東隣シベリア、滿洲、朝鮮等に較すれば、非常に温暖なり、是れ蓋し我が國島嶼國たる所以にして、之を要するに、我が國の氣候は、島嶼國に拘らず、純然たる海洋的氣候(又た島嶼的氣候)よりも、寧ろ大陸的氣候を顯出する傾向あり、故に我が國氣温の分布、寒暑の差違等に關し、氣候

本邦地理詳説

全般を概評すれば、大陸的氣候、海洋的氣候にもあらざる所謂大陸海洋的中间氣候なりといふ可きなり。

七〇 温度

我が國は、四面環海の國なりと雖も、温度は他の諸國同緯度の地に比較すれば、稍々寒冷なるを覺ゆ、是れ蓋し暖流黒潮の恩恵を蒙る事甚だしと雖も、又た廣漠たる平野シベリヤの寒地に近く、冬季西北風の吹き來り、我が國の氣温を低降ならしめ、且つ樺太千島の寒流、國の周圍を環流するに外ならざるなり。

我が國は、南北に長く、東西に狭く、緯度の差殆んど三十度に亘るを以て、自から氣温上差異あり、且つ山岳に富むを以て、各部多少の相違あるは、自然の現象にして、我が國の最寒地は、北海道旭川近傍にあり、最暖地は、臺灣の恒春、及び熊本縣熊本市なり、即ち前者は攝氏〇、四十六度にして、後者は、三十八度乃至四十度に亘れり。

今左に各地方の温度の概況を擧ぐれば

本州島

本州島は、南岸及び東岸に沿する土地は、暖流黒潮の影響を蒙

本州島温度

ること甚しく、爲めに氣温中和其の宜しきを得、寒暑の差著しからず、反之日本海に面する地并に南北の地方は、親潮の寒流に洗はるゝを以て低温となり、又た中央の高地四周の山脈により圍繞せらるゝ地方は、一層低温にして、寒暑の懸隔も、亦甚しきが如し、本州府縣所在地の温度を見れば、實に左の如し。

地名	年平均	最高温度	最低温度
下關	一五、二	三三、三	(一) 一、一
廣島	一四、七	三三、八	(一) 三、〇
吳	一五、一	三四、九	(二) 二、四
岡山	一四、七	三三、七	(二) 三、四
神戸	一五、二	三六、一	(二) 三、三
大阪	一五、一	三六、六	(二) 三、三
和歌山	一五、四	三五、五	(二) 二、一
京都	一三、七	三六、九	(二) 七、六
八木	一四、四	三五、五	(二) 三、九

宮古	一〇、一	三二、七	(二) 九、二
青森	九、七	三一、一	(二) 二、九
甲府	一三一、一	三六、二	(二) 一〇、九
飯田	一一三、三	三三、七	(二) 二、一
松本	一〇二、二	三二、六	(二) 二、九、五
長野	一一〇、〇	三三、七	(二) 二、二、一
前橋	一三〇、〇	三四、七	(二) 五、四
熊谷	一三三、三	三四、八	(二) 六、三
宇都宮	一二五、五	三四、七	(二) 八、六
福島	一二〇、〇	三五、〇	(二) 九、二
山形	一一一、一	三三、九	(二) 一、〇
濱田	一四六、六	三四、五	(二) 〇、六
境	一四二、二	三二、九	(二) 三、〇
福井	一三六、六	三五、二	(二) 五、五

彦根	一三七、七	三三、六	(二) 三、五
岐阜	一四三、三	三五、五	(二) 三、八
高山	一〇一、一	三五、〇	(二) 二、五、七
津	一四六、六	三四、六	(二) 三、五
名古屋	一四七、七	三六、二	(二) 五、三
濱松	一五一、一	三五、〇	(二) 二、七
沼津	一五二、二	三四、六	(二) 四、〇
長津呂	一六二、二	三四、五	(二) 二、二
横須賀	一四五、五	三三、七	(二) 二、三
横濱	一四四、四	三三、一	(二) 四、二
東京	一三七、七	三四、七	(二) 五、八
銚子	一四四、四	三〇、八	(二) 二、五
水戸	一二八、八	三四、六	(二) 六、四
石巻	一一一、一	三〇、一	(二) 六、〇

本邦地理詳説

北州島温度

地名	平均	最高	最低
金澤	一三三	三四一	(二)三三七
輪島	一三〇	三五〇	(二)二二九
伏木	一三三	三四七	(二)四〇
新潟	一二七	三三四	(二)五五四
秋田	一〇七	三〇八	(二)一〇一
北州島			
札幌	七〇	二九六	(二)二一五
函館	九〇	二八五	(二)二三七
青森	八六	三〇六	(二)二〇八

北州島は、地位我が國の最北部にあり、加ふるにシベリヤの地に接近し、寒潮四周に旋流するを以て、気温寒冷なり、殊に千島列島は、寒潮の衝點にして、寒冷甚しく、又た中央高原の地は、一層凜烈なるが如し、然れども北岸日本海に瀕するの地は、稍々温暖なるが如く、是れ黒潮暖流の餘脈を受くる結果なりとす、今道廳支廳所在地の温度を擧ぐれば左の如し。

四國島温度

地名	平均	最高	最低
上川	五八	三〇八	(二)三四八
宗谷	五九	三〇四	(二)二四〇
網走	六一	三〇二	(二)二四四
十勝	四七	三一九	(二)三二七
釧路	五〇	三〇〇	(二)二二〇
根室	六〇	二九六	(二)二一八
紗那	四五	二六〇	(二)二五二
四國島			
高知市	一五六	三五四	(二)三三七
徳島市	一五四	三四八	(二)二二四
多度津	一五三	三三四	(二)一九

四國島は、南太平洋に莅み、黒潮の影響を蒙ること甚しと雖も、中央山脈は、本島北方地の気温を遮害すること多く、倚りて南北多少の相異を見る、今縣廳所在地の気温を擧ぐれば左の如し。

九州島温度

本邦地理詳説

松山市

一四九

三四五

(一)三四

九州島及び西南諸島

九州島は、南部黒潮の影響を受け、盛夏に到りて、或る地方の如きは、我が國最温度に達するあり、然れど冬季は、甚だしく寒冷に到らず、概して寒暑の差懸隔なし、而して西南諸島は、我が國の南部に位するを以て、暑熱なりと雖も、其の實際然らざる所以の者は、海上吹き来る涼風暖風ある結果なり、今縣廳所在地及び或る特別地の氣温を擧ぐれば左の如し。

地名	平均	最高	最低
長崎市	一五四	三三七	(一)一三
佐賀市	一五五	三六四	(一)二八
福岡市	一五一	三三六	(一)一六
大分市	一五二	三三七	(一)三二
宮崎市	一六七	三六〇	(一)四一
鹿児島市	一六五	三三四	(一)一一
熊本市	一五三	三五一	(一)五五

臺灣島温度

臺灣島

臺灣島は、我が國最南の地位にあり、且つ熱帯圏内に近きを以て、氣温概して暖く、夏季に到りては、酷烈なる暑熱を感じ、冬季に到りても、全く霜雪を見ざるなり、今三縣所在地及び其の特別地の氣温を擧ぐれば左の如し。

地名	平均	最高	最低
沖繩市	二二〇	三二六	八六
石垣島	二三一	三三〇	九五
嚴原町	一四六	三四六	(一)五二
臺北	二二二	三六二	四六
臺南	二二七	三四二	五八
臺中	二一八	三三八	四八
恒春	二四二	三三四	一〇二
澎湖島	二二二	三二五	一一〇

七一 雨 雪

我が國は四方回らずに海洋を以てし、暖流は殆んど其の沿岸を洗ひ、陸上到る

表日本の雨
裏日本の雨

本邦地理詳説

所に、山岳聳立するあり、加ふるに多少濕氣を輸送し來る季節風、又は貿易風の影響を蒙る事あれば、我が國概して降雨多き地、灌漑の利便あり、且つ所々清泉の湧出して、人類生活に必要な飲料水を缺除せざるは、眞に是れ天恵といふべきなり、而して我が國の降雨量は、地方各部に於て、多少相異し、南より北に行くに従ひ、次第に減少す、乃ち九州地方の降雨量は、北邊地方の殆んど三位に達するは、正しく之を證明する所なり、故に地位、地勢、氣候、季節によりて、多少相異し、夏季は、表日本雨多きも、裏日本寡少に、冬季は、裏日本雨雪多く、表日本到つて少なく、且つ晴天白日の快晴を見る、是れ蓋し季節風の然らしむる所以にして、兩海岸の乾濕は、共に正反對の位置にあればなり、然れども數多の山脈に遮断せられ、此の南北の濕氣を受けざる本州の中央部、及び瀬戸内海の四邊は、一般雨量寡少なりとす、されば我が國の尤も降雨量の多きは、薩南大島の附近にして、最寡少は北州網走の近傍なり。

大島	四、〇三三	湖岬	三、一三七
高知	三、一三一	金澤	三、九九〇

第一章 大日本帝國自然地理學

岐阜	二、八一	沼津	二、七八七
那覇	二、七一	横濱	二、六四一
宮崎	二、六〇八	臺中	二、五八五
臺南	二、五七九	臺北	二、五六四
伏木	二、五六〇	恒春	二、五五二
濱松	二、四九七	福井	二、四五二
輪島	二、二五六	飯田	二、二一四
麻兒島	二、一六七	秋田	二、一四一
横濱	二、一三〇	名古屋	二、一二八
銚子	二、一一八	津	二、一一三
京都	二、〇五九	彦根	二、〇四八
嚴原	一、九八五	和歌山	一、九八〇
境	一、九三四	東京	一、九一二
熊本	一、九一五	大阪	一、八七九

本邦雨量平均降水量圖



函館 二二一七
山形 一二三四

十勝 二二七六
上川 一二二九

襟裳 一一二一
根室 九七〇
宗谷 九七〇
札幌 八九六
網走 七三一

本邦地理詳説

石巻	福島	前橋	紗那	福岡	甲府	宇都宮	濱田	吳	佐世保	佐賀	宮古	徳島	新潟
一、二二六	一、二九五	一、三一二	一、三九〇	一、四五七	一、四九六	一、五四三	一、五八九	一、六二〇	一、六三三	一、六三三	一、七九〇	一、八三七	一、八五八
岡山	多度津	長野	松山	熊谷	松本	廣島	青森	澎湖島	水戸	横須賀	神戸	長崎	八木
一、二二一	一、二八五	一、二九六	一、三七四	一、四二七	一、四八八	一、四九九	一、五八〇	一、六二〇	一、六三一	一、六四一	一、七四四	一、八三三	一、八五六

本邦地理詳説

雨雪に關し、特に記載すべきは、梅雨と稱し、毎年六月、氣節風の交換期に際し、連日雨天を見、次いで九月に到り、再び氣節風の交代期に霖雨と稱し、降雨濛々鬱陰覺ゆ、一つは日本海岸、北陸羽前及び羽後の地方積雪特に多く、其の深さ一丈乃至二丈あり、更に本島の内部山地に於て、特に降雪少なからざる所あり、是れ地位の關係上甚だ不思議に屬する現象なりとす、而して我が國全國中、積雪の地は越後高田を以て最とし、此下に高田ありとの俚諺は、以て其の真相を伺ふに足るべきなり。

七二 日本風

我が國は、地位大陸と大洋の間に挾在し、以て温度の變更氣流の方向に變化を來たすのみならず、山脈の存在海陸の分布等により、風位不定にして明ならず、然れども實際細見すれば、多くは北、又た西北にして東風南風は、甚だ少なし、是れ蓋しアジア大陸の近きにある所以なり、即ち夏季は、特に太平洋より大陸に向つて進行する南風、又た東風多く、冬季は、大陸より吹く北西、又は西風の多きを見る、是れ我が國の風帶所謂季節風あるを以てなり。

我が國過往年來三月九月の氣温交代期に當り大風あり、特に九月を以て、颶風と稱し、所謂二百十日、二月二十日の厄日と云ひ、漁民農民の警戒恐懼する者なり、而して此の颶風は、規模宏大にして、激烈を極め、中心は多くヒリツピン群島の近海に起り、夫より東北に進み、九州四國の邊に、斜に本島を通じ、終に北州に終り、其の通道人畜の損害、實に夥多慘酷を極む、此の風は概して太平洋は日本海側よりも災害を蒙る事甚しきが如し。

今三十五年九月二十八日に於ける我が颶風の徑路及び速度を示さんに、

徑路 二十一日、呂宋の東方に發生せる颶風(第二中心と假稱す)二十八日

朝迄琉球の東方に在りしが、別個の颶風(第一中心と假稱す)は、房總の南岸より襲來し、二十八日午前八時房州の南端布良を北西に進行し、同八時二十分横須賀の西方を過ぎ、進路を北東に轉じ、十時東京の北邊を掠て、十時二十分足尾近傍を經、十一時新瀉より日本海に出で北上せり、斯くて呂宋より北上せる第二の中心は、琉球の南東沖合より、二十八日午後三時紀伊の南端潮岬に陸上し、同五時大王崎の西方を經、同三十分津の西方を過ぎ、北東の進路を取りて、六時彦根、七時三十分